京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究

小森　俊寛、上村　憲章

1．はじめに

平安京跡と重複して遺存している中世・近世・近代京都の都市遺跡及び、それらの都市（京域）近郊に位置する諸遺跡からは、長年に渡る数多くの発掘調査に依って、各時代おいて類似した様相を持つ遺物が、大量に出土している。遺物には、土器・陶磁器・瓦類・木製品・土製品・金属製品・石製品など各種のものが見られるが、これらの中で瓦類を除くと土器陶磁器類が最も大量に出土している。出土遺物は、遺跡を構成していた重要な要素の一つであり、遺跡を理解していくうえで欠くことのできない基本資料であることは言うまでもないが、常に数多く出土する土器陶磁器類が遺跡、遺構の年代を推定する根拠として、最も多用されていることも現実である。土器陶磁器の年代観を根拠として、遺跡の歴史を語ることは、考古学の世界では一般的な状況であり、京都市域内の発掘調査成果の報告においてもその点は例外ではなく、遺跡、遺構の年代観の多くは土器陶磁器の年代観を根拠としている。

紀年銘木簡の出土例の増加や年輪年代法の研究の進展により、土器陶磁器以外で遺跡の年代を推定出来る機会も増えているが、それらの年代観を、関係性の中で検証することが可能なものは、前後に継続出土する例が多い土器陶磁器類が最も有力な資料であり、そのことに大きな変化はない。限定的な絶対年代資料とは、相互補完的な関係にあるものである。歴史時代においても、土器陶磁器の編年的研究は、遺跡、遺構の歴史を理解し位置ずける前提となる基礎的作業であり、将来に渡る重要な課題であると考えている。土器陶磁器を主体とすることの多い遺物の整理研究を抜きにしては、実際の発掘調査の報告に際しても、遺跡、遺構の曖昧な時代認識に基ずくものとなり、行政発掘調査の主題たる歴史的遺跡の記録保存も、基本的条件を満たしたものとも成らないだろう。

このような基本的な認識を持つていることにもよるが、私達と平尾政幸、原山充志ら他、当研究所の調査員数名と共同作業のかたちで、土器の整理、研究[(1)]を継続的に進めている。本論も、本来的には連名とすべきであるが、今回の実務的作業を中心的に行なった私達２名の文責とした。

平安京跡及び、以後の重複する都市遺跡からの出土遺物には、土器陶磁器に限っても、土師器、須恵器、黒色土器、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、国産施釉陶磁器、輸入陶磁器など、種類も数多く、個々の種類のなかには、食器、貯蔵容器、煮炊具など用途の異なる各種の器形（器種）が含まれている。これらの土器陶磁器も建都以後の1200年間という長い歴史のなかでは、個々の器形の形態変化と共に、種類や器形の組み合わせ（組成）などが、各時代において大きな変化を示している。

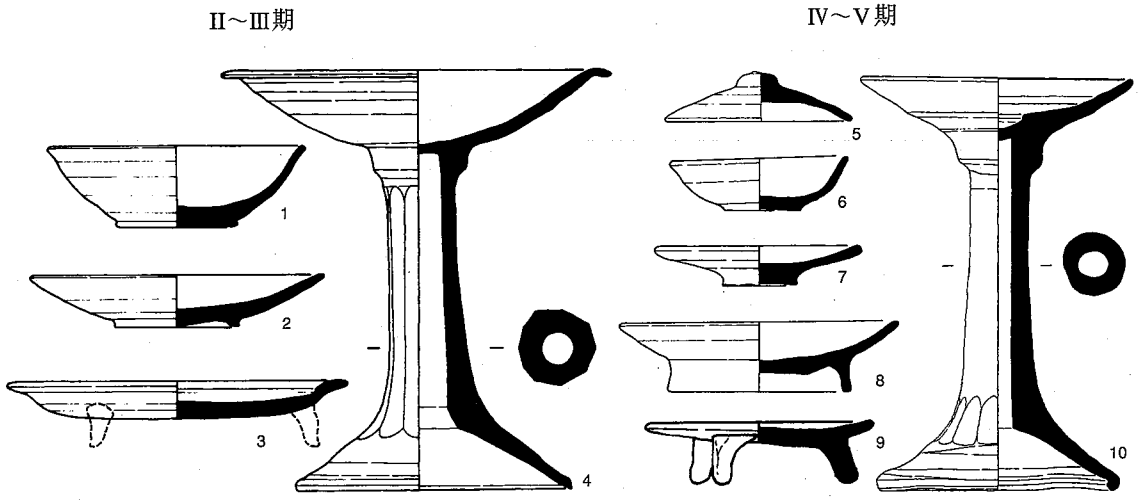
私達は、京都の平安時代から明治時代にわたる、都市遺跡において、この変化する土器様相の全体像に対する現在の認識を、公に提示すべきであると考えている。そのことに依って、ほかの研究者たちとの間に相互批判による認識の深化が生まれ、近い将来にはより実体にそくして同じ基準を共有した土器陶磁器の年代観が、確立できるものと考えている。しかし、土器陶磁器に限っても、総体をここで示すことは量の面からも難しい。本論では、京都の都市遺跡から最も長期間に渡り継続的に出土が見られ、土器陶磁器の型式編年観の軸としている土師器の食器形態にしぼつて、その認識の全体像を出来るかぎり提示しておきたい。その他の器形の土師器や土器陶磁器に関しては、なんらかのかたちで遅れる事なく続けて提示してゆきたいと考えている。

なお、ここでの提示は、認識の現段階での結論部分に重点を置かざるをえない。個々の資料の紹介は、最小限にとどめる、対象とした資料は主に既公表資料であり、出典を明らかとしておくので、ここで扱っている土器群の他の情報は、原資料とともにそれらを見ていただきたい。

2．用語について

土師器の食器形態を主題にするのでその他の種類の土器陶磁器について、ふれることはすくないが、関連上使用することもあり、ここで使用する土器、陶磁器の種類、器形、タイプの名称について記す。

土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、緑釉陶器、灰釉陶器等の種類名称に関しては、京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ[(2)]（白河北殿北辺の調査）の遺物の章に示されている概念と、ほぼ同様の認識で使用する。土師器は、古墳時代以後の酸化焔焼成による軟質の土器とされている。概括的ではあるが基本的な理解ができる概念規定である。しかし、灰釉系陶器、須恵器系陶器に関しては、使用しない。灰釉系陶器は、仕上がりの状態で灰色から白色に近い色調の硬質の、炻器質あるいは陶器質のものについては須恵器に含めて理解している。同報告で常滑焼きの甕をこの名称としている点も考えて、同質もしくはさらに焼き締まっている褐色から赤褐色ものについては、焼締陶器とする。須恵器系陶器とされているものについては、須恵器の系譜をひき、酸化焔焼成に転



図－1　白色土器食器形態

じた陶器と説明されている、これらに関しては、焼締陶器の範疇で理解しておく。

平安時代には、質的には土師器質とすべき軟質で白色の土器が見られる。高杯、皿、椀、などの食器形態があり、鎌倉時代前半期頃までは、少数ずつではあつても、出土はよく見られる。しかし、これらの土器は、成立の経緯からも、伝統的な土師器とは系譜を異にするものであると理解できる。製作技法も、主に轆轤を使用しており、京域で主体を成す土師器とは基本的に異なる。平安時代前期では、椀、皿等は山城産緑釉陶器の素地と同じ製作技法で作製されており、へら磨きが施されたものも多い。用途も土師器や緑釉陶器などよりも限定されたものであったと推定される。器形は、椀、皿、三足盤、高杯など食器形態の他に、壺、蓋などが基本的なものである。現時点では、これらの土器は、白色土器として土師器とは別の種類名称を与えて区別[3]している。生産址の一箇所は、洛北の栗栖野丘陵とその近辺とほぼ特定できる。京域での出土は、平安時代前期から見られる。出土状況における土師器との関連や、京域内で平安時代後期に残る唯一といえる土器の高杯でもあり、状況証拠からではあるが、平安時代後半期の文献資料に見られる栗栖野様器とほぼ特定できる。白色土器に関しては、このような認識を持っているので、図１に一部参考資料は掲載したが、これ以上ここでは扱わない。

平安時代前半期では、器形とタイプの名称にかんしては、平城宮発掘調査報告Ⅶ やⅫ等の報告書[4]で使用され提示されているものを準用する。杯A、皿A、椀Aなど系譜を押さえられるものについては、そのままで使用するが、平安京の独自的なものや、新しく登場すると理解できる形式等に関しては、別の名称としている。平安時代後半期では、その例がふえるが、別名称とする場合は、そのつど説明する。平城宮発掘調査報告書で使用されている種類名称とその概念は、土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など、古代の都城関係遺跡からよく出土する基本的ものについては、京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ（白河北殿北辺の調査）で提示されている内容と基本的には共通したものと理解できる。

なお、土師器食器形態という用語は、古代の土器類の報告で使用例の多い供膳形態とほぼ同義で使用している。椀、皿、杯、高杯、など飲食（食事、宴会など）に主に用いられていたと理解できる器形（容器）に対して使用する。佐原真は、箸、匙など飲食具や、フィンガーボウル、ナプキンなど清浄器具までを含めて食器[5]としているが、ここではそれらは含めずに、飲食容器の枠で狭義に使用する。形態と付している理由は、食器だけでは用途を限定してしまうためである。土師器の杯、皿などの器形には、灯明皿に用いられたとほぼ断言してよい個体の出土例が、各時代を通じて比較的数多い。同じ器形の異なる用途がすでに判明していることによる。

３．土師器食器形態の出土状況

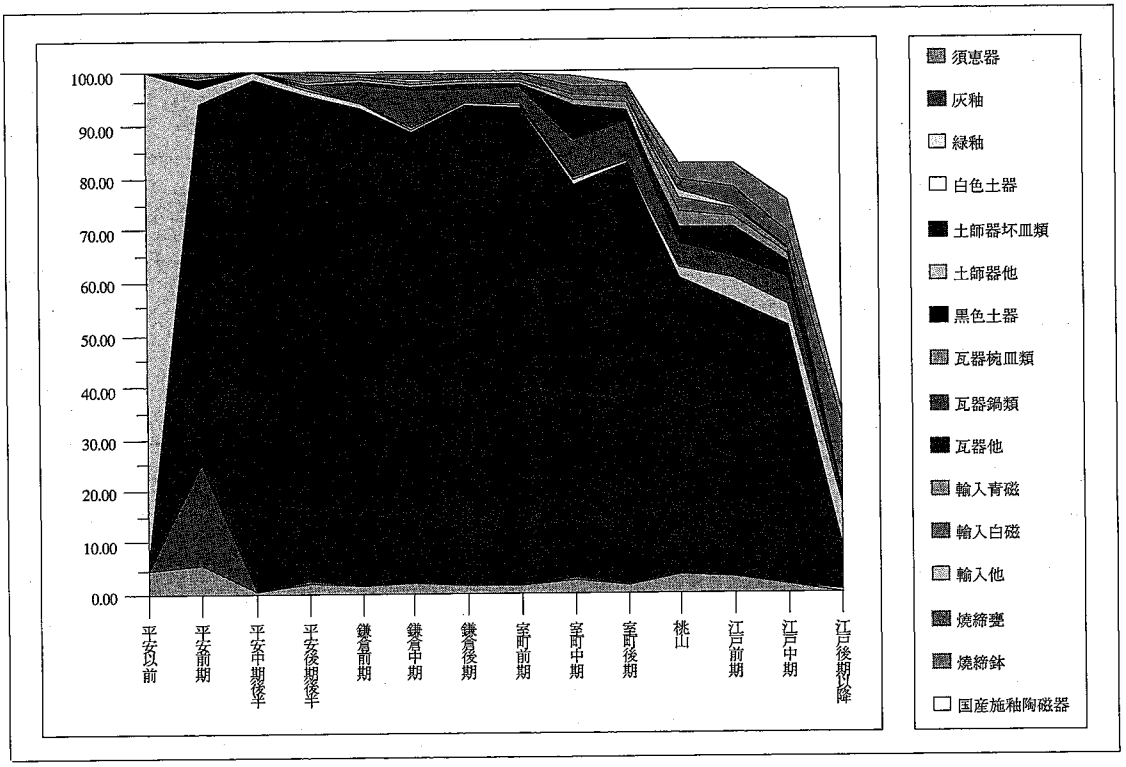
京都の各時代の都市遺跡から出土する土師器食器形態は、平安時代前半期（Ⅰ期～Ⅲ期）では高台の付かない杯、椀、皿、高台が付く杯、皿、他に高杯、盤などが有り、器形はまだ比較的豊富である。しかし、平安時代の後半期（Ⅳ期～Ⅴ期）に入ると、極少数高台付きの皿などが見られるが、高台の付かない杯、皿が大半を占める状況となる。平安時代前期・９世紀第二四半期頃

No.77時期別破片数表（土器類）

	須恵器	灰釉	緑釉	白色土器	土師器	土師器	黒色土器	瓦器	瓦器	瓦器	輸入青磁	輸入白磁	輸入他	焼締甕	焼締鉢	国産施釉陶磁器	土器類合計
平安以前	4	0	0	0	1	75	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	80
平安前期	10	33	1	0	118	6	2	0	0	0	1	1	0	0	0	0	172
平安中期後半	1	0	0	0	186	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	189
平安後期後半	78	5	5	1	3075	34	1	12	26	4	15	35	6	4	1	0	3302
鎌倉前期	84	5	9	0	5306	42	0	30	196	27	18	31	6	32	2	2	5790
鎌倉中期	59	2	1	0	2339	17	0	9	187	22	15	10	14	23	4	2	2704
鎌倉後期	74	2	1	0	4644	39	1	16	113	55	33	9	15	41	7	4	5054
室町前期	36	0	0	0	2480	17	0	26	73	16	15	8	4	20	5	6	2706
室町中期	22	1	1	0	584	11	1	3	54	52	11	6	0	14	12	6	778
室町後期	78	2	2	0	3205	35	0	4	308	75	79	24	8	82	24	79	4005
桃山	15	1	0	0	238	11	0	0	20	11	13	11	6	10	12	74	422
江戸前期	48	1	1	0	838	68	0	2	68	88	32	27	7	56	69	278	1583
江戸中期	20	2	4	0	696	52	0	6	67	44	28	9	3	43	86	347	1407
江戸後期以降	7	1	0	0	205	201	0	1	22	8	5	1	0	330	59	1566	2406
不明	13	0	1	0	581	21	76	0	12	9	11	9	0	14	5	91	843
全体合計	549	55	26	1	24496	631	81	109	1146	411	276	181	69	669	286	2455	31441
					坏皿類	甕他		椀皿	鍋釜	他	青磁	白磁	他	甕	擂鉢	陶磁器	

No.77時期別種類比率（土器類）

	須恵器	灰釉	緑釉	白色土器	土師器	土師器	黒色土器	瓦器	瓦器	瓦器	輸入青磁	輸入白磁	輸入他	焼締甕	焼締鉢	国産施釉陶磁器	土器類合計
平安以前	5.00	0.00	0.00	0.00	1.25	93.75	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
平安前期	5.81	19.19	0.58	0.00	68.60	3.49	1.16	0.00	0.00	0.00	0.58	0.58	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
平安中期後半	0.53	0.00	0.00	0.00	98.41	1.06	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	100.00
平安後期後半	2.36	0.15	0.15	0.03	93.13	1.03	0.03	0.36	0.79	0.12	0.45	1.06	0.18	0.12	0.03	0.00	100.00
鎌倉前期	1.45	0.09	0.16	0.00	91.64	0.73	0.00	0.52	3.39	0.47	0.31	0.54	0.10	0.55	0.03	0.03	100.00
鎌倉中期	2.18	0.07	0.04	0.00	86.50	0.63	0.00	0.33	6.92	0.81	0.55	0.37	0.52	0.85	0.15	0.07	100.00
鎌倉後期	1.46	0.04	0.02	0.00	91.89	0.77	0.02	0.32	2.24	1.09	0.65	0.18	0.30	0.81	0.14	0.08	100.00
室町前期	1.33	0.00	0.00	0.00	91.65	0.63	0.00	0.96	2.70	0.59	0.55	0.30	0.15	0.74	0.18	0.22	100.00
室町中期	2.83	0.13	0.13	0.00	75.06	1.41	0.13	0.39	6.94	6.68	1.41	0.77	0.00	1.80	1.54	0.77	100.00
室町後期	1.95	0.05	0.05	0.00	80.02	0.87	0.00	0.10	7.69	1.87	1.97	0.60	0.20	2.05	0.60	1.97	100.00
桃山	3.55	0.24	0.00	0.00	56.40	2.61	0.00	0.00	4.74	2.61	3.08	2.61	1.42	2.37	2.84	17.54	100.00
江戸前期	3.03	0.06	0.06	0.00	52.94	4.30	0.00	0.13	4.30	5.56	2.02	1.71	0.44	3.54	4.36	17.56	100.00
江戸中期	1.42	0.14	0.28	0.00	49.47	3.70	0.00	0.43	4.76	3.13	1.99	0.64	0.21	3.06	6.11	24.66	100.00
江戸後期以降	0.29	0.04	0.00	0.00	8.52	8.35	0.00	0.04	0.91	0.33	0.21	0.04	0.00	13.72	2.45	65.09	100.00
不明	1.54	0.00	0.12	0.00	68.92	2.49	9.02	0.00	1.42	1.07	1.30	1.07	0.00	1.66	0.59	10.79	100.00
全体合計	1.75	0.17	0.08	0.00	77.91	2.01	0.26	0.35	3.64	1.31	0.88	0.58	0.22	2.13	0.91	7.81	100.00
					坏皿類	甕他		椀皿	鍋釜	他	青磁	白磁	他	甕	擂鉢	陶磁器	



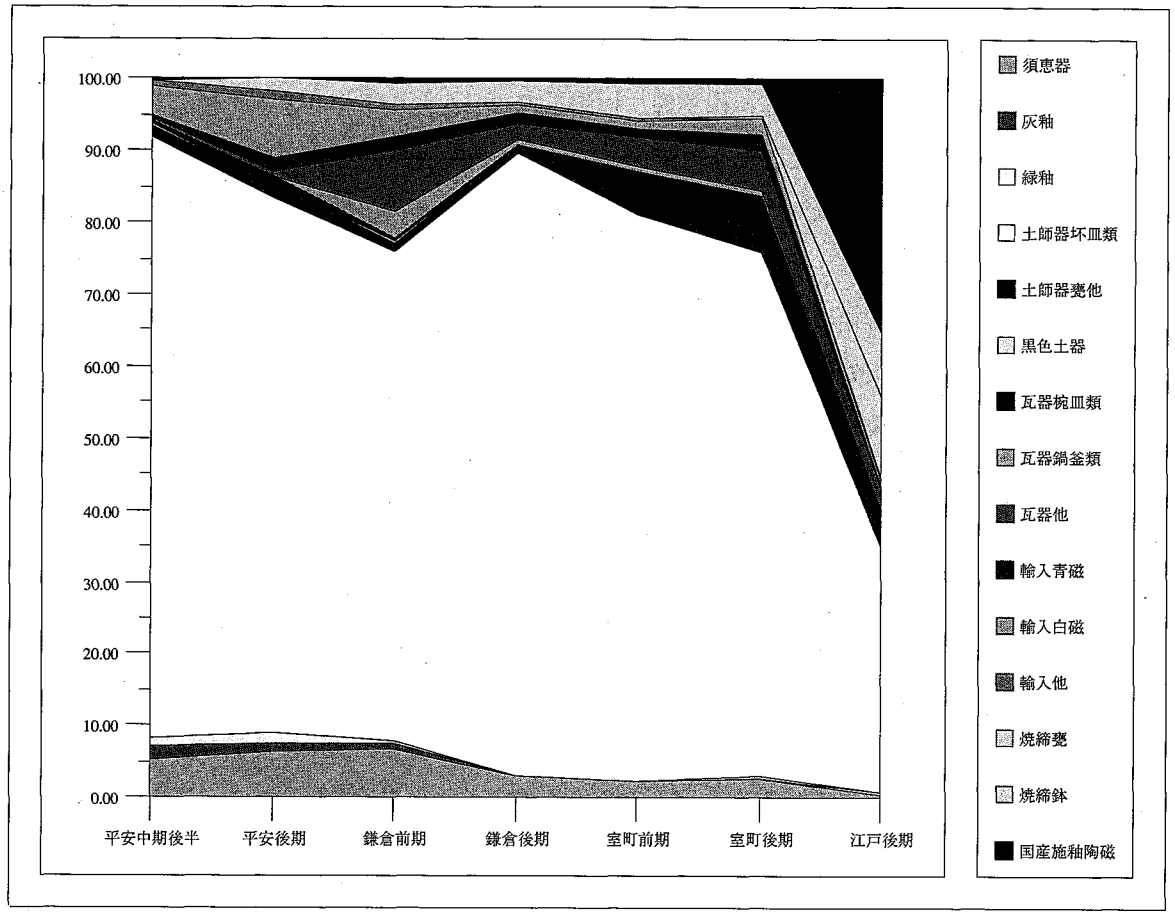
表－１　No.77時期別破片数および割合

No.80時期別破片数

	須恵器	灰釉	緑釉	土師器坏皿類	土師器甕他	黒色土器	瓦器椀皿類	瓦器鍋釜類	瓦器他	輸入青磁	輸入白磁	輸入他	焼締甕	焼締鉢	国産施釉陶磁	合計
平安中期後半	62	22	11	980	17	4	8	0	4	1	50	10	0	1	0	1170
平安後期	76	14	15	874	21	1	13	0	11	19	99	13	0	19	0	1175
鎌倉前期	327	27	23	3243	54	4	25	178	402	90	186	38	1	143	19	4760
鎌倉後期	266	20	1	8060	77	0	22	53	225	116	122	30	8	267	23	9290
室町前期	108	9	2	3865	279	0	13	40	190	52	59	21	2	239	23	4902
室町後期	101	8	5	2884	303	0	6	38	219	83	83	10	11	171	29	3951
江戸後期	17	2	0	987	147	0	1	10	79	15	24	3	321	261	1016	2883
明治～江戸後	3	0	0	85	19	0	1	7	5	6	8	0	0	10	24	168
合計	960	102	57	20978	917	9	89	326	1135	382	631	125	343	1111	1134	28299
				坏皿類	甕他		椀皿類	鍋釜類	他	青磁	白磁	他	甕	鉢	陶磁器	

No.80時期別破片数の割合

	須恵器	灰釉	緑釉	土師器坏皿類	土師器甕他	黒色土器	瓦器椀皿類	瓦器鍋釜類	瓦器他	輸入青磁	輸入白磁	輸入他	焼締甕	焼締鉢	国産施釉陶磁	合計
平安中期後半	5.30	1.88	0.94	83.76	1.45	0.34	0.68	0.00	0.34	0.09	4.27	0.85	0.00	0.09	0.00	100.00
平安後期	6.47	1.19	1.28	74.38	1.79	0.09	1.11	0.00	0.94	1.62	8.43	1.11	0.00	1.62	0.00	100.00
鎌倉前期	6.87	0.57	0.48	68.13	1.13	0.08	0.53	3.74	8.45	1.89	3.91	0.80	0.02	3.00	0.40	100.00
鎌倉後期	2.86	0.22	0.01	86.76	0.83	0.00	0.24	0.57	2.42	1.25	1.31	0.32	0.09	2.87	0.25	100.00
室町前期	2.20	0.18	0.04	78.85	5.69	0.00	0.27	0.82	3.88	1.06	1.20	0.43	0.04	4.88	0.47	100.00
室町後期	2.56	0.20	0.13	72.99	7.67	0.00	0.15	0.96	5.54	2.10	2.10	0.25	0.28	4.33	0.73	100.00
江戸後期	0.59	0.07	0.00	34.24	5.10	0.00	0.03	0.35	2.74	0.52	0.83	0.10	11.13	9.05	35.24	100.00
明治～江戸後	1.79	0.00	0.00	50.60	11.31	0.00	0.60	4.17	2.98	3.57	4.76	0.00	0.00	5.95	14.29	100.00
合計	3.39	0.36	0.20	74.13	3.24	0.03	0.31	1.15	4.01	1.35	2.23	0.44	1.21	3.93	4.01	100.00
				坏皿類	甕他		椀皿類	鍋釜類	他	青磁	白磁	他	甕	鉢	陶磁器	



表－2　No.80時期別破片数および割合

（Ⅰ期新～Ⅱ期古）の新様式への画期では、緑釉陶器、灰釉陶器などを中心に、腰部に丸味を持ち高台の付く椀、皿など新しい形態の食器類が数多く登場し、食器形態全体の様相は大きく変わるが、京域内の土師器には新しい器形の食器形態は登場しないし、この時期以降もそれらの器形が登場することはほとんどない。後半期の土師器食器形態は、高台の付かない皿もしくは杯という浅い器形がほとんどとなり、同前期まで見られた小型で少し深い器形の椀A等は見られなくなる。器形の種類は少なくなり、形態上では変化のとぼしいものが大勢を占める。

土師器は、食器形態以外では甕を主体とする煮炊具が、平安時代前半期では主要器形であり、壺などその他の器形の出土量は少ない。甕類は平安時代前期（Ⅰ～Ⅱ期）では、宮域京域を問わずによく出土がみられ煮炊具では主要な位置を占めていると理解される。同中期前半（Ⅲ期）には、それまであまり見られなかった鍔釜などもよく出土するようになるが、煮炊具全体としては減少傾向を示すようになる。同中期後半（Ⅳ期）では、煮炊具の減少がさらに進み、出土の見られない遺構も多くなり、後期（Ⅴ期）では、煮炊具を伴わない土器群が多くを占めるようになる。用途の異なる器形を比較することには、意義をみいだしにくいが、数量上では平安時代前半期でも食器形態が圧倒的に多数を占め、同後半期ではほとんど食器形態一色と言う状況である。

平安時代前半期には、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、黒色土器、輸入品の白磁、青磁など新しい様相の食器類が、数多く出土するが、他の器形を加えても、宮域京域ともに土師器の食器形態が、出土量の7～8割と多数を占める例が一般的である。後半期では、前半期に見られた他の土器陶磁器類が減少し、代わって瓦器や山茶椀、様相を異にした白磁を中心とした輸入品の食器類などが、数多く出土が見られるようになる。しかし、出土品全体に対して土師器の食器形態の占める割合が、高くなる傾向を示す資料がより一般的となっており、土師器の食器形態一色的な様相の土器群も多くなる。

上述したような平安時代の土師器出土状況は、京域内ではごく一般的であり、宮域内でも大きな差異はない。また、京外の近郊諸遺跡たとえば、鴨川東岸の白河街区と称している六勝寺を中心とする諸遺跡や京都大学構内遺跡、その北方の北白川廃寺等の諸遺跡、またその南側の東山山麓地域、あるいは京南郊の鳥羽離宮遺跡等でも、京域内とほぼ同様である。現在の山科区域、京北郊や嵯峨野地域の諸遺跡でも、基本的には同様といえる。これら平安京近郊の諸遺跡から出土している土器陶磁器類の大半は、京域内からの出土品と共通する様相を持つものが主体である。土師器の食器形態も、京域で各時代を通じて主体をなすものと、型式的には共通したものである。数量データをすべて把握できてはいないが、出土遺物全体のなかで土師器の食器形態が常に高い位置を占める出土状況も、京域内と同様と見てよいだろう。ただ注意すべき点は、遺跡の性格や地域性を反映していると見られるものがよく含まれていたり、京域では少数しか確認できていない資料がやや多めにまとまって出土する例がある点である。また、嵯峨野地域や鳥羽を含む伏見区域及び衰退し非都市域となった右京地域は、近接する他地域からの搬入品と見られるものの出土率が、京域よりもやや高く見える資料もあり、京域と他地域の中間地帯的性格も持つとも理解される。個々に追及する必要はあるが、ここではおいておく。これらの桂川以東の平安京近郊地

域に関しては、京域で主体をなす土器型式の分布域内と理解している。

桂川西岸の乙訓郡地域に関しては、平安時代では街道に沿った地域あるいは拠点的に、土師器の様相を含めて京域内の土器様相に類似した土器群が出土する遺跡が幾つか確認できる。向日市の宝菩提院廃寺、長岡京左京四条一坊の同左京353次調査地、長岡京市の南栗ヶ塚遺跡、井ノ内遺跡、大山崎町の百百遺跡[19]他などがある。しかし、乙訓郡地域では平安時代の後半期に入ると、土師器食器形態はてずくねで製作技法は共通しているが、口縁端部の処理などに地域色が読み取れるものが多く見られるようになる。瓦器椀などの出土状況にも差異が認められるようになり、京域内との基本的な様相差が明確となっていく。乙訓郡地域は、京域内とは土師器食器形態を含めて別型式の土器群の分布域と考えている。宇治川、淀川ライン以南の南山城の諸遺跡から出土する土器群も、京域内のものに類似した様相を持つものが主体をなしている例が多い。しかし、乙訓郡地域とも異なるが、京域のものと微妙な型式差を示すものを多く含んでおり、基本的には別型式の土器群の分布域と見ている。ただ、宇治市の平等院のように、京域内とまったく同型式の土師器食器形態の出土する遺跡も点在しているので、各在地の土器型式の認識には十分な注意がいる。

平安京において平安時代後半期に明確となった土師器の浅い食器形態を主体とする土器陶磁器の様相は、個々の要素は変化を継続するが、基調は京域及び近郊地域では中世を通じて受け継がれていく。数量的に明確な変化を示し始めるのは、近世にはいって以降である。しかし、江戸時代前期頃では、国産の施釉陶磁器類の急速な増加によって、相対的に減少して見える側面もあるが、京域内ではほとんどの遺構からまとまった量の出土は続いており、全体的には土師器食器形態の出土は依然として多い。定量的な分析を行った資料がまだまだ少なく明確には言えないが、絶対量の減少が進むのは、江戸時代も中期に入る頃からと見ている。同後期頃では、土師器食器形態を少量しか伴わない資料も多くなり、出土していない例も見られるようになる。状況証拠にはなるだろうと思われる変化のひとつに、同中期における陶器製の灯明皿の増加がある。この現象は、残っていた土師器食器形態の主要用途のひとつが本格的に陶器に取って変わられて行く現象とも理解できる。江戸時代には色絵陶器の素地に使われている例もあり、勿論このことだけが要因であるなどとは言えないが、減少を促したした原因のひとつではあろう。近代では、明治時代に京域北郊の岩倉の木野村において、減少しているとは言え土師器食器形態類の生産[6]が確認されている。しかし、京域からの出土はほとんど知られていない。寺社や特定階層の年中行事等に使用がより限定されていった結果と推測される。

京都の都市及びその近郊遺跡からは、上述してきたように平安時代以降近世まで途切れることなく、大量の土師器食器形態の出土が続く。これらの土師器食器形態には、各時代において量的にも主体を占め中心を成す一群が常に存在している。京域から出土する土師器食器形態の、出土状況の大きな特徴である。これらの土師器食器形態は、基本的な製作技法が手ずくねであり、各時代に技法の改良が加わっているようだが、基本的には近代まで変わることがない。

主体をなすものが、どの程度の割合を占めているのかを数値で示すことは難しいが、宮域内の

報告例を一例あげる。平安京Ⅰ期中に属する左兵衛府溝SD04から出土した土師器杯Aでは、口縁部77点（204片）の内73点が同一のタイプで95％を占める。皿AⅡは、口縁部199点の内183点で92％、椀Aは口縁部131点の内121点で92％を占める。これらは、それぞれの器形で基本形でAタイプと分類できるものの内で、さらに細部形態や技法痕跡の状態が共通するものが占めている割合である。これらを主体をなす一群と見ており、色調、胎土等の類似性も高い。これらを下位レベルでタイプ区分することは可能である。同一あるいは同系統に属する生産者が都市域の近くに位置して、生産し供給したものと理解できるものである。一つのタイプで主体を占めるものが90％以上と言う例は、平安京Ⅰ期段階では宮、京ともに一般的である。これらは、また遺構、遺跡の違いをこえて共通性をもっている。このような主体を占めるものの在り方は、近世まで大きく変わることはなく、時代が下がるに従ってより寡占化が進む土器群は多くなる。各時期において主体をなす土師器食器形態は、時間軸上では、連続した型式変遷を示しており、その全体像は本論の主題である。

土師器食器形態の京域内での出土状況に関しては、左京域の調査地分と各時期の遺構出土遺物の破片数資料を表にまとめて掲載[7]している（表－１、２）。また今回使用した資料が掲載されている報告書等には定量的データ[8]の報告例も幾つかあるので、それらを参考にしていただきたい。

４．型式とその認識

土師器食器形態の変化の様相の提示は、型式編年のかたちで行なう。型式編年とその前提となる型式認識及び、関連する用語の概念は整理しておく必要がある。

土器群を分類するにあたって、各レベルでの共通性とまとまりやそれらの関係の包括的概念などに使用されている用語は、日本の既考古学では非常に少なく、基本的には型式、形式、様式の三種類の用語に限られる。その結果とも考えられるが、先学達の用語の概念規定はまことに多様である。ここでは、型式、形式、に関しては小林行雄が『図解考古学辞典[9]』（創元社）で記している概念に基本的には従う。

しかし、様式はどのレベルの包括概念として使用してよいのか理解が難しい。辞書では様式に関しては、形式・型式の項のなかで、図式的な説明と用法にふれているだけであり、様式と言う項目が立てられていないので、用語の関連の理解が難しいと言う面はある。小林は、それぞれについては他でも使用し説明しているが、型式・形式と様式の関連については明解には記していない。『弥生式土器集成図録』の解説[10]においては、遺跡（層位や遺構でもよいが遺跡群）単位型式群の引き算の結果として様式が算出されるとする計算式が提示されている。この提示では、先に抽象的に示されている様式を概念として理解出来たとしても、様式と型式との具体的な関連については、他者には理解が困難なものとなってしまう。この問題に関しては、小林の提示している『様式』を探求し理解することを主題とした、『考古学史研究』第一号[11]でも、網伸也が別の言い方でふれている。網は、横山浩一が『岩波講座　日本の考古学』１研究の方法「型式論[12]」のなかに記した文章をあげ、そのように解釈するのが一般的であると記している。この分類法については、

形式を「機能、用途にもとずく分類単位」、型式を「同じ形式に属する物を形質的特徴に細分した分類単位」とし、様式を「同地域・同時代に行なわれた一群の型式は、同一の技術体系の所産であり、また、使用の場面でも、互いに補い合って生活の要求を満たしていたところの、有機的な複合体」以上のように要約している。この要約については、これで良いと考えるが、この概念規定で、三つの概念による分類法が有効的に使用できるとは考えられない。用語の難解さはここではおくが、問題を感じる一点は、様式の説明にある「一群の型式」の理解である。一群の型式なるものが、一遺構から一括出土した程度の土器群を言うのか、特定地域の同時代に存在していたであろう総体を言うのか、前後の文章を見るかぎりではどちらにでも理解できる。このために、どちらのレベルにでも使用できる解釈が生まれる。小林の使用している畿内（弥生）第Ⅰ様式[13]等と田中琢らが使用しているSE311B様式[14]等とでは、型式の複合体と言う意味では同じではあっても、対象とする群のレベルが大きくことなる。SE311B等の遺構単位程度の型式群を対象にして、様式と言う用語を使用するのであれば、上位の群に対してはべつの用語を用いるべきであろう。私は、畿内（弥生）第Ⅰ様式に通じる使用が相対的には妥当と考えているが、この使用例も先の概念規定とは、異なる使用例ではある。理由は、畿内（弥生）第Ⅰ様式で想定されている時代幅のなかには、時間軸上で少なくとも3型式あるいはそれ以上の型式がならぶ。畿内（弥生）第Ⅰ様式とされる様式は、先の型式を基準とした一群よりもさらに大きい上位の群の包括概念として使用されていると理解されるからである。先の概念規定に添った様式の使用例は、私はほとんどしらないし、修正すべきであると考えている。少なくとも畿内（弥生）第Ⅰ様式のレベルかあるいはもう一段階上位の群を含んで概念規定をするべきである。その上で型式と様式の間に位置する群に、新しい用語を与えるべきであると考えている。

ここでは、個体群により構成される分類の最小の基本単位を型式とし、型式の時間軸上での系譜を形式とする。様式は、ある特定出来る地域において時間軸上に列ぶ型式群のうち、なんらかの要素を共有し類似した様相を持つと言え、前後して列ぶ複数の型式群総体に対して使用する。型式と様式の間にある群に対して、新しい用語をここで提示することは難しいので、先の三つの用語と共に具体的な使用例を示す中でふれる。

型式は、形態、製作技法（痕跡）、胎土等の各要素ともに類似した個体群である分類の最小単位に、基本的に使用する。具体的には、一括出土した土器群の中に見いだせる「土坑3のⅢA型式」などとである。また、その個的なⅢA型式が属する、土坑3等から一括出土し同時代に並存していたと仮定できる個別的な一括土器群＝一括型式群に対しても、遺構名等を付してたとえば、土坑3型式群等として使用する。この場合は、一括型式群＝一括土器群の型式と言う側面を持つので、型式の組み合わせ＝組成も型式の特徴的な要素（属性）となる。さらに遺構名等を付した土坑３型式群と、個的な型式やその組成等において類似する要素を多く持つ、たとえば井戸５型式群や土坑25型式群等など、ほぼ同時間帯に並存していたと理解できる複数の型式群の集合体に対して、標準的な型式群としてⅠ期新型式群等と使用する。一括型式群に遺構名や名称を付し使用した場合は、語尾の群を省いて使用することも多い。たとえば土壙25型式と使ってもその場合は土壙25

型式群と同義で使用している。標準型式群についても同様である。

時間軸上に列ぶ標準型式群には、共通する類似した様相を持つ前後に隣り合う複数の標準型式群が存在する。今回の提示では、それらのまとまりを期としているが、期は用語としては適切ではない。それらは、畿内（弥生）第Ⅰ様式等と同レベルの土器群＝複合体であり、様式として認識できるレベルの群と考えている。しかし、より大きな幅でみると類似した様相をもち、一つにまとめて見ることが出来る複数の期が存在していることが分かる。最終的には、このレベルで様式を使用したいと考えている。様式は大きな一つの地域における時代幅のなかに存在する。様相を共有した土器（陶磁器）群総体に対して使用したい。期に関しては、既報告書等で同様の認識で使用しており、今回は変更しない。なお、分類の最小単位の型式に関してだけは、約語の関係であり同義語ではあるが、英語のTypeの和音であるタイプを使用することがある。

形式の区分が、結果的に機能、用途による区分となったとしても、多くの考古資料は、一次分類の段階では推定の域を出ない機能、用途を基準とすることは出来ない。器形の用語として用途を示す名称を使用しても、形態を基準としている。形式は、個的な型式たとえば皿A型式の、時間軸上での変遷が把握できて、その系譜が明きらかとなった場合、皿A形式と認識する。Ⅰ期新型式群の皿Aは、Ⅰ期新型式群皿A型式と皿A形式の両概念を同時に有する存在である。京域から出土する土師器食器形態のなかには、器種分化し杯形で登場した器形が、長い型式変遷の結果皿形化してさらに型式変遷が継続する例が見られるので、土坑15型式群の皿N型式は、杯N形式の系譜に属すると言う関係もありえる。しかし、基本的には、系譜を優先して型式名称を付しているので、形態変化して異なった器形に定形化していても、先に付した器形名称を踏襲して型式名称としていることが多い。

5．土器群の整理と比較

長い時代に渡る土器陶磁器の様相とその変遷を理解するうえでは、土坑、井戸等の遺構から一括出土した遺物が、最も有力な資料である。遺構から一括出土した土器陶磁器を、整理、研究の基本的な対象資料としている。ここでは、私達が実際に行なってきた土器群の整理と比較作業の過程を、土師器食器形態の部分を主にして記して、整理、研究方法の提示に換えておきたい。

実際の出土遺物の整理に関しては、整理過程を幾段階かに分けて実施し、認識の深化をはかっている。出土単位ごとに種類、器形の分類を行ないその記録を取る作業を、出土遺物の一次整理（分類）作業としている。京域における一般的な遺物の出土状況からこの作業は、破片レベルで行なっており、出土しているすべての破片を分類対象としている。すべての出土破片を通覧し、認識する作業であり、出土遺物の全体像を把握する第一歩である。資料が蓄積し研究が進展している現在では、この一次整理作業段階で、出土資料の型式的まとまりに対する認識や、それを手掛かりにした時代推定も十分に可能であるので、それらの判断も記録している。多くの場合、この段階での分類、記録は、器形までの定性分析レベルでおこっているが、本来的には定量分析レベルの記録を残すべきであると考えている。２次整理（分類）作業は、一括出土遺物では型式

とその組成の認識を目的としており、型式分類が主な作業となる。接合等の個体復元作業や遺物の実測作業などはこの段階での実務的作業である。

土師器食器形態では、さらに細かい器形区分と型式分類の絡んだ作業となる。京域からの出土遺物では、大振りのものが中心の高杯や杯B類、皿B類等（以下では大型食器形態と仮称する）が残っているⅠ期からⅡ期の段階では、まずこれら大型食器形態を破片段階で区分し、接合作業も進めながら個体区分も行ない、器形と型式分類を完成する。これを破片と個体の関連を明かとして、それぞれの重量も加えて記録ををとる。

残った高台の付かない小振りのものが中心の杯A、皿A、椀A、椀N、皿C等（以下では小型食器形態と仮称する）に関しては、口縁部、体部、底部などの部位区分を行なった後に、口縁部の口径計測と階級区分を行なう。口径の階級区分は5㎜単位としている。たとえば10.0㎝～10.4㎝（10.5㎝未満）が一つの階級である。このため、5㎜単位で法量分布のグラフを作ることが多く、10.0㎝台、10.5㎝台の皿等と言う表現をよく用いる。口径の復元計測が不可能な、口縁長の小さい小片や歪んだものは、一定の基準を設けてはずして、この段階では一旦は除外している。次に、階級毎に器高、形態等の別の基準で分類を進める。この作業の終了段階にいは、結果として類似した形態の一定の法量分布を持つ個体群＝型式が幾つか確認出きるようになる。この作業をスペースのある平面上に口径の階級を設定して行なえば、実体に近い量を反映した型式とその組成の視覚的認識は可能である。この段階で階級別、型式別に破片数と重量の記録を取る。先程の口径復元出来なかった小片も型式分類し、他の部位別の破片群に関しても同様の記録をとる。そのうえで接合等の作業を行ない型式別の個体数の把握を進める。これらも出土破片と復元個体との関連を明らかとした記録をとる。ただ個体数の復元は、完全に行なうことは難しい。資料が少量であれば、接合するものが無くなった時点で、破片の観察を行なうことによって、個体数を確定できる可能性はあるが、大量の資料では、人為ではほとんど不可能である。しかし、接合作業は、型式認識の前提となる基礎作業であり、2次段階まで整理を進めた全ての土器群では、一定レベルでは必ず実施している。

個別の一括出土土器群で行なっている、器形・型式分類とそれを記録する基礎作業は、一方で他の土器群と比較検討する目的を持っている。破片資料で基準を統一している。個体数でも、復元方法を統一すれば、同じ基準で資料比較は出来るし、近似した認識は得られるだろう。ただ、個体数を復元する方法は、接合以外にも幾つも考えられる。宇野隆夫が「食器計量の意義と方法」[15]と題する論文において、口縁部計測法や特定部分計測法等の方法を提示している。これらの方法は、すべてなんらかの仮定のもとでしか個体数を復元出来ない。私達の行なっている口縁部片の計測と階級分類は、実際の作業としては、宇野の言う口縁部計測法で行なう作業の前半部分とはほとんど同じである。円周が半径2.5㎜単位である点は異なるが、用具も同様のもので計測している。後半の口縁長を計測し個体数の算出を行なうと言う部分に関してが少し異なる。厳密に言うと同様の個体数の算出は、幾つかの資料では行なっているが、他は取り止めていると言うことである。土師器食器形態の枠で、比較資料としては等価に使えるが、他の種類のものと等価に比較

できるのかと言う疑問を持っていることによる。また、復元個体数は出土した個体の実数ではないが、一度そのような数値を復元すると残存していた実体的個体数（これも使用時の実数を示していないと見られる例が多い）のごとく一人歩きしてしまうことが多く、歴史的評価にとっても非常に危険な資料となる一面を持つと考えている。現状では、個体数の確認に関しては宇野の言う個体識別法によっている。

破片数資料が、復元個体数に対して劣るかのような意見が他で聞かれるが、性格の異なる資料を比べて優劣を論じても無意味であろう。また、種類や器形、個体によって割れ方が異なるので、その比率が信じられないと言う意見もよく聞かれる。出土遺物が完形品ばかりであれば別だが、出土状況を直接反映できる定量分析資料は、破片数だけであり、この点をよく検討すべきである。復元個体数の認識もその上に成り立つものと考えている。基準を統一して資料を蓄積すれば、破片数資料によっても、各種の理解は得られるし、復元個体数も、基準を統一して別レベルで蓄積し、両者を比較できればまた新しい知見が得られるであろう。知るべき目的があれば方法と手続きを明示し、原資料（破片データでもよい）との関係を明らかにして、復元個体数を自らが用意すればよいことである。割れ方の問題も、破片数と個体の関係を明らかにした資料を蓄積しその上で論じるべきであるし、追求すべき課題の一つと考えている。

上述したような方法で、一括出土した土師器食器形態の定量分析資料を作成しており、共伴して出土している他の土器、陶磁器にかんしても、同レベルで分類資料を作成している。この資料作成後に、さらに型式の認識を進める上で、必要な個々の土器片と復元できた個体の実測作業を行なっている。口径の階級に添ってすべての復元個体と口縁片の口径復元を1㎜単位で行なって実測し、法量資料の補正を行ない、一型式内の個体群における形態、法量等の変異の内容と分布を確認する。口径の分布に関しては、先の作業で得られた基本的認識を変更する必要が生じるた例はないが、個体の１㎜単位のデータに置き変わる結果から若干の補正が必要になることはある。形態の変異幅は、土師器ではいまのところ数値データに置き換えにくいので、実測図の表現にたよっている。

口縁部破片は、小さい破片では断面実測しか出来ない場合も多いが、ある程度の大きさ以上から完形品となれば、全形の実測と伴に２～４ヶ所程度の断面実測を行う場合もある。断面形態の特徴はもちろんすべてなどでは決してないが、京域出土土師器食器形態の場合は型式認識に占める比重がかなり大きい情報である。多くの既型式編年を見れば分かるが、型式設定の主要根拠とされている例は多い。しかし、てづくねによって作られたが故という面も大きいが、個体内での各方向の断面形態にも変異が見られるのが一般的実体と言える。変異幅は、一般的には大きいものは少ないが、よく型式区分の根拠とされている口縁部外面の一段ナデと二段ナデが一個体内に併存してい例などは決して少なくない。京域内の出土土師器食器形態の場合は製作技法や製作手順からの理解の上に立って、このような個体を含めた型式設定と型式認識が必要となる。このために上記のような点検と実測作業を行うことがある。

上述した１次整理（分類）を経て、２次整理（分類）を完了し、型式群とその組成等の認識の

資料化を達成できた一括出土遺物を基本資料として、次に同様に資料化した別の一括出土遺物とを比較していく。個体の形態、製作技法（痕跡）、法量、胎土と色調、一つの個的な型式の個体群が持つ形態の変異幅、法量の幅、技法痕跡の幅、型式群の個的な型式の量を踏まえた組成等を、複数の一括出土資料間で検討する作業である。これらの作業によって、類似度を基準として数多くの一括出土型式群の並行、前後組列を確定している。

一括型式群を構成する個的な型式のまとまりは、一つの型式を構成している個体群のたとえば法量分布のあり方を見れば一定程度理解が可能である。法量分布等が、グラフでいえばいわゆる正規分布、あるいはそれに非常に近い状態を示していれば、一型式と認識している個体群の型式的なまとまりがあると見ている。このような資料をひるがえって個々の形態を見てみると、グラフ的には示しにくいが、古相を示す少数の個体から中心的様相を示す多数の個体、新相を示す少数の個体が中間的様相のものを含み、区分ラインが設定不可能な状態で、一型式を構成している事が理解出来る資料が多い。一括出土した型式群を構成する個々の型式がそれぞれ型式的まとまりが良い資料であれば一定の時間幅のなかで共存していた可能性がより高い資料と理解している。このような一括型式群を他の数多くの一括資料群と比べると100％イコールのものはないが、非常によく類似した一括型式群も存在しているが、近似していても古・新どちらかにずれて位置すると見える資料や、それらとは異なった様相を示す数多くの資料があることが分かる。非常によく似た一括型式群に関しては、ほぼ並行する時間帯に共存していた資料と理解している。しかし、類似する資料をいくつか集積してみるとよく分かることだが、少しづつ認められる細部の異なった部分も集積せざるを得ず、その結果見られる型式あるいは型式群は、一括出土資料の内の個的な型式や一つの一括型式群に比べると確実に各要素の幅が、若干なりとも拡くなったものとなる。このようなほぼ並行して存在していたであろういくつもの個的な型式と一括型式群を、現時点では総体を獲得できてはいないが、いくつか集積して確認できた型式と型式群を、標準型式と標準型式群と考えている。

京域、及び近郊遺跡から出土する個々の一括出土土器群を材料として、個的な型式あるいは一括型式群の組列を設定すれば1200あるいはそれ以上の組列の設定は、出土資料の存在状態からも理論上では可能であるし、実資料を見ていても、数百程度のオーダーの組列の設定はそれほど難しい作業ではない。一時期に並行している類似した型式や型式群の総体を明らかにしていくためには、標準型式と標準型式群の設定は基本的に必要なことと考えている。

6．土師器食器形態の様相変化

ここでは、京域およびその近郊遺跡から出土する土師器食器形態の、型式変遷と期の枠組みでの変化を記す。平安時代から明治時代にかけて京域及び近郊遺跡から出土し、各時代を通じて主体を成している土師器食器形態の変遷はⅠ期からⅩⅣ期の計14段階に大きく区分することが出来ると考えている。期とする単位は、個々の形態的特徴、制作技法、組成など基本的な要素に共通性を持ち、非常に近似した様相をもつ、標準型式群が形成する一群である。各期は、法量や形態的

特徴など型式群の諸要素（属性）の変化から、それぞれ古・中・新と認識し得る３つの標準型式群によって構成されている。各期は、それぞれ70～90年の幅をもってり、各標準型式群は、それぞれ20～30年程度の時間幅を持つと考えている。この期の名称に関しては、対象となった地域が現在の京都市主要部分とほぼ重なる点や、京都という地名の歴史性を考えても、京都と付すのが妥当と考えている。基本的には、京都Ⅰ期からⅩⅣ期と表現する。しかし、Ⅰ期からⅤ期が平安時代とほぼ重なり、既に数年前に平安時代分の型式編年を別に提示した際に、平安京と付して使用している。Ⅰ期からⅤ期については、平安京Ⅰ期等の名称を今後も併用する（表－４、５）。

土師器食器形態の型式と期における変化を示すために型式変遷図とも称すべき図版を作成した(図－２～13)。提示方法が一般的な土器の型式編年図版と少々異なるので、目的等を記しておきたい。実測図は縮尺４分の１のものを使用している。

古・中・新としている標準型式群を基本的な単位として、３型式群＝１期をまとめて一図版とした。時代は右方向へ新しくなるように配置している。標準型式群のうちの個々の型式に関しては、１㎝単位（図版上では２㎝の幅をとっている）で設定した口径の基準線に基ずいて、口径で位置を確定し、同型式で法量分化していると判断しているものは、縦軸線をそろえて配置し、その軸線は点線で結んでいる。異なる個的な型式のものは、軸線をずらして、口径を基準に位置を決めて、同様に配置している。まとめて言うと、小型の土師器食器形態を口径階級で分類し、次に同口径のもので器高、形態と区分を進め、完成した型式分類の結果を、口径の基準に沿って、異なる型式に関しては軸線をずらして配置しているということである。一つの型式については、法量（主に口径）と形態の個体の変異幅も提示したいと考えたので、出来る限り群で提示している。スペースの都合でそれが出来ない場合は口径に関しては変異幅を、軸線に実線で明示するようにした。

このように図版を制作すると、法量の位置と関係が明らかな型式群の組成（型式群の構造）が一目で理解出来る。同じ規準で別の一括型式群（土器群）の図版を作製して、基準をそろえて並べて比較すると、同一形式の型式変化（や類似度）や一括型式群の組成の変化が、統一した基準の元で、比較的容易に理解出来る。この図版の本来の目的は、型式群を群レベルで総合的に比較し、類似度と差異をビジュアルに理解することである。図版内で口径の基準ラインは統一している。同一形式が法量縮小していれば右上がりの動きとして見え、拡大していれば逆に右下がりの動きとなる。

全ての図版を貼り合わせすと、土師器食器形態では右上がり（法量縮小）が全体の基調となっているとも読みとれる。しかし法量の若干の拡大を伴う再法量分化も繰り返し起こっているようにも見える。これらの理解は今後としたい。

以下では、平安京（京都）Ⅰ期から順次、期と型式の特徴を記していく。

平安京（京都）Ⅰ期（図－３）　平安京（京都）Ⅰ期は、平安京においては平城京の後半期から長岡京に見られる土器様相が色濃く残る段階であり、三つの都城にまたがり８世紀後半期から９世紀前半期にかけて展開する、共通した土器様相を呈する一つの段階＝期としてまとめられる。

Ⅰ期は、杯、皿、椀などの小型を中心とする主要食器形態において、個々の基本形態では大きな変化は見られないが、前段階において土器様相を特徴付けていた、装飾的一面をもつ暗文やヘラミガキ調整が抜け落ちて、外面調整にヘラケズリ調整（c手法が主）が盛行する段階である。

規格性のある法量分化が進展した、多様な法量の杯、皿を中心とする前段階の組成（平城宮域などでは、法量の多様な土器群も多いようだが、京域の土器群などを見ているとそれほど多様なものばかりではないが、並行資料の集積体ではやはり法量の多様性は特徴のようだ）から、高台の付かない杯A（2種）、皿A（2種）に加えて、この段階で量的にも位置を占める高台の付かない椀A（2種）が、土師器食器形態のなかで主体を占める資料が大きく増加する。手ぬきをしたとも見える食器形態が主体となり、法量分化の減少により多様性が喪失したとも言えるが、椀Aが加わり、実用的な使用頻度の高い食器形態が、新しい組成の中心となったものと理解している。

杯A、皿Aは、古から、中・新へと法量の縮小が進み、それとともに体部が開いていく形態変化が緩やかに進行してゆく。椀Aは、口径の法量縮小は明瞭ではないが、体部が開く変化の進行とともに器高が徐々に低くなる傾向が認められる。この変化の結果か、椀AⅠは新の段階で口径が若干とはいえ最も大きくなり、形態も杯Aとの差異が小さくなる。

口径25㎝前後の大型で深手のものが加わった高台の付く杯B、杯B蓋及び高杯は、Ⅰ期では共伴出土する土器群が多く、土師器食器形態全体としては主要な位置を占めている。高台の付く皿Bも出土するが、出土例出土量ともに少なくなってゆく。これら大型品の多い食器形態も、暗文を施す例が激減し、ヘラミガキも徐々に粗いものにはなるが、新においてもヘラミガキを持つものが主体である。

長岡京跡の出土資料には、オサエとナデで仕上げた小型の皿Cなどを一定量伴うものが多い。主流の土師器とは別産地の製品とも見られるこの形式の皿は、平安京跡のⅠ期中にも出土例はあるが、Ⅰ期新ではより少なくなり、Ⅱ期以降はほとんど見られなくなる。平安京では、食器形態の中で主要な位置を占めることはない。

Ⅰ期古に属する資料は、都城の移動（遷都）との関係で長岡京跡、平安京跡では殆ど出土しない。平城宮出土土器編年でいう平城宮Ⅳ・Ⅴ期の資料をこの型式に属するものと考えたい。実年代の推定についても平城宮での位置付けにそい理解しているが、平城宮Ⅳ期、Ⅴ期の型式区分に関しては、疑問を持っている。2つの期とされる型式に関しては、異なる要素よりも類似（重複）する要素の方が多いと思われる。一方Ⅳ期は、滋賀県近江八幡市最近細分が提示されたⅢ期の新と重複する要素が多いと見える。この問題に関しては、両期の資料に近似した様相を持つ資料が増加しつつあるので、充分な検討が必要であろう。

c手法は、平城宮Ⅲの段階からすでに出現しているとされるが、平城宮Ⅳ以降に増加し、平城宮Ⅴでは外面調整技法の中心を占めるようになるとされている。椀Aの登場も、平城宮Ⅲの段階であるが量的にも位置を占めるのは平城宮Ⅳ・Ⅴ期になってからである。平城宮Ⅲ期において土師器食器形態は、杯A、皿Aなど浅い食器が中心的であり、杯Cも皿形化しており椀Cが唯一の深い器形となっていた。そのような中で登場した椀Aは、径高指数の高い、深い器形である。すべ

ては確認していないが、ｃ手法で外面調整した上にヘラミガキを施している椀Aを平城宮Ⅲ期の資料で幾つか確認している。外面全体を対象にヘラケズリする技法であるｃ手法は、深い器形の椀Aを介してA系統の他の食器形態の製作技法にとり入れられていったと見られる。

椀Aは、この段階ではまだヘラミガキを施したものも多く、ヘラミガキを施さないものがほぼ主体となっている杯A、皿Aとは様相を異にしている。杯B、杯B蓋、皿B、高杯などの大型が多い食器形態は、暗文を持つものはほとんど見られなくなっているが、ヘラミガキを施すものがほとんであり、ヘラミガキの状態は平城宮Ⅲ期のものと大きな差はなく、まだ比較的丁寧に施されている。

この段階でA系統で主体を成すとされる大和Ⅱ群系が、各器形にｃ手法を多用するとされる。長岡京跡、平安京跡においても、この大和Ⅱ群系に系譜を求められる土師器食器形態が主体を占め続ける。A形式に含みこまれた大和Ⅰ群系と河内産と見られる一群についてはここでは置いておく。平城宮、京の出土資料では、これらA形式以外に杯Cや椀CとされるC形式の食器類が一定まとまって出土する例が多い。杯Cが、皿AⅡの肩代わりでもするかのような位置を占めている資料がよく見られる。しかし、C形式の食器形態、なかでも椀Cは、長岡京、平安京ではほとんど出土を見ない。杯Cは、近似したものが一定量出土するが、大和系統のものではない可能性が大きくなっている。いずれにしろ平城京段階のⅠ期古は、椀C、杯Cなどの存在が型式群の組成の特徴の一つである。

今回対象とした資料では、Ⅰ期古が最も古く位置する資料であり、継続する法量縮小の出発点でもある。主要型式の法量の概数を示しておく。皿AⅠは、口径20.5㎝台～23.0㎝台が多く、器高は3.0㎝前後が主。皿AⅡは公表資料が少ないが、口径17.0㎝台が中心で、器高は2.5㎝台から3.0㎝強が主。杯Cは、17.0㎝台から18.0㎝台が多く、器高は3.0㎝前後。杯AⅠは、口径18.0㎝台～19.5㎝台が多いが、20.0㎝～21.5㎝台の大型も少数見られる。器高は4.0㎝～4.5㎝台が主。なお、平城宮Ⅳ期とされる既公表の２資料では、口径19.0㎝を割る資料が報告されていない。杯AⅡと出来る資料は、口径17.0㎝台が少数ある。椀AⅠは、口径では、15.0㎝台～15.5㎝台が多く、器高5.0㎝を越えるものもが主。椀AⅡは口径12.0㎝台～13.5㎝台が多く、器高4.5㎝前後が主。椀AⅢは口径8.0㎝台～11.5㎝台まであるが少数。平城宮Ⅳ期では、AⅠ、AⅡが多く、同Ⅴ期ではAⅡとAⅢが多くなるとも見られるが、確証はない。Ⅰ期中の椀AⅠは、Ⅰ期古の同じAⅠの系譜上にはなく、AⅡの系譜上にあるものと理解している。椀Cは、口径でみれば、12.5㎝台～14.0㎝台が多く、器高は3.0㎝台が主。椀AⅡにほぼ対応する法量である。

Ⅰ期中の資料は、長岡京址からの出土土器群、および平安京跡出土の最古型式群に位置付けられる土器群が中心である。これによりこの標準型式群の時間幅も８世紀末～９世紀初頭にほぼ限定できる。

小型の食器形態の外面調整技法に、ｃ手法を主とするヘラケズリ技法が最も盛行する段階である。古では、ヘラミガキが施されたものが多かった椀Aも、ｃ手法で仕上げとしたものが中心となっている。粗いヘラミガキを持つものが残るが、全体的には少数であり、現在はAで主体をな

すｃ手法の一群とは別産地のものと見ている。椀Nや、ヘラミガキや暗文を残す杯A等も同様の理解をしている。

主体を成す椀A、杯A、皿Aなどの小型食器形態においては、外面調整はヘラケズリが９割以上を占めている。古から中にかけてｃ手法化が一層進行し、中段階ではほぼ極に達したと理解できる。しかし、杯B、杯B蓋、皿B、高杯などの大型を主とする食器形態や盤、小型の壷類などでは、まだ比較的ていねいなヘラミガキが施されたものが主流である。この内杯Bは、古に比べると多様な法量のものが出土し、口径25㎝前後の大型品には器高10㎝前後を測る深い器形のものもよく出土するようになる。

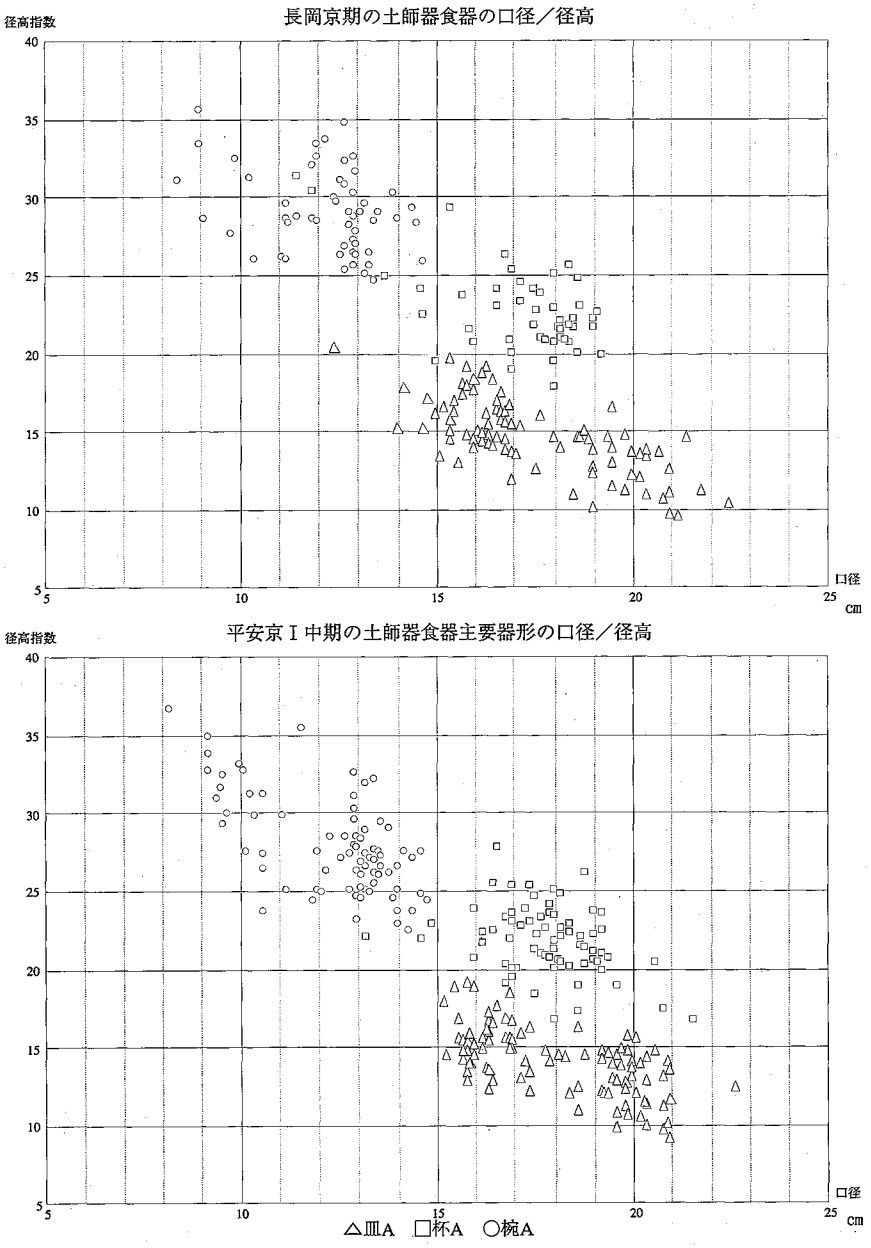
小型食器形態の主要器形である、A形式の基本セットは、古段階とほぼ同様であるが、皿AⅡの出土量は古段階より増加している。杯Aは口径16.0㎝台～19.0㎝台のが中心的で、器高4.0㎝前後を測るものが多い。平均的器高よりやや深いものが少数見られる。口径17.5㎝台～19.0㎝台のものを杯AⅠ、口径16.0㎝台～17.0㎝台のものを杯AⅡとする認識も可能であろう。杯AⅡより小振りの15㎝台のものも少数出土している。皿AⅠは、18.0㎝台～21.0㎝台くらいが見られるが19.0㎝台～20.5㎝台が多く、器高は2.5㎝台から3.0㎝強程である。皿AⅡは15.5㎝台～16.5㎝台を中心に器高は2.5㎝前後ものが主である。椀AⅠは口径13.0㎝弱～13㎝台までが主で器高3.5㎝台～4.0㎝強程のものが多い。古で椀AⅠとされている法量のものは、長岡京を含めて中段階では出土例をほとんど確認できない。このことが主要因ではないが、中で椀AⅠとしているものは古の椀AⅡの系譜上にあると理解している。古の椀AⅠは中段階では消えていった器形と見ている。中段階では、椀器形の内ではAⅠの出土量が圧倒的な資料が大半であるが、口径9.0㎝台～11.5㎝台で器高2.0㎝～3.0㎝台程度の小型椀Aも一定量は出土しており、これらを椀AⅡとしておく。

古の段階に比べてⅠ期中に属する資料は、椀Aでは器高の低下と体部が開く変化が相まって、若干の口径の拡大と見える動きを示すが、杯A、皿Aでは法量の縮小が明確に進んでいく。

Ⅰ期中としている長岡京期の資料と平安京跡から出土する最古型式群について少しふれておく。最古型式群を確定する作業にはすくなくとも２つの方法がある。１つは、平安京域内の出土資料の中で最古の型式を確定する方法と、長岡京出土で長岡京期と出来る資料に最も類似した資料を抽出していく方法である。私達は。前者の方法を主にしながら確定できた資料を長岡京期の資料と比較する作業を行っている。最古型式群と長岡京期の資料は、よく似ているというのが第一印象であった。次に問題となるのは、似ているとする内容と類似度である。

両資料とも組成では、杯A（Ⅰ、Ⅱ）、皿A（Ⅰ、Ⅱ）、椀A（Ⅰ、Ⅱ）を主体とし、椀N、皿Cなどが一定量出土し、組成の一角を占める。他によく共伴する杯B、同蓋、高杯などを加えても、量比をを含めた組成はほぼ共通している。個別に一括型式群でも、両者ともに基本組成ともいえる条件を持つ資料が一般的である。各個型式の法量面でも、グラフ化すれば重複率は極めて高い。個体レベルでも製作技法痕跡や形態等の類似度は高い。この認識をまとめてみると、長岡京跡出土、平安京跡出土という前提をとりはらった土器群では、どちらに位置するのかという絶対的根拠を見いだすことが極めて困難である。その程度には類似しているということである（表－３）。

表－3



－グラフ作成に使用した資料－

型式	遺　構	文　献
長岡	長岡宮朝堂院北西官衙 SK24805	『向日市埋蔵文化財調査報告書　第37集』向日市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、1993年
	長岡宮朝堂院北西官衙域 SD20620	『向日市埋蔵文化財調査報告書　第29集』向日市埋蔵文化財センター、向日市教育委員会、1990年
	長岡宮北辺官衙域 SD19605	『向日市埋蔵文化財調査報告書　第24集』向日市教育委員会、1988年
	長岡京左京太政官厨家跡 SD1301	『向日市埋蔵文化財調査報告書　第4集』向日市教育委員会、1978年
	長岡京左京南一条三坊三町 SD8903下層	『向日市埋蔵文化財調査報告書　第13集』向日市教育委員会、1984年
平安Ⅰ中	平安宮左兵衛府 SD4	『平安京跡発掘調査概報　京都市埋蔵文化財研究所概報集　1978-Ⅱ』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1978年
	平安宮中和院 SK8	『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』京都市文化観光局、1985年
	平安宮中和院 SK9・22	『平安京跡発掘調査概報　昭和59年度』京都市文化観光局、1985年
	平安宮内裏外郭 SX4・SX9	『平安京跡発掘調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局、1983年
	平安京右京一条三坊九町 SD605	『京都府遺跡調査概報第16冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1985年
	平安京右京五条三坊二町 SD1第2層	『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和63年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1992年
	平安京右京六条一坊五町 土器溜U058	『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第11冊　平安京右京六条一坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1992年
	平安京右京六条三坊四町 SD20	『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和61年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1989年
	北野廃寺（第6次調査） SD8	『北野廃寺跡文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　1979年度』京都市文化観光局、1979年

しかし、各型式に差異が全くない訳ではない。形態面では、平安京側のⅠ期中のものの方が、どの器形ともに度合いはいろいろあるが、体部の開きが少し強いものの占める率が少し高い。この変化を最も直接的に反映している椀Aでは、口径14.0㎝前後で1～2㎜程器高の低いものが平安京側で若干多くなっている。この動きと関連しているものと見られるが長岡京期の、椀Aは底部から体部の立ち上がり部に丸味の強いものが多いが、平安京側ではそのように見えるものが少ない。杯Aや皿Aの体部の開きは、全体の法量縮小に隠れて、口径の若干の拡大という動きが読みとりにくい。このような変化は、土師器だけでなく、他の土器類でも見いだせるものはいくつかある。しかし、この程度の変化を見いだすにも一土器群程度では難しく、資料を大量に集積した上での比較で初めてある程度明確化出来るものである。このような細部の型式変化が看取出来るとはいえ、変化した内容を持つ個体は、長岡京期の資料のなかに少量ながらすでに含まれている例が一般的であり、平安京側のⅠ期中の資料には、変化の進んでいない古相を残す個体が含まれている。

けれどもこのように記せば、長岡京跡に多いものと平安京側に多いものをタイプ分類して、その割合で型式区分出来るという考え方も出てくるであろう。これは、型式変化の方向にのった考え方であり、時間の絶対的関係も先にあるので、首肯したい考え方ではある。しかし、同一型式の個体群の変異幅に現れる程度の変化を、型式区分の一般的基準へ置き換えることは、すぐには出来ないだろう。現状では、時間幅を持つとはいえ、類似度の高さを根拠として同一型式と認識しておくのが妥当と考えている。

Ⅰ期新の資料では、主体を成す杯A、皿A、椀Aはど小型食器形態に、オサエとナデによってしあげられたｅ手法のものが一定量含まれるようになるが、量的には依然としてｃ手法のものが中心を成している。しかし、ヘラケズリは、全体的に粗く雑になっており、ケズリ残しが見られる個体も多くなっている。この段階ではｃ手法の粗雑化に逆行するように各器形ともに器壁がやや薄くなる傾向を強め、全体に華奢な印象のものとなっている。全形が少しくずれたものも見られるようになり、器形の違いによる口縁端部の形態差も少なくなる。このような状況から見て、ｅ手法で仕上げられたものは、最終段階の外面のヘラケズリ調整をはぶいた（手をぬいた）製品ともいえるが、一方ではヘラケズリ調整を加えることなく仕上げることが出来た製品とも言える。どちらに重点を置いた評価をするのかによって、以後の土師器食器形態に対する見方も変わってくる。

なお、ｃ手法のもの、ｅ手法のものを問わずに、内面にナデで消えなかったハケ目痕跡が残っている例がこの段階ではよく見られる。同様のハケ目痕跡は、平城京などⅠ期中以前の資料にも散見出来る。小型食器形態の製作過程にもハケ目調整が加えられていることは明らかである。ハケ目痕を残す工具は、木口が直線か弧状を呈した小板であろう。弧状の木口のものをコテとしておきたい。ハケ目は消えているが、体部内面のナデの下に縦方向に工具のあたり痕跡だけが残るものがあり、内面を平滑にする工具には弧状と直線の両木口のものが使われていた可能性も大きい。同様に内面にハケ目痕跡が残るものは、平安京Ⅳ期まで見られるが、Ⅴ期以降にはまったく

見られなくなる。

主要器形の法量は、杯Aは口径15.0㎝台～18.0㎝台で、器高3.5㎝前後のものが多い。分布上はⅠ、Ⅱに区分することが中段階よりさらに難しくなっているが、使用時には大小が使い分けられていた可能性はある。皿AⅠは、17.5㎝台～19.0㎝台で器高1.5㎝～2.0㎝台のものが多く、口径20.0㎝台程のものも少数残っている。皿AⅡは口径14.5㎝～16.5㎝台のものが見られるが15.0㎝台～15.5㎝台のものが主力。器高は2.0㎝前後である。中から新へ杯A、皿Aの法量縮小は比較的明瞭である。椀AⅠは口径13.0㎝台～14.0㎝台のものが多く、器高は3.0㎝前後である。口径12.0㎝台～12.5㎝台のものも出土するが少ない。それより小型の椀AⅡにあたる10㎝台以下のものはさらに少ない。椀Aは、より一法量化傾向を強めており、中から新への動きを見ると口径が若干大きくなる印象がある。これは器高が若干低くなり、体部の開きがより強くなる形態変化を反映したものと理解できる。

杯Bは、中段階同様に多様な法量のものが出土しており、口径20㎝を越える大型で深い器形もよく出土する。、しかし、杯B蓋は、この段階で身に比べると出土量の減少が大きい。Ⅰ期新の資料は、近年増加しているが同様の傾向の資料が多い。身もⅡ期には減少傾向を見せるが、蓋がやや先行した形となる。蓋をほとんど伴わない新様式の影響とも考えられる。高杯は、まだよく出土するが、旧来の皿Bは、少数ながら出土が見られる。これらが、土師器食器形態であるが、ろくろ土師器をのぞくと以降では見られなくなる。

これらの器形には、中段階同様にヘラミガキを施すものも多いが、相対的にミガキの間隔が広く粗いヘラミガキとなっており、ヘラミガキをもたないものもこの段階から見られるようになる。高杯では、ヘラミガキが省略され、杯部外面がヘラケズリ痕となるものも見られるようになる。壺Eや盤なども含めて、大型食器形態も、小型食器形態と同様に製作過程の省略とも見られる状態を呈するものが多くなる。土師器の場合は、食器形態などだけに認められる傾向ではく、土師器の一方の主要器形である甕類などでもⅠ期中以来進行している傾向である。Ⅰ期新から明確となる他の土器、陶磁器を軸とする新様式の画期とは表裏をなす変化とも見られるが、この土師器の動きについて画期同様に的確な歴史評価が必要だろう。

平安京（京都）Ⅱ期～Ⅲ期（図－４、５）　Ⅱ期は、小型食器形態の椀Ａ、杯Ａ、皿Ａなどの外面調整からｃ手法が抜けおち、ｅ手法が盛行する第１段階である。杯Ａ、皿Ａでは、法量の縮小化が明瞭に進行する。並行して器壁が徐々に薄くなり、それらが中心となっていく。形態的には、全体的に体部の開きが強くなり、口縁部のナデによる外反が徐々に強くなる。Ⅰ期で杯Ａ、皿Ａ、椀Ａにみられた口縁端部の形態差が、非常に不明瞭となり、端部を小さく丸く上方へ少し突起させ収めるほぼ共通した形態を呈するようになる。椀Ａでは、主に器高の低下として進む法量縮小は顕著ではないが、器壁や細部形態の変化は、杯Ａ、皿Ａと同様に進行する。このため椀ＡⅠと杯Ａの小口径（ＡⅡ）のものは、法量的にも差がなくなっていき、新段階では区別が非常にむつかしくなっている。杯Ａ、皿Ａは、法量の縮小化傾向に加えて、皿ＡⅠや杯ＡⅠなど法量の大きい器形の出土量の減少が著しく、同じ器形内での小法量器種が量的な中心をなす。しかし

椀Ａでは、ＡⅠが主流で小型のＡⅡの存在が不明確となる。全体的にもⅠ期に比べると法量の多様さを喪失した土器群が多くなる。杯Ｂや高杯などは、製作技法及び形態等も基本的には小型食器類の変化に、現象面としては遅れながらではあるが連動した変化を示す。全形的にも、小型食器類同様に華奢な印象がより増していく。

Ⅱ期古では、小型食器形態の杯Ａ、皿Ａ、椀Ａは粗いｃ手法によるものも若干残るが、ｅ手法で仕上げられたものが多数となる。器壁の厚味を残したものが中心であるが、器形による口縁端部の形態差は少なくなり、共通性がⅠ期新より高くなっている。

法量は、杯Aが口径16.5㎝台～18.0㎝台で、器高3.0㎝台前後のものと、口径14.5㎝台～16.0㎝台程で器高3.0㎝前後のものが見られ、前者を杯AⅠ、後者を杯AⅡとすることも出来る、皿AⅠは、口径16.0㎝台程から19㎝を越えるものまで見られるが、口径16～17㎝台で器高2.5㎝前後が主であるが皿AⅡに比べ出土量は全体的に少ない。皿AⅡは口径14.0㎝台～15.0㎝台のものがよく出土するが、口径15.0㎝前後で、器高2.0㎝前後のものが中心である。椀Aは、口径12.5㎝台～14.0㎝台のものが見られるが、口径13㎝台できこう3.0㎝前後が主力である。

杯Ｂは、個々の土器群で多様な法量がセットで出土する例は少なくなっていくが、全体的には口径17㎝前後から25㎝前後まで、深手のものも含めて各種の法量のものが出土している。しかし、同蓋の出土例はすでにこの型式でほとんど見られなくなる。外面調整技法は、ヘラミガキをもつものはほとんどみられなくなり、ヘラケズリ調整のものが主力となっている。高杯も同様に、杯部外面にヘラケズリ痕を残すものがも多いが、脚裾部はナデ調整だけのものもみられるようになる。

Ⅱ期中では、小型食器形態はほぼすべてｅ手法化し、器壁も古段階に比べるとやや薄手となったものが中心となる。杯Ａ、皿Ａ、椀Ａともに、口縁部は外反が強くなったものが目立つようになり、口縁端部の形態は、より類似したものとなる。しかし、この型式では、まだ杯・皿・椀の器形分類は、法量、全形などを根拠とすれば十分に可能である。またこの段階で杯AⅠなどの系譜が明らかでない大きな杯類の出土が少数ではあるが見られるようになる。杯Lとしておく。杯Ｂ、高杯は、まだよく出土するが杯Ｂではｅ手法だけで仕上げられたものも多くなり、外面にヘラケズリが残るものでもケズリ残しのある粗いヘラケズリのものが中心となる。高杯も、脚部面取りを除きｅ手法だけで仕上げられたものが主力となっており、杯部外面にヘラケズリを施すものでも下部だけなどに省略されたものもみられる。

法量は、杯Aは、15㎝台を中心に、口径14.5㎝台～16.0㎝台のものが見られ、器高は2.5㎝台程である。２群を設定することがより難しい資料が増える。皿AⅡは、口径13.5㎝台～14.5㎝台で器高2.0㎝前後であり、出土量は多い。口径16～17㎝台、器高2.0㎝台程の皿AⅠにあたるものが少数見られる。椀Aは13.0㎝台～14.0㎝台で器高3.0㎝前後のものであるが器高3.0㎝を割るものが多くなっている。古に比べると口径の縮小は、殆ど目立たないが器高の低下は進んでいる。なお杯Ｌは、口径19.5㎝、器高4.1㎝を測る。この頃では大振りな個体を北野廃寺出土資料の中で確認している。

Ⅱ期新では、小型食器形態の口縁部は外反がより強くなり、屈曲した状態を呈するものが含まれるようになる。器壁は、さらに薄くなったものが中心となり、器形による口縁端部の形態差はまったく見られない状態となる。Ⅱ期中まで少数見られた皿ＡⅠに対応する器形はほとんど出土例がなくなる。杯Ａと椀Ａは、法量、形態ともに近似し、出土量の多い資料でようやく群的に認識できる状況となる。

法量は、杯Aが口径14.0㎝台～15.0㎝台で器高2.5㎝前後が中心だが、器高が2.0㎝を割るものも多い。皿AⅡは、12.5㎝台～14.0㎝台まで見られるが13㎝台が主力で器高は2.0㎝前後だが、2.0㎝を割るものも少なくない。椀Aは、口径12.5㎝台～13.5㎝台、器高2.0㎝台のものが主力である。杯A、椀Aの形態差は極少なくなっている。

杯Ｂや高杯は、出土量が少なくなる傾向がみられ、ヘラケズリ調整が施されたものは極少なくなり、器壁が薄いものが中心となっている。高杯脚部のヘラケズリによる面取りは、面の幅が狭く、より角数の多い多角形となるものが多くなる。

また、製作技法や基本的な形態的特徴は皿Ａ、杯Ａとほぼ共通しているが、系譜上は、今のところ皿Ａ、杯Ａとは認識しえない大きい法量の皿・杯が、この型式からまとまって出土するようになる。これらを皿Ｌ、杯Ｌと仮称しておく。

皿Lは、口径18.0㎝～20.0㎝台で器高2.5㎝前後の大型のものも見られるが、口径15.5㎝台で器高2.0㎝台の小振りのものも見られる。この小振りのものは、中からの法量の縮小を考えると、皿ＡⅠとできる可能性もある。杯Lは口径17.0～20.0㎝台で器高3㎝台程の各法量のものが見られる。

Ⅲ期は、小型食器形態は、杯、椀、皿の差異が不明瞭となる。各器形とも器壁が非常に薄く作られており、口縁部の形態は外反度合がより強くなり屈曲したものが中心となる。各器形ともまったく同様に処理されており、小型器形化して法量的差異も大きくない。杯Ａ、椀Ａ、皿Ａの差異はより不明瞭となる。口縁端部は断面で見ると上方へ小さく突起させるように収めており、製作技法的には、Ⅱ期段階と同じｅ手法によって仕上げられたものではある。粘土紐成形によるオサエとナデ仕上げを基本（Ⅱ期以前同様に、ハケ目痕跡が部分的に残っている例も多く製作過程において、器壁の凹凸に板調製を加えてはいるが）とするｅ手法によって作られた土器としては、器壁の薄さ等に技術の練度の高さを示している。この方向での評価をあたえるならばｅ手法の最も完成された段階といえるだろう。この段階では、Ⅱ期新からまとまって出土がみられるようになった20㎝前後までの各法量の大きい器形も、成形技法・形態ともに小型化した杯Ａ、皿Ａ等に共通する様相を示しており、新たに器種分化が進んだとも見られる状況を呈する。Ⅱ期以前の分類基準では、杯とすべき形状のものが多いが、やや器高が低く皿と見られるものも確実に含まれている。これらについては、Ⅱ期新の杯Ｌ、皿Ｌとの関連で理解しておく。説明では杯A、椀Aという用語を用いたが、これらの関係が不明瞭になるだけでなく、これらと杯Lとの関係はⅢ期では区分して扱うことは非常に難しい。系譜上の追求は継続するが、Ⅲ期以降では杯A、椀Aの用語は図版上では使用しないこととする。Ⅱ期の杯A、椀Aの系譜上にあると思うものを含めて、皿A、杯Lへ統括して扱う。また、Ⅱ期までには出土例が多くみられた杯Ｂや高杯はあまり見られな

くなり、食器形態は、小型中心で浅い器形の杯、皿の出土量ばかりが目に付く単相的印象の資料がより中心的となる。

Ⅲ期の土師器食器形態の主要な特徴の一つである口縁形態について記しておく。Ⅲ期の小型食器形態は、いわゆる「ての字状口縁」と称されている口縁形状が特徴的ではある。「ての字状口縁」という名称は、宇野隆夫が「白河北殿北辺の調査」の報告書で、Ⅳ期の皿A口縁部の断面形態に対して提示したものである。

私にはそのように見えないが、表現の問題の評価はおいておく。「ての字状口縁」化は平安京Ⅱ期で明確となり、Ⅲ期で定形化を遂げる。この口縁形態を規定している主要な要素は、口縁部の横方向のナデと、つまみ上げたように収める小突起状の口縁端部の定形化である。Ⅱ期の杯A、皿A、椀Aなど小型食器形態はｅ手法化し、器壁の薄手化が進行することと連動するように、口縁部が横方向のナデによる外反度合いを強める。この段階で口縁端部の処理は器形差をこえて統一されたものとなり、伝統的な口縁処理をベースにして、小突起状に収める口縁端部が定形化する。外反度を増すⅡ期中では、ほぼ「ての字状」とえいる口縁形態を示すものも多くなっている。Ⅲ期にかけて薄手化の進展と歩調を合わすように、外反度はさらに強くなり。外方へ屈曲させると表現している形態のものが器形を問わず中心的なものとなる。薄手化が極に達するⅢ期の段階で、屈曲と小突起状の口縁があいまって「ての字状口縁」は定形化をと遂げる。Ⅳ期の「ての字状口縁」の皿＝皿Aは、厚手化はしてはいるが、Ⅲ期で器形を越えて定形化した口縁形態を残したほとんど唯一となる器形である。Ⅲ期に皿Aから器種分化した皿Acは、Ⅳ期ではこの口縁形態からさらに変化を遂げている。

Ⅲ期古の資料では、Ⅱ期新までは口径等の法量要素で分類がかろうじて可能であった、杯Ａと椀Ａは、若干明確な例もあるが多くは区分が困難となる。皿Aと重複する口径のものは、皿Aとの区分も不明確となり、全形があれば器高の低さで分類がようやく可能といえる状況を呈する。器高のやや低い皿形に近いものも含むが、杯Ｌ系は杯Ａと微妙な差異も見られなくなり、共通器形となり出土例も増える。杯L、皿Lは、中間法量のものの出土も増加し、口径20㎝台まで各階級の口径（法量）のものが出土している。全体的にはⅡ期までとは異なるが、再法量分化したとも見える状態を示している資料が多くなる。

法量は、皿A（Ⅱ）が口径11㎝台の小型も若干含むようになるが、口径12.0㎝弱から12.0㎝台、器高1.5㎝台のものが主力である。この口径のもののなかでも、器高2.0㎝前後のやや深いタイプも認められる。これらは、椀Aあるいは杯Aの系譜上にあるものと見られる。杯Lは、12.5㎝台から20㎝台の幅で各法量のものが見られる。口径12.5㎝台～14.5㎝台で、器高2.5㎝前後程、口径15.5㎝台～16.0㎝台で器高2.5㎝台程、17㎝台で器高3.0㎝前後、口径18.0㎝台～20.0㎝台で器高3.5㎝前後のものが見られる。皿Lは、杯Lの口径階級でそれぞれ0.5～1㎝程浅いものがあると見られるが、杯形よりも出土例が少なく、実体はまだ不鮮明である。今のところ16㎝台以下で皿形の見られる例が多い。図版では浅いものを皿Lとして区分した。なお、口径12.5㎝台～14.5㎝台の杯Lとしたものについては椀Aあるいは杯Aの系譜上にある可能性が高い。

この型式では、まだ高杯の出土はよくみられるが、杯Ｂに関しては皆無ではないが出土例はほとんど見られなくなる。高杯は、脚部面取りがより細幅になって、より多面体化しており、杯部外面のヘラケズリもより少なくなっている。

Ⅲ期中の資料では、各器形とも器壁は最も薄くなり、器高の低下として法量の縮小が進み、杯Ａ、皿Ａの区分は極めて難しく全体的に皿状を呈するものが中心となる。皿Ａ、杯Ｌ系ともよく出土しており、再法量分化が進展したとも見られる状態は継続している。高杯は、製作技法の手ぬきと見られる傾向が進み、出土量も減少する。またこの型式では、皿Ａの内に、器高が1.0㎝を割り、ほとんど円板状を呈するものが、少量ではあるが含まれるようになる。これは、Ⅳ期で明確となるいわゆるコースター形皿の初源的な器形と見られる。

法量は、皿Aは口径11.0㎝台から12.0㎝台のものがあるが、11.0㎝台～11.5㎝台が主力で器高は1.0㎝台程度のものが多い。同程度の口径のものに、器高が1.5㎝台～2.0㎝台のものも少数含まれる資料は少なくない。やはり椀A、杯Aの系譜上で理解すべきものだろう。杯L、皿Lは報告では12.5㎝台から18.5㎝台まで確認できるが、実際の資料ではもう少し大型のものも見られる。杯Lは、口径が14.0㎝台から16.0㎝台のものは器高が2.0㎝台程で、口径17.0㎝台～18㎝台のものでは器高が3.0㎝前後である。皿Lは、口径16㎝台以下での確認例が多く、器高は2.0㎝前後である。

Ⅲ期新の資料では、各器形の法量縮小がさらに進み、杯Ａと皿Ａの区分はより不明瞭となり、実資料での区分はほとんどできない。コースター形の皿の存在はⅢ期中よりも明確となり、器種分化が完了したように見える。このタイプでの皿についてはAcとする。杯Ｌ系の大型では、口径18㎝台を越える資料はほとんど見られなくなり、全体にも大きい法量のものの出土量が少なくなる。それら大型に代わるように口縁端部を外反処理した新しいタイプの杯形、皿形の器形が出土するようになる。以後杯N、皿Nとする。これらは体部上端から口縁部が、ナデ（横方向）のため、浅く２段に凹み、口縁端部が外反処理されている点が特徴となっている。基本製作技法は、伝統的な器形とまったく変わることはないが、口縁端部を内上方へ少し突起させて収めることをやめ、端部を外反処理する点だけが大きな違いとなっている。この結果、それまでの伝統的な器形が体部上端から口縁部下半にナデによる凹み（全体として口縁部が外反する）が１段であったものが、口縁を外反処理したものは凹みが２段を呈するようになる。Ⅳ期では、このタイプが小型食器形態の主体をなす。高杯の出土例は、激減している。

法量は、皿Aが口径10㎝を割るものまで見られるようになるが、口径11.0㎝台で器高1.0㎝台のものが中心的である。皿Aとしたものの中には器高が1.5㎝台から2.0㎝強の少し深手のものが含まれている。椀Aまたは杯Aの系譜上のものとも見られるが、区分に意義を見いだしにくいし、実資料では区分が殆ど出来ない。皿Acは、口径は皿Aとほぼ同様だが、器高は1.0㎝を割っており、口縁端部も皿Aと同じであるが全形はほとんど円盤状である。杯Ｌは、口径12㎝台、14.0㎝前後、15㎝台、16㎝～17㎝台のものが見られるが、18.0㎝を越えるものは見られなくなる。器高は、中の同口径のものと比べると若干低下するようだが、口縁部の屈曲はやや緩やかなものが中心となっている。皿Lは、杯Lの口径分布にほぼ対応して認められる。杯Nの法量法量分布は、杯L、皿L

に類似しているが、口径が大きい方へずれている。口径13.0㎝台～13.5㎝台で器高2.5㎝台～3.5㎝台、口径15.0㎝前後で器高2.5㎝台～3.0㎝台、口径16.0㎝前後で器高3.0㎝前後、口径17.5㎝台～18.5㎝台で器高4.0㎝台のものを確認している。杯Nとしたものの内で、相対的に浅く、皿と見えるものと、それ以外に口径15.0㎝台で器高2.0㎝台の皿形の両者が認められる。前者は、形状がほとんど変わらず、杯Lと皿Lの関係に類似している。後者は烏丸線No.23トレンチ土壙６で出土しているが、まだ確認例が少なく関係の理解は今後に必要である。Ⅲ期新における杯Lと外反化した杯Nの関係及びⅣ期の外反化の進行が小口径側へ波及していくようにみられる点から、杯L、皿Lは、大きい法量のものを中心に外反化が始まり、小型へ順次広がっていったと理解される。

平安京（京都）Ⅳ～Ⅴ期（図－６、７）　Ⅳ期では、Ⅲ期新で登場した皿N、杯Nが、定形化し法量分化も進んで小型食器の中心となる。外反する口縁端部の内側に端面を持つものが増え、体部上端から口縁部外面のナデによる２段の凹みも共通する特徴となる。古ではその方向が顕著となり、中では定形化したものが主流となる。杯Lは、中では姿を消し、伝統的形態を残した器形は皿Aに単一法量化した状態を呈するが、出土量は常に多い。皿Acは、口縁端部が、内側へ折れ込むように発達し、皿Aからの分化が古で明瞭となり、やや大型のものも出土するようになる。

この段階では、器形を問わずに厚手化が進行し、器形の変換とともにⅢ期との様相変化に大きな印象差を作り出している。古では各器形に薄手感を残すが、中では大きい器形に若干残る程度となり、厚手化がほぼ完成される。製作技法は、各器形とも伝統化したe手法であるが、小型器形を中心に改良が加わったとみられる。各器形の法量縮小は緩やかに進む。

皿N、杯Nでは、器壁の厚手化と関連した結果とも見られるが、中までは内面にハケメ痕跡が消え残っている例が多く見られる。新ではそのような資料は減少し、Ⅴ期ではまったく見られなくなっている。

Ⅳ期古では、各器形ともまだ器壁に薄手感を残しているが、Ⅲ期に比べると厚手化したものが多くなる。口縁を外反処理した皿N・杯Nが、量的にも中心を占めるようになる。Ⅲ期新より小型のものも多く出土するようになり、法量分化が進むようにも見られる。しかし、皿Aの口径に匹敵する小型の皿Nはまだ出土例が少なく、主要な位置を占めた例は今のところ知らない。皿N・杯Nの体部上端から口縁部の形態は、外面がナデによる2段に凹みを持ちほぼ定形化したものが中心だが、下段の方が強く凹む形態の古相を示すものが残っている例も多い。コースター形の皿Acは、口縁端部の内側への折りかえしが幅を持つようになると、皿Aとの形態差がより明瞭になり定形化の方向を示し、口径が大きなものも出土するようになる。杯L・皿Lは、口径13～14㎝台ほどの大きさのものまでがⅣ期古ではまだ少数出土する。しかし、口縁部が外方へ屈曲し、端部を上方へ小さくつまみ上げたように突起させておさめるⅢ期までの伝統的形態を残すものは、ほぼ一法量とみてよい皿Aが量的に中心となっている。多数となる皿N・杯Nと、一器形としては常に数多く出土する皿Aと、少数の皿AcのⅣ期的セットは古段階で定形化している。

法量は、皿Aが、口径10.5㎝台～11㎝台で器高1㎝台前半のものが主力。器壁の厚手化との関係か、Ⅲ期新からⅣ期古では皿Aの法量縮小は明瞭ではない。皿Acは、口径10㎝台のものも若干出

土するが、口径12.0㎝前後で器高1.0㎝程のものが多い。杯Nは、口径18㎝台、器高4.5㎝前後。皿Nは、口径16～17㎝台で、器高3㎝台前半、口径15㎝台で、器高2.5㎝前後。口径13㎝台後半～14㎝台で、器高2㎝前半。器高11㎝台、口径2㎝台のものが主力である。

Ⅳ期中は、大きい器形に薄手感が残るが、全体としては厚手化がほぼ達成される。皿Nなどは、外反する口縁端部の内面に、内傾する端面をもつものが増え、体部上端から口縁外面のナデによる2段の凹みも共通する特徴となる。皿L・杯Lはほとんど出土例がなくなり、伝統的形態を残すものでは一法量化した皿Aだけがまとまって多数出土する。皿Acは、円盤化するが、底部外面周縁はナデによる段がつき少し浮き上がり、そこから口縁端部は内上方への幅をもって折りまげて収められている。定形化し、やや大型のものも出土が見られ、二法量のものが確認できる。しかし出土量は平均的に少ない。皿Nは、皿Aと同程度の口径のものも多く出土するようになり、全体的には若干の法量縮小化傾向を示すが、最も法量分化が進んだといえる状態となる。しかし、出土量から見ると、大が口径15㎝台～17㎝強、小が11㎝前後と見られる2種が中心となる様相をも示している。杯Nは、皿Nの大型あるいはより大きい口径のものの出土がやはり多いが、それより小型の杯Nも出土している。また大型で杯より器高が高い鉢Nともいえる器形も少量出土が見られる。

法量は、皿Aが10㎝台～11.0㎝台、器高1㎝台前半のものが中心で、口径12㎝台を越えるものは、出土例が見られなくなる。皿Acは、口径11㎝台、器高1㎝弱のものが多いが、口径12～13㎝台、器高1㎝前後のやや大型のものも出土が見られる。皿Nは、口径15㎝台～17㎝強で、器高2㎝台後半、口径13～14㎝台で、器高2㎝前後、口径12㎝台で、器高2㎝前後、口径10.5㎝～11.0㎝台で、器高1.5㎝台のものを中心とする。杯Nは、口径17㎝～18㎝台、器高3～4.0㎝台が主力であるが、口径16㎝以下で皿Nとしたなかに、平均よりやや器高の高いものが少量ずつ含まれる資料は多くあり、それらを杯Nとすることもできるだろう。また皿N・杯Nは、図示したものよりさらに大きい口径18～20㎝台のものも、それぞれ若干数出土例があるが、まとまって出土することはあまりない。仮称鉢Nは、口径18㎝台、器高5㎝台のものの出土例がある。

Ⅳ期新は、セット関係の基本は同様であるが、各器形ともⅣ期中より法量の縮小化傾向を示す。器壁、外観ともに全体的に厚ぼったいものとなり、それぞれ細部の形態変化の始まりを指摘できる。皿Aは、全形の崩れたものがⅣ期中よりも多くなり、口縁端部の仕上げも悪く、内上方へ突起させずに肥厚した状態でおさめるものも多くなる。皿Acは、底部周縁部のナデによる凹みが不明瞭となり、口縁が底部周縁部から直接内上方へ折り込んでおさめられた形状を呈するものが多くなる。杯N及び皿Nの中間の法量をもつものは減少し、大小の二極的な出土状態を呈する資料が多くなる。これらの口縁部は、より厚味をまして、端面を喪失したものも多く、端部の外反が不明瞭となるものが中心となる。

法量は、皿Aが、口径9.5㎝台～10.0㎝台、器高1㎝台のものが中心である。皿Acは、口径10㎝台、器高1.0㎝前後のものが多いが、口径13.0㎝前後のものも少量出土例がある。皿Nは、口径14.5㎝台～16㎝台で器高2㎝台後半、口径10㎝台、器高1.5㎝台のものが中心である。口径8㎝台～9㎝台

の小型が出土する例も見られる。口径13～14㎝台前半、口径11㎝台で皿Nとできるものは出土量の少ない資料が多く、口径18㎝台を越えるものは全体的に出土例が少なくなる。また皿Nと同口径程度でやや器高の高い杯Nとできるものも出土例は見られるが、皿Nに比して少なくなる傾向が認められる。

Ⅳ期からⅤ期への土師器食器形態の変化はさほど大きいものではない。しかし皿Nは各法量のものともに、口縁形態の変化などは共通して進んでいる。器形、型式の組成面では、出土量を含めて偏った印象が強いものになる。

皿Nは、Ⅳ期での特徴となっていた口縁端部を外反処理したのものが見られなくなり、口縁部上部から端部が立ち上がったものが、大小ともに主体となっている。しかし口縁部から体部外面のナデによる凹みは、まだこの段階では基本的に２段のものが中心である。

Ⅳ期の皿Nが口縁部が形態変化をとげた、大小２法量の皿が多量に出土することが大きな特徴となる。より大型や中間法量のものは、出土例が少なくなる。杯とすべきやや深いものも残るが、区分が不明瞭な資料が多く、現段階では皿Nとしてまとめて扱っておく。伝統的形態を残した皿Aは、古まで少量出土するが中以降は消滅する。他には、皿Acが細部の形態変化をとげて再度定形化し、量は少ないがほぼどの遺構からも出土するようになる。各器形ともゆるやかではあるが、口縁端部の形態、技法痕跡の変化や法量の縮小は続いている。

Ⅴ期古では、皿Nの口縁部上半から端部を上方へ立ち上げ、端部だけが外反状を呈するものが主流である。体部上端から口縁部外面のナデによる二段の凹みを持つ特徴、および基本形や製作技法は、Ⅳ期の皿Nに共通するものである。皿Aは、個体ではⅣ期新の資料と区別が難かしいが、形態の崩れた印象のものが多くなり、法量も若干小さいものとなっている。少量ずつではあるがこの型式までは出土がみられる。皿Acは、円盤状の底部周縁部が浅く凹み、そこから口縁端が内方へ折りまげられた、Ⅳ期のものに近い形状を呈するものがまだ中心である。しかし、底部周縁部の浅い凹部にはナデが及んでいないものが多い。

法量は、皿N大が、口径14.5㎝台～17.0㎝台、器高2.5㎝台～3.0㎝台。皿N小（Ⅳ期の皿Nでは最小口径の一群）が、口径9㎝台後半～10㎝台前半、器高1㎝台後半のものが中心である。なお、皿N大と小の中間口径のものや、大よりもさらに大きい口径18㎝台あるいはそれ以上ののもの、平均的なものより器高が少し高いものなども少量見られる。Ⅳ期の法量分化や杯Nに繋がる諸要素の残影と見ておく。皿Aは、口径9～10.0㎝台、器高1.5㎝前後のものが多い。皿Acは、口径9.5㎝台を中心とするものと11㎝台以上のものが出土する。器高は両者とも1㎝程である。

Ⅴ期中では、皿Aの出土はほとんど見られなくなる。皿Nは、体部上部から口縁部外面にナデ（横方向）による浅い二段の凹みを持ち、立ち上がった口縁端部が微妙に外反気味かもしくは単に丸くと表現せざるを得ない形状のものと、端部の外側に外傾する端面（極浅く凹む例が多い）を持ち、断面で見ると内傾する三角形状を呈するものが中心となる。表現上二つに分けたが、両方の口縁形態を一個体が有する例は少なくない。皿Acは、底部外面の周縁部にそれまで見られた浅い凹みもほとんど不明瞭となり、円盤状の底部から口縁部が直接内方へ折り曲げられただけの

形状を呈するものが中心となる。口縁部外面のナデが底部外面周縁部にまで及ぶものは、まったく見られなくなる。第二段階目の定形化といえる。

法量は、皿N（大）が、口径15㎝台、器高2㎝台後半。皿N（小）が、口縁9㎝台後半を中心に9.0㎝台～10.0㎝台、器高1.0㎝台のものが主力である。なお皿N（大）よりさらに大きく口径が17～18㎝台のもの、大と小の中間的な口径のものも少量出土が見られるが、量的にはセットの軸を成すには至らない。また皿N大・小にまとめたが、それぞれ主流のものより若干器高の高い深手のものが少量ずつ出土する例も見られるが、皿との差異は小さく区分も難しい。皿Acは、口径９㎝台～11㎝台のものが見られるが、９㎝台のものが多い。器高は、両者とも１㎝前後である。

Ⅴ期新では、皿Nは、外側に外傾する端面を持ち、断面が三角形を呈する口縁端部がより明瞭となるが、体部外面上端から口縁部外面のナデによる二段凹み（少し幅のある極浅い凹線が二条めぐる）が、上段部の凹みが不明瞭になったものが多くなる。切りそろえた後のナデ調整仕上げの作業の結果である。ナデは2回ではなく数度のナデの結果である。2段の凹みの痕跡を残すものが多い時代でも、結果が1段となってしまっていたり、1段的な状態になっているものは必ず同一型式内に含まれる。しかしこの段階では、口径縮小＝小型化の進行の結果と関連すると見られるが、体部から口縁の若干の短縮に伴いナデ幅が少し狭くなる（ナデの回数の減少だろう）。その影響が上段凹みに表れると見ている。上段の凹みはごく狭くなるか、もしくは口縁部上部のと一体化してゆき、不明瞭なものとなっていく。皿Acは、少し小型化するが基本形に変化はあまり見られない。なお、この型式では、皿Nなどとまったく同器形（同じ形にするか）であるが、白色の胎土のものがごく少量出土するようになる。どの時代においても白味の強い淡白褐色とでも表現せざるをえない土師器皿等は出土している。ここで記したものは、後の時代の皿Sの存在とも関連するとみられる、白色に仕上げる意図が強く感じられるものである。

法量は、皿N大が、口径14.5㎝台～15.0㎝台で、器高は1.5㎝台～２㎝台のものが主である。皿N小は口径９㎝台、器高1.5㎝台のものが中心である。なおこの型式では、皿Nは口径12㎝台、13㎝台、16㎝台、18㎝台などのものが一定量まとまって共伴出土している資料を確認しているが、基調の認識を変えるほどの例は見ていない。Ⅴ期古やⅤ期中でも、特定遺跡を調査すれば、このような多様な法量のセットが出土する可能性は十分にある。これは少数の器形が大量に出土し、それが特徴と見えるほかの時代にもいえることである。この点は注意した認識が必要だろう。また各法量ともに器高の少し高いものが出土しているが、多数を占めるには至っていない。皿Acは、口径９㎝前半台、器高1.0㎝弱のものが中心で、11.0㎝台のものが少数確認できるが、大型のものの出土例は減少するようである。

京都Ⅵ期～Ⅶ期（図－７、８）　Ⅵ期では、Ⅴ期からの系譜の明確な主要器形は、基本組成に変化はないが、更に法量の縮小化が続く。皿Nは、大小2法量のものが大量に出土するようになり、Ⅵ期古では、大小の中間口径のものも少量出土は見られるが以後はほとんど見られなくなる。皿N大よりも大きい口径のものもごく少数例をのぞくと出土例はほとんど見られなくなる。皿Acもこの段階では出土が継続的に見られ、法量縮小も続いている。Ⅴ期までの土師器の胎土は、すべ

てが橙褐色系の色調を呈したものである。しかし、この段階の中に、胎土の色調が白色系の皿が明確となり、Ⅵ期中では、まだ出土量は少ないが、定形化したと見られるものが出土するようになる。定形化したものの全形から見て平安時代の器形名をあてはめるとすれば、杯とすべきとも考えるが、ここでは皿Sとして以下でも扱う。

皿Nは、基本的な製作技法を踏襲しており、Ⅴ期中～新で定形化した口縁端部の形状にはほとんど変化は見られないが、体部外面上半から口縁部外面の横方向のナデによる浅い凹みが一段となったものが中心を占める。皿N小は、全形に大きな変化は認めにくいが、皿N大では、底部から体部への立ち上がり部分に丸味が少なくなり、底部と体部の境がⅤ期の皿Nより明瞭な印象となる。立ち上がりの角度が若干きつくなり、この変化に対応するように、底部の器壁が全体的に薄くなる。立ち上がりから体部下端までは器壁が薄く、体部から口縁部にかけては中位から上部が少し厚味を増す。製作技法に改良が加わった可能性が大きい。この話と直接的な因果関係はないと考えているが、底部作りと体部の立ち上げ方の改良の結果で生み出された可能性がある痕跡が、Ⅵ期以降の皿Nにはよく認められるようになる。すなわち底部外面の板状圧痕である。Ⅴ期以前や皿S形式ではあまり見られない。この痕跡が明瞭につく部分に対応する内面には、不定方向の指先ナデによる強い痕跡が部分的につく例が多い。このことから、焼成前の乾燥途中に見つけた「ひび」等を補修し、その際に乾燥台となっていた物の圧痕が付いたと推測される。「ひび」の多発は、前述の想定する技術変化が生み出した可能性があると考えている。

Ⅵ期古では、皿Nは、体部外面上半から口縁部外面のナデによる凹みが一段化したものが中心となっている。皿N大・N小とコースター形の皿Acが基本セットである。Ⅴ期新に比べて各器形とも法量が若干縮小しており、それぞれ法量によるまとまりが明瞭となり、それ以外の法量のものの出土例はⅤ期に比べてより少なくなる。皿Nや皿Acともに、まったく同器形で白色の胎土のものが、少数ずつではあるが含まれる資料がよく見られるようになる。

法量は、皿N大が、口径13.0㎝台～14.0㎝台で14㎝台が主力であり、器高は2.5㎝台。皿N小が、口径9.0㎝弱～9.0㎝台、器高1.5㎝台のものが中心である。しかし、この型式までは、皿N大・小とほぼ同じ口径のものに、器高の少し高いものが含まれている。これらのうちに白色を呈するものもあるが、まだ橙褐色系が基本である。皿Acは、口径7.5㎝台～9.0㎝台までのものが見られるが、8.5㎝台が中心的であり、器高1.0㎝を越えるものはほとんどない。

Ⅵ期中は、皿N大・N小・皿Acは、法量の縮小が若干進む。皿Nは、基本形に大きな変化はないが、体部外面上半から口縁外面の横方向のナデ部分がやや外反するものが多くなる。この型式でほぼ定形化したと見られる白色系の皿Sは、個々の資料では量は少ないが、共伴出土する例が増加する。この型式では、器高が少し高く底部から体部の立上がり部分に丸味がある点をのぞくと、基本形や口縁端部の形態は皿Nと大きくは変わらないものが多い。またこの皿Sの出土に伴うように、Ⅵ期古までは少量出土が見られた皿N系の器高のやや高いものの出土例がより少なくなり、以後はほとんど見られなくなる。なお、この型式では、皿N・皿Acと同型式で胎土が白色のものもまだ少量出土する。

法量は、皿N大が口径13.0㎝台～14.0㎝強、器高2㎝台。皿N小が口径8.5㎝台～9.0㎝台、器高1.5㎝台のものが中心的である。なお、Ⅵ期中に属する一括資料は、口径分布を手がかりにするとさらに2群に分類が可能である。皿N大が口径13.0㎝台～14.0㎝強、皿N小が口径8.5㎝台～9.0㎝強を主力にまとまる資料群と、皿N大が13.0㎝台～14.0㎝程で、皿N小が8㎝台を主力にまとまる資料群に分けることができる。この2群に関しては、現段階では他の型式要素では差異を明確に指摘できず、口径（法量）分布に現れた微妙な差を認識できる程度である。現段階では、この2群の資料に関しては時代とともに口径が縮小する傾向を考えて、やや大きい法量を示す前者をⅥ期中の古相、後者を新相と理解しておく。皿Acは、より小型化したものが中心となっており、口径6.5㎝台～８㎝台、器高1.0㎝以下のものが出土する。白色系の皿Sは、小片からの復元も加えると、口径13～14㎝台、器高3.5㎝前後のものと、口径11～12㎝台、器高3.0㎝前後のものと、口径７～９㎝台、器高２㎝台後半のもののほぼ3群が見られ、これらを皿S大、皿S中、皿S小とできるだろう。

Ⅵ期新でも各器形は、Ⅵ期中に比べて法量がまた少し縮小する。皿Nは、基本形に大きな変化はないが、法量縮小に伴うようにやや華奢な印象のものが多くなり、全形の一部がくずれたもの、三角形状の口縁端部の丸味を増したものなどが多くなる。また体部がやや外反状を呈するものもよく見られるようになっている。皿Acは、より小型のものが中心となり、白色系の胎土のものが主力となる。白色系の皿Sは、器高がやや高くなって器壁が若干薄くなり、底部からの立ち上がり部分から体部下半は少し丸味が付く。口縁部は外方へ少し肥厚し、端部外面にかけてやや内傾しつつ、丸味を持った少し長目の三角形状に端部を収めるものが中心となる。全形は、まだ杯形とできる形態を呈する。皿Sは、Ⅵ期中の段階でほぼ基本形（皿よりは少し深い杯形）が定形化したと見られるが、出土例はまだ少なく、消費地への普及は進んでいなかったと見られる。このⅥ期新の段階では口縁形態等の細部もほぼ定形化し、出土量も増加傾向を示す。製作技法も手づくね等を含む最も基本的なところは皿Nと共通するが、オサエやナデの丁寧さなど、仕上げの調整技法は区別されているようである。この段階の皿Sでは、布あるいは皮などのナデ仕上げ道具に泥水を含ませてナデ仕上げをしているものと見られる。Ⅵ期新の皿Sの体部内面下部あたりに位置する横方向のナデの下端ライン沿いには、断面では水滴の１／２の形状をしたごく細い凸線が認められるようになる。ナデ幅やナデの重なり具合にもよるが、新古の段階を含めて皿Nの系統ではあまり明瞭には付いていない。

法量は、皿N大が、口径12㎝台～13.0㎝台、器高2.0㎝弱～2.0㎝台程のものがあり口径12.5㎝台が中心的である。皿N小が口径８㎝台、器高1.5㎝前後のものが中心的である。皿Acは、口径５～７㎝台、器高0.5㎝前後のものが多いが８㎝台も少数みられる。皿S大は、口径13㎝台中心で13～14㎝台、器高3.5㎝前後。皿S中は、口径11㎝台中心で10.5㎝台～12.0㎝台、器高2.5㎝台。皿S小は、口径７㎝台、器高2.0㎝台のものがみられる。

Ⅶ期に関しては、以前に持っていた見方を今回再検討した。Ⅶ期の大枠については考え方を変更していないが、古・中・新の標準型式群の概念規定を修正している。Ⅶ期では、橙褐色系の皿

Nと白色系のⅢSが基本となっている。ⅢNは、大小二法量だけが大量に出土する資料が、この段階を通じて大勢を占める。しかし、未報告資料では、大よりも大きい法量の出土例もあり、型式の帰属を含めて組成の検証は今後とも必要である。大小ともにⅥ期のⅢNの基本形は踏襲しているが、Ⅷ期へ向う形態変化が進行する。体部から口縁部を注目すると、外反度の強いものや、Ⅵ期的形態を縮小しただけに見えるもの、Ⅷ期的様相に見えるものなどが混在している資料が多い。口縁端部も三角形状でも面の明確なものや、丸味を増し三角形状の不明瞭なもの、細く長目に延びて面の不明瞭なものなどがあり、断面形態で分類できそうなものが色々とあるように見える。しかし個体と群をよく観察すると多くの形態はリンクして一型式を形成していることがわかる例が多い。Ⅶ期の古から新の各型式で見られる各種の断面形態は全体としてⅥ期とⅧ期の中間的形態と理解できる。大小ともに法量縮小も進むが、小型化が一定限界に近づいたためか小の縮小はゆるやかである。

ⅢSは、大中小のうちでは中の存在が不明確となってゆき、ⅢSも法量的には大小だけが多数を占め資料が大半となっていく。大は法量縮小が、小よりもやや明瞭に理解できる。口縁部の形態は、Ⅵ期新で定形化した形態が大きく変わることはなく、やや長めの丸味のある三角形状を保持している。全体的な形状も各器形ともに、底部が小さくなり体部の開きが大きくなる方向、杯形から椀形へとも見える変化が進行する。またこの段階で、小のうちからⅢShいわゆるヘソⅢが器種分化して定形化する。

ⅢAcは、白色で小型化したものを中心にまだ一定量出土する資料がⅦ期古ではまだ多く見られるが、Ⅶ期中以降は著しい減少傾向を示す。

Ⅶ期古では、ⅢNは大小ともにⅥ期より小型化した様相でやや華奢な印象のものが主体だが、Ⅵ期新に比べると体部上半から口縁にかけてやや外反したものが多い。大は、Ⅵ期同様に底部と体部の器厚の差が明瞭であるが底部周縁部の器壁だけが他より相対的に薄くなるものも含くまれるようになる。口縁端部は、外傾する端面を持った明瞭な三角形状を呈するものは相対的に少なくっており、それらが少し偏平化し丸味を持ったものが多くなる。小は、小型化の結果体部から口縁部が、委縮し短かくなった印象のものが多く、体部がナデにより若干外反気味となるものが多く見られるようになっている。ⅢN大は、口径11.5㎝台から12.5㎝台のものが見られ、12.0㎝台が中心的であり、器高は2.0㎝台程が多い。ⅢN小は口径7.5㎝台～8.5㎝台で器高1.5㎝台程が主である。

ⅢSは、まだ杯形を呈したものが多いが、底部がやや小さくなり椀形に近い形状を呈するものが増加している。ⅢS大小ともにⅥ期新に比べて器壁の少し薄くなったものが主体となっている。ⅢS中は、少数出土する遺構もあるが、出土量は少ない。ⅢS小は、底部中央あたりが若干上がったものが見られるようになるが、まだ平底が中心である。法量は、ⅢS大が口径12.0㎝台～13.0㎝台程で、12.5㎝台が中心であり、器高は3.0㎝台が多い。ⅢS中は、口径10㎝前後で器高2.5㎝台程のものが見られる。ⅢS小は、口径7.0㎝台から8.0㎝台の幅であり、器高は2.0㎝台ほどが主である。

ⅢAcは、小型化しているため、口縁部の立ち上がりが小さくなっている。体部径が7㎝台のも

のも残るが、体部径4～5㎝台のごく小さいものまで出土する。白色の胎土のものの方が多くなっている。

Ⅶ期中では、ⅢNは大小ともにⅥ期に通じる形態のものも残るが、体部上半から口縁部にかけては外反状を呈するものが増える。口縁端部が外傾する端面をもって三角形状を呈すると言えるものも少なくなる。体部から口縁端部にかけては、徐々に薄くなる形態を呈するものも多くなり、それらは外反状の口縁部から端部を若干上方へ向けて収めている。胎土が赤褐色気味のものも少数見られるようになるが、淡橙褐色のものがまだ大半を占めている。ⅢN大は、口径11.0㎝台～12.0㎝台の幅で、器高2.0㎝前後のものが主である。ⅢN小は、7.5㎝台～8.5㎝台の幅であり、器高は1.5㎝前後であり、口径8.5㎝をこえるものは少なくなっている。

ⅢSは、底部が広めの杯形に近いものが少なくなり、椀形に近いものが主体となっており、器壁も厚手感の残るものはより少なくなっており、薄手のものが大半を占めている。ⅢS中にあたる法量のものは出土例が少なくなっている。ⅢS小は、いわゆる「ヘソⅢ」と言える、底部中央がわずかに上げられたものから、底部中央を明瞭に押し上げたものも含まれる様になっている。これらをⅦ期古の底部を若干押し上げたように見える分も含めてⅢShとする。同形で平底のものもあるが、底部の押し上げられたⅢShの方が多数を占める例もみられる。ⅢShは、このⅦ期中で器種分化が達成されたと見てよいだろう。なおⅢS小には、器高の低いやや浅いタイプも見られるようになる。ⅢS大は、口径11.0㎝台～12.5㎝台までであり、12.0㎝台が中心で、器高は3.0㎝台程である。

ⅢAcは、共伴出土しない例もより増えて、この段階で全体的に出土量は大きく減少するようである。

Ⅶ期新では、ⅢNは、体部から口縁部が外反するものが主となっており、器壁も全体にやや薄くなり、小型化とも相まって華奢さが増す。そのうちには、底部から体部の立ち上がりが強くなっているものが一定量含まれるようになっている。それらは、底部周縁から立ち上がり部分（体部下部）の器壁が、押圧力でより明瞭に薄くなっている。この立ち上がり部付近が、底部と体部に対して相対的に薄くなる傾向は、Ⅶ期に入ると認められるようになっているが、このような特徴を示すものの体部下半は、外面からのオサエの圧力によると見られるやや外反した形状を呈するものが多い。このⅧ期へ直接つながる形態変化を示したものが、より明確になるのはこの新の段階である。Ⅵ期から始まったと見ている底部作りと体部の立ち上げ方の変化を伴なうと見られる製作技術改良は、Ⅶ期に入ってその延長線上でさらに改良が進み、Ⅷ期には工人集団全体に拡大し定着した可能性も検討してみる必要がある。体部中位より上方は、下部の薄さに比べるとやや厚めだが、Ⅶ期中以前に比べると、全体的に器壁は薄くなっている。口縁部にかけては、徐々に薄くなるものを含み、口縁部下半の外反ラインの延長上で、口縁部上部から少し尖り気味に上方へ向け、先は丸く収めている。ⅢNは、この段階で大小ともに、赤褐色化した個体が増加する。器形変化とも連動しているとも見える動きだが、主体を成すまでには至っていない。ⅢN大の法量は、口径10㎝を割るものも少し見られるようになるが、11.0㎝台が中心的であり、11.5㎝を越

えるものも残る。器高は1.5cm台から2.0cm台のものが多い。ⅢN小は、口径7.5cm台～8.0cm台が中心的で、器高は1.0cm台から1.5cm台のものが多い。

ⅢSは、杯形のなごりを残す個体もあるが底部がやや小さくなった椀形が主体となっている。器壁も薄さが定着した印象である。ⅢS大は、口径11.0cm台から12.0cm台で、器高3.0cm前後のものが多い。関係からⅢS中としておく8.0cm台で器高2.0cm台のものも少数確認している。ⅢS小は、ⅢSh（ヘソⅢ）が多数を占めるが、平底のものも出土例は見られる。ⅢS小は、口径6.5cm台から7.5cm台であり、器高は1.5cm台のものが主である。

京都Ⅷ期～Ⅸ期（図－９、10）　Ⅷ期は、Ⅶ期同様にⅢN、ⅢSの2本軸を基本とし、組成面でも類似した印象が強い。ⅢNの大小、ⅢSの大小（小はShヘソⅢ主）が出土量の中心を占める資料がこの段階を通じて一般的といえる。ⅢSはⅦ期で進んだ椀形化がⅧ期古でほぼ達成されている。ⅢN、ⅢSともに大よりも大きい法量のものが出土量は個々の資料では少ないが、出土例はⅦ期よりは確実に増加している。Ⅶ期と比べると組成面での変化を示した個別的な土器群は確実に増加している。また、ⅢNは、器形面では新しい形で定形化し、胎土の色調が赤褐色を呈するものが主体となっており、図面上では、この色調変化は見えないが、実際の資料では印象差が大きい。ⅢNにおける全体的な色調変化、赤褐色化したものが主体を占めるようになるこの大きな変化を注意しておきたい。その意味では、ⅢN・ⅢSの2本軸が基本であるとはいえ、Ⅷ期は赤・白の時代と評価してよいだろう。基本的な各種の変化とこの変化を併せて見ると、土師器食器形態だけにおいても、Ⅶ期新からⅧ期古への変化はⅤ期からⅥ期への画期と等価かあるいはそれ以上のレベルの変化と見てよいと考えている。

Ⅷ期古では、ⅢNは大小ともに形態変化したタイプがほぼ多数を占めるようになっている。ⅢNは、平底の底部周縁から体部下端までは器壁が薄く、強く立ち上がる。体部下半は、オサエの影響でゆるく外反し、上半から口縁部もやや外反する。体部中位のナデ下端付近は外面が稜状に少し張り出し、断面ではそこが最も器壁が厚くなっている。口縁に向って徐々に薄くなり、口縁端部は尖り気味にやや上方へ向けて先端は小さく丸く収めている。体部中位から口縁部は、断面が長めの三角形状を呈するものも多くなるが、口縁部にかけて器壁がほぼ厚さを保ち、ナデによってやや外反し口縁端部を尖り気味に上方へ向けて先端は小さく丸く収めているものも多く残っている。この段階では後者の方が古い形状をとどめていると見える。前者の体部中位から口縁部にかけて長めの三角形状を呈するものは、体部下半のオサエによる外反と下端の器壁の薄さ等が一体化して、断面形状はⅦ期までのⅢNには見られない独特の形状を呈するものとなっている。Ⅶ期新頃から、この形状への変化を示すものを見い出せるが、Ⅷ期古の段階ではほぼ定形化したものが多くなり、ⅢNは以後Ⅹ期古の段階までこれを基本形としたものが中心となっている。底部から体部の立ち上げに関連した製作技術の改良が、口縁部の処理を含めて、定形化した技術手順となり、それがⅦ期新からⅧ期にかけて工人集団へ定着していったものと考えている。この新しい形態を示すものを中心にして、ⅢNは赤褐色の色調をもつものが多数を占めるようになっている。ⅢN大は、口径10.0cm台～11.0cm台があるが10.5cm台から11.0cm台が中心で、器高は2.0cm強

程のものが多い。ⅢN小は口径7.5㎝台が主で8.0㎝強程もよく見られ、少数7.5㎝を割るものもあり、器高は1.5㎝台程のものが多い。ⅢN大とⅢN小の中間口径のものは、確認できないが、Ⅵ期からⅦ期ではほとんど見られなかったⅢN大よりも大きい口径のものを少数ではあるが確認している。口径12.5㎝台前後で器高は2.5㎝前後である。用語的には大とするものを大１として、それより大きいものを大２とする。なお、この段階でⅢN小にも底部を少し押し上げたものが見られるようになる。白色系のヘソⅢShと同様の目的を持つものと見ている。これらは以後、ⅢNhとする。ⅢNhは一定量出土するが、ⅢN小のなかでも大勢を占めることはないようである。ⅢN大では、意図的に押し上げたものは出現しないし、この関係もⅢSに通じる。

ⅢSは、椀形が主体で杯形に近いものはほとんど見られなくなっている。製作技法や口縁形態などに大きな変化は見られないが、再度の定形化が達成されたとしてよいだろう。ⅢS大は、口径11.0㎝弱から12.0㎝台も少しみられるが11㎝台が中心的で、器高は3.0㎝台が主である。小は、ヘソⅢ（Sh）が多数を占めており平底のものが少ない資料が多い。口径6.5㎝台から7.0㎝強程のものが中心的であり、器高は1.5㎝台のものが多い。口径7.5㎝台で器高2.0㎝前後の杯形に近い浅いタイプのものも少数確認している。ⅢS小にまとめたが、他にⅢS大とⅢS小の中間法量のものは今のところ確認していない。なお、大より大型品（大２）は少数出土例を確認している。口径13㎝台ほどのものである。口径だけ見るとⅥ期新頃のものと同様であるが、体部の開きが強くなった椀形であり、この型式に属すると見て良いだろう。

Ⅶ期中では、ⅢNは大小2法量の出土量が多いが、大より大型のもの（大２）の出土例も多くなる。形態では、Ⅶ期古で多くなった口縁部形態が長めの三角形状を呈するものが、大小ともに主体を成している。新しい形態というより、これを作り出す手順の技術改良が工人集団全体にほぼ拡大したと見てよいだろう。体部下半のオサエによる外反が強く見えるものも多く、特異な断面形態をより強調しているかに見える。法量は、ⅢN大が、10.0㎝台～10.5㎝台が中心で器高は1.5㎝前後程が多い。ⅢN小は、口径7.5㎝台が中心であり、8.0㎝をこえるものは少なくなっている。器高は1.0㎝台のものが多い。ⅢNと同法量のⅢNhも出土例は多い。口径12㎝台の大型（大２）は、器高が2.5㎝台のものがあり、やや深手が主である。

ⅢS大は、口径11.0㎝台～11.5㎝台が中心的であり、口径分布はⅦ期新とあまり差はないが、器高は3.5㎝前後が多く、若干深いものが含まれるようになっている。体部から口縁部が少し間延びして開きが少し大きくなったと見える程度の形態変化を示すものが主体となっている。ⅢS小は、口径6.5㎝後半代のヘソⅢ（Sh）が主体で、器高は、1.5㎝台程が大半を占める。この法量で、平底も少数ながら残っているが、やや大きい口径8.5㎝台で器高1.5㎝台～2.0㎝台のものも一定量出土が見られる資料も多い。ⅢS中と見ておく。ⅢS大より大型（大２）も少量ながら出土例が増加する。口径13.5㎝台で器高3.5㎝前後程が主である。

Ⅶ期新では、ⅢNは大小とも基本形態の変化は看取しにくいが、法量の縮小は進んでおり、個体レベルでは少し華奢な印象となるものが多くなっている。ⅢN大は、口径9.5㎝台、10.0㎝台が中心で、器高は1.5㎝前後から1.5㎝台が多くなっている。ⅢN小は、口径7.0㎝台から7.5㎝台であ

るが、7.0㎝台へ中心が移っている。器高は1.5㎝前後から1.0㎝台が多い。皿N大より大きい法量（大２）のものの出土例もやや増加傾向を示すが、相対的には多数を占めるタイプではないと見ている。口径12.0㎝台で器高2.5㎝台が主で、大小よりもやや深手が主である。

皿Sは、深さを残すため椀形がくずれるわけではないが、体部から口縁部が少し間延びしてやや開き気味となる変化を示したものが主となっている。皿S大は、この形態変化を反映しているためと見られるが、口径が若干ながら大きくなったものが主体となっている。口径は、11.0㎝台もみられるが11.5㎝台から12.0㎝台が主となっている。器高は、3.0㎝台が主である。皿S小では、やはりヘソ皿（Sh）が主であり、平底のものは少ない。口径6.5㎝台で器高1.5㎝台が主である。皿Shでは、この段階で押し上げられた底部外面に爪跡の残るものが見られるようになる。爪痕跡の残るものと残っていない両者を比較すると、後者は底部の上がり方はゆるやかであり、指の腹で押し上げたと見られる。前者の爪跡の残るものは、底部中央の立ち上がり方が急であり、指を立てて押し上げたと見てよいだろう。技術改良と言える程の変化ではないが、痕跡の変化は明瞭である。しかし、この段階では爪跡を残すものはまた主体とはなっていない。口径が7.5㎝台から8.5㎝台程で、関係では皿S中とするものも一定量出土する。器高が2.0㎝強の少し深手と1.5㎝台の浅手の両者がある。皿S大よりも大きい法量のものの出土例も増え、皿S大２だけでなく皿S大３・皿S大４とでもすべき大型のものが出土する、法量分化を示した土器群も見られる。大型のものも形態的には、皿S大１に通じる椀形がベースであるといえる。口径では、皿S大２が13.5㎝台～14.0㎝台、皿S大３が15.0㎝台、皿S大４が16.5㎝台～17.5㎝台のものが主である。今後さらに大型も出土する可能性が大きい。この皿S系の法量分化の見られる資料は、Ⅸ期に発展していく新しい様相をもつものとして認識しておくのが、妥当であると考えている。しかし、別の側面を示唆しているとも理解できる。特定の遺跡では、京域内で常に中心的な位置を占めている法量のもの及びそのセット以外に、それらより大きい方にバリエーションを持つ資料がいつの時代でも出土する可能性があることも示していると考えている。天皇家を中心とした最上層階層では、常にフルセットでの使用方法を保持していた可能性も大きい。現状の資料量の枠内での認識を、単純に一般化してしまうことは危険である。この問題は、資料蓄積をまって全体のなかで、今後認識を深めていきたい。

Ⅸ期は、皿N（赤色系）は、大小が主体であるが法量の大きい皿N大２を伴なう例も多くなるようだ。皿N系は、基本形態を保持しながらも、大小はこの段階を通じて法量縮小が継続している。製作技法（手順なども含めて）に大きな変化がないとも言えるが、法量縮小に伴なうように、少し形がくずれたものもより含まれるようになる。全体的には華奢で粗雑な印象のものが多くなる。Ⅸ期中からⅨ期新の段階では、白色系の皿Sに片寄った出土例が増加するので、皿Nの変化がわかりにくいが、Ⅹ期古から見なおせば、この時期は資料が少数ではあるが理解は容易であろう。Ⅸ期中～新の皿Nの資料も今後増加するだろう。

白色系の皿Sは、この段階では、法量分化した資料の増加と器高の低下による杯形化・皿形化が大きな特徴ではある。また出土状況が、赤色系（皿N）が少量で、5つ程度の型式のセットを軸

とした白色系（皿S）が大量に出土する片寄った印象の出土例が増加することも大きな特徴となっている。これらに関しては、京都を舞台に、非日常的な大量の人達（集団）が活動する時代性を反映しているものと考えている。土師器食器形態の側から見れば、代用食器とも言える食器の一括大量消費が、この段階で京域内の都市民の日常的使用状況を凌駕するかたちで加わったとも考えられるが、このような時代の変化に対応して型式（形態）変化が進展したように見える。しかし、製作技法を変換してまで対応したわけではなく、むしろ基本的な製作技術はしっかり保持していたことは明確である。製作技法痕跡の連続性から見れば、ろくろや型作りなどの技術導入がおこなわれていないと言える。これらの理解の深化も今後しておきたい。なお皿S系は、この段階で若干褐色味をおびた白褐（または黄）色の一群が大量に出土する例も、多く見られるようになる。またⅧ期に比べると器壁の厚平化が進む。色調に変化がよみとれるが、まったく同形態で本来の白色及び薄手感を保持している一群がⅩ期には再度多く見られるので、一過性的ではあっても、実用的食器としての需要の増大に対応した、短期集中大量生産が生みだした変化と考えている。

上述のように見るとⅧ期とⅨ期は差異が大きいようにみえるが、Ⅷ期で定形化したものを発展させたと理解できるものが大半を占めており、基本は共通していると考えている。

Ⅸ期古では、赤色系の皿NはⅧ期の延長線で法量縮小を示しているが、皿N小の口径縮小はやや停滞したものとなっている。皿N大１は、9.0㎝台～9.5㎝台が中心であるが、口径が8.0㎝を割るものまで見られる。器高は1.5㎝から2.0㎝程が多い。皿N小は、口径7.0㎝台～7.5㎝台、器高1.5㎝台が主で、Ⅷ期新と大きな差はないが相対的に若干ではあるが口径が小さくなり、器高の低いものが多くなっており、形態も少しくずれたものが多い。皿N大２では、口径11㎝台のものを少数確認しているだけであり、今のところ実体は不鮮明である。

白色系皿Sの全形の変化は、Ⅷ期に見られた体部から口縁部の間が延びて開きが大きくなっていく方向の変化の延長線上で理解できる。この結果、大１では、器高も若干ながら低下するが、口径はやや大きくなる。しかしながら、体部から口縁部の形態は、変化の累積の結果といえるが、Ⅷ期までの皿Sとは様子が異なるようになる。底部から体部への立ち上がりは、丸味を持っているが開きが大きく、体部はやや外反しつつ外上方へ延びる。口縁部は、丸味を持って上方へラインが変換し、端部は尖り気味にそのまま上方へ向けて、先端は小さく丸く収めている。端部は、先端の上方がごく小さく丸く肥厚しているものも多い。小肥厚の直下が5㎜程の幅でごく浅く凹み、その下がゆるく丸味を持って内方へ肥厚している形態が主体となっている。形態面では、深さを残すので読みとりにくいが、皿Sは再々度定形化したと言えるだろう。このように記したが、体部の立ち上がりを強くして器壁を比較的均質に薄くすれば、Ⅶ期からⅧ期の皿へ通じる形態ではある。体部が大きく開き、器壁の厚薄差が作りだしたこの段階の特徴的な形態であるが、口縁部の処理などに古い時期へつながる特徴も読みとれる。広い幅で見なおせばこの時期の皿Ｓに見られる口縁端部の形態は、平安時代前半期のⅠ～Ⅱ期の椀A、杯AⅡ、皿AⅡの口縁処理とほとんど共通した収め方であると理解できる。この時期の皿Ｓの特徴とも見える口縁端部も、京域の土

師器の伝統化した口縁処理の結果、生み出されたものでもあるといえる。

皿S大１は、口径12.0㎝台から12.5㎝台で、器高3.0㎝前後か若干3㎝を割る程度のものが多い。皿S小は、ヘソ皿（Sh）が主体であり、口径は6.5㎝台～7.0㎝台である。器高は2.0㎝を少しこえるものも多い。口径8.0㎝前後までを含む平底も少数みられる。なおヘソ皿は押し上げられた底部外面に指跡を残すものが主体となっている。以後Ｘ期中で激減するまで爪跡のあるのが主体をつづける。この段階で爪跡の付く押し上げ方が工人集団全体へ広がったと見てよいだろう。すべてが確認できているわけではないが、大２以上では口径14㎝台、器高3.0㎝台、口径16㎝台で器高3.0㎝台から3.5㎝前後、口径20.0㎝台で器高4㎝台のものなどの出土例がある。法量分化の様相は、皿S大に見られる基本形をそのまま拡大したと言えるものである。分化の仕方は、Ⅷ期新と共通する。

Ⅸ期中では、皿Nも体部から口縁部が少しのびて広がりやや偏平化する傾向も見られるが、基本形に大きな変化は認められない。皿N大１は、口径8.5㎝台から9.0㎝台で器高1.5㎝台、皿N小は、口径7.0㎝台で器高1.0㎝台が多い。皿N大２は、口径11㎝台、器高2.0㎝台のものが見られる。

皿Sの法量縮小は、器高の低下は明確だが、口径の縮小はほとんど不明瞭な状態である。体部から口縁部の形態は、基本的にⅨ期古と共通しているが、より開いて偏平になる影響と器壁が全体にやや厚目になる変化を示すものが多い。皿S大は、口径が12.0㎝台～12.5㎝台で古とほとんど同じであるが、器高は2.5㎝台が中心であり、低下のわかる個体が主体を成している。皿S小は、ヘソ皿（Sh）が主体である。皿Shは、口径6.5㎝台～7.0㎝台、器高は2.0㎝を割る1.5㎝台のものが主となっている。このShと同法量の平底は見られなくなっており、Shより一回り大きい平底の皿Sの最小径の一群が明確となる。以後これを皿S小とする。皿S小は、口径8㎝台で器高は2.0㎝前後のものが主流である。皿S小と皿S大１の間の一群も存在が明確となる。以後皿S中とする。皿S中は、口径10㎝台で器高2.0㎝台のものが主である。皿S大以上では、口径14.0㎝台、15.0㎝台、16.0㎝台、17.0㎝台、18.0㎝台などがよく出土し、今回図示できなかったが、破片では、口径20～21㎝台、24㎝台の前後まで確認している。皿S大１は別にしても、各型式内での変異の幅が大きいためか、口径を軸とした群（型式）の設定が難かしい。見通しではあるが、口径12㎝前後（皿S大１）、15㎝前後、18㎝前後、21㎝前後、24㎝前後のものに収約できるものと見ている。小、中を加えて、皿Sは7法量群程度が設定できると考えている。器高は、口径に比例して少しずつ高くなるが、径高指数が示すプロポーションはほぼ同様の形態である。

なお、この段階の皿Sでは、体部内面の横方向のナデ（個体を手で回してナデを施しており、左手で持って回しているとみている。回転台等を使用しているとは見られないが、回しナデとの表現も使っている。平安時代にe手法としているものを含めて、京域出土の土師器食器形態の体部から口縁の横方向のナデは、大半はこの方法によるナデと見ている）の下端が、底部周縁部に及んでおり、下端ラインにとって沿って水滴を半裁（少し偏平だが）した形状の小さい肥厚痕がめぐる。この結果、底部内面を俯瞰すると細い凸状の圏線が付けられているように見える。しかし、これは同法量のものでも明瞭なものと不明瞭なものが混在しており、まだ単なる技法痕跡にとど

まっていると理解した方がよいだろう。しかし、これ以後江戸時代に向けて、変遷を遂げて標徴的痕跡にまで発展するので注意しておく必要がある。

Ⅸ期新では、皿N大１は口径8㎝台で器高1.5㎝前後が中心的となっており、皿S小は、口径7.0㎝前後で器高1.0㎝台のものが主となっており、さらに法量が縮小している。ただ、皿N大２は、口径に12㎝前後で器高2.5㎝程のものが出土しており、これらの既資料は中段階のものに比べると少し大振りで深い。これらの既資料は産地含めて検討が必要である。

皿Sは、各器形ともに中に比べると器高の低下は進んでいるが、口径の縮小は不明瞭である。法量は、ヘソ皿（Sh）は口径6.5㎝台～7.0㎝台、器高1.5㎝台のものが主である。皿S小は、口径8.5㎝台、器高1.5㎝台が主である。皿S中は、口径10.0㎝前後で器高2.0㎝程のものが多い。皿S大１は、口径12.0㎝台～13.0㎝台で器高2.5㎝前後が主である。皿S大２以上では、口径15.0㎝前後、16㎝台～17㎝台、18.0㎝台のものを確認しているが、それ以上の大型は、京域内では今のところ確認していない。大２以上のものの器高も、各法量のものとも3.0㎝を越えるものはほとんどなく、全体に偏平な皿形といえる形態が主となっている。

京都Ⅹ期～Ⅺ期（図―11、12）　Ⅹ期は、白色系の皿Sの皿形化が達成された段階といえる。これは、Ⅸ期を通して進行した器高の低下を主とする法量縮小等、型式変遷の結果である。Ⅹ期で皿Sは、小の動きを別にすれば、Ⅹ期古以降は全体的には口径縮小を主とした法量縮小へ転じてしまう。この段階では、体部から口縁部全体の委縮化に伴ない、Ⅸ期に見られた口縁部の延びやかさは失なわれ、口縁端部の内側は内傾する端面化が進み、底部内面に見られる凸状の圏線は凹線状の圏線へと変化してゆく。Ⅹ期古では皿形化しても、大型を中心に比較的各部に残っていたⅨ期的様相もⅩ期中ではほぼ払拭されて、後代へ続く新しい皿形がほぼ定形化している。総じて大口径のものもよく出土しているが、型式変化に沿うように徐々に大口径のものの出土例が減少してゆく。Ⅹ期中・新では、15㎝をこえる大口径のものが伴なわない資料も多くなっている。Ⅹ期の皿Sでは、淡褐色～淡橙色の色調のものが主体をなす資料が多いが、中には明確な白色を呈するものが主体を成す資料も一方では出土している。器壁は古から中へやや薄くなる傾向を示している。

赤色系の皿Nは、法量縮小を継続しながら、古から中への変遷のなかで、成作技法を転換して明確な形態変化を遂げる。Ⅹ期中で定形化した形態は、以降土師器食器形態が消滅する段階まで、大きく姿を変えることなく残っている。この段階の皿Nは、古では形態的にも古相を残す赤色系のものを含めて、胎土の色調は赤褐色を呈するものはほとんど見られなくなっている。

Ⅹ期は、Ⅷ期からⅨ期へと変化しながらも継続していた各種の基本要素が、全体的に転換し後代へ継続する各種の基本要素が定形化する段階である。Ⅸ期からⅩ期への画期は、Ⅶ期からⅧ期への画期と同レベルと考えている。

Ⅹ期古では、皿NはⅨ期新からさらに法量縮小している。形態のくずれたものが多くなるが、一部がくずれたものも他方はかろうじてⅧ期以来の基本形態を保持している。小型化しすぎて逆に作りずらくなってはいるが、伝統化した製作技法と手順がかろうじて継承されていたと考えて

いる。大１では底部の上がったNhとできるものも少数ある。皿N小は、口径6.0㎝台～6.5㎝台で器高1.0㎝台。皿N大１は、口径7.5㎝台が中心的であり、7.5㎝を若干割るものから8.0㎝強のものまであるが、器高は、1.0㎝台から1.5㎝を少し越える程度が主である。皿N大２は、口径10㎝台で器高2.0㎝前後のものがある。皿N小、皿N大１の出土量は多く、皿N大２は今のところ少数確認しているにとどまる。大小ともに、製作技法に規定されて特定の形で定形化したものとしては、極限近くまで縮小している印象である。定形化した製作技法で、これ以下の法量の小の形態保持と作製は、不可能と見える。

皿Sは、体部から口縁部の形態にⅨ期的様相を、大型のものを中心によく残しているが、体部から口縁部は短縮気味であり、小さい口径のものでは、口縁端部内面が内傾する端面化したものも含まれるようになる。器高は、Ⅸ期新よりさらに低下し、各器形ともに皿形化が達成されている。さらに小以上では口径の縮小も見られるようになっている。法量は、へそ皿Shで口径は6.5㎝台から7.0㎝台が主で、口径の縮小が明確ではないが、器高は1.5㎝前後からそれより低い1.0㎝台であり確実に低くなっている。皿S小は、口径8.0㎝台で器高1.5㎝台が主である。皿S中は、口径10.0㎝前後で器高2.0㎝前後が主である。皿N大１は、口径11.5㎝台～12.0㎝台、器高2.0㎝強程が主である。皿S大１、中、小は、Ⅸ期のものとの関連の把握は比較的容易だが、大１以上の大口径のものでは、対応関係を理解するのは難かしいものである。大１の関係を見れば、大２以上も器高にとどまらず口径の縮小も進んでいると見てよいだろう。口径13㎝台前後、15㎝台前後を確認している。これは皿S大２・大３にあたるだろう。Ｘ期古のなかでも最も新相を示すとみている山科本願寺内町遺跡の石室内出土遺物では、さらに大口径のものも出土しているので、この段階でも、Ⅸ期に近い法量のセットがある可能性は大きい。

Ｘ期中では、皿Nは製作技法の変化により形態も大きく変化しているものが主体となっている資料が多い。形態では、体部下半がオサエによって外反し、口縁内外面をナデ仕上げするものも少し残るが、底部から体部が丸く立ち上がりすぐに口縁端部となる、単純な器形のものが主体となる。外面は、ほぼ全体にオサエ痕跡を残し、口縁部外面はナデ仕上げしておらず、端部から内面だけをナデて仕上げている。内面は、全体に一度に一定方向にナデている。口縁部内外面を回しナデして仕上げるＸ期古の段階までのものとは大きく異なる。この新しい様相の皿Nと、旧来の皿Nが同じ系譜にあるものとして理解できるかどうかについては問題となろう。本国寺跡４トレンチ濠（SD166）の下層出土資料などには、形態は旧来の皿Nに通じるが内面全体を一方向にナデ仕上げしたものが含まれていること、法量縮小しているが大小関係を残しており、皿Sとの法量上の位置関係を見ると、変化した技法で作られて形態変化を遂げた皿Nと見ることができる。これらを皿Nrとしておく。なお新しく定形化した皿N大小には、底部を少し押し上げたものも含まれており、旧来の皿N大小が有していた各種の要素は、ほぼ受け継いでいると見てよいだろう。皿N大は、新旧形態を問わずに口径7.0㎝台で器高1.0㎝強程が主である。皿N小は、口径6.0㎝台で器高1.0㎝弱程が主である。皿N大２にあたるものは出土例をほとんど見なくなる。

皿Sは、形態では大型も含めてほぼ全体的に、体部から口縁部は短縮しており、外反状を呈す

るものも少なくなる。口縁ののびやかさは喪失し、口縁端部内面は内傾する端面（ごく浅く凹むものも多い）化している。内面に見られる圏線は、底部から体部の立ち上がり部に位置し、凹状の線の方が圏線を呈するものが多くなっている。凹みは体部内面のナデを施す際に下端のあたりで作り出されたもので、この段階ではごく浅いものが多く、凹線の内側が少し肥厚し、凸状圏線のなごりを残すものも多い。大型ではまだ凸状圏線のままのものが残っている。凹みは不明瞭なものがまだ多いが、このような圏線を持つものは皿S中以上のものであり、皿S小は凹線を有していない。圏線をもつ皿Sでは、圏線が、立ち上がり部に寄る結果か、立ち上がり部はゆるやかな丸味から角をもち気味の立ち上がりとなっている。この細部変化も加わり皿Sは、平底から角を持ちぎみで立ち上がり、体部から口縁部が短かく外上方へ直線気味で開く、若干新しい形態の皿形に定形化する。

皿S小は、小型のためか体部内面の回しナデの下端が、底部中央にまで達するために、泥の溜まりが中心に集まり少し盛り上がることになる。このために、中央部の溜まりを指先で小さくナデて平坦にしている。また、内面の底部から体部にかけて一気に回しナデるためか、立ち上がり部の角が不明瞭となり、体部から底部が一体的に丸味を持って見えるものが多い。このような全形から私達の間では、「丸底小皿」とも通称している。この形態と、内面底部中央の指先ナデが特徴となっており、皿S小の独自の定形化ともいえる。これらをここでは皿Sbとしておく。皿Sbは、圏線を有するタイプの最小口径の一群の次に常に位置し、この時期以降では、ほとんどの資料で出土が見られるようになる。皿Sb（＝S小）は、口径8.5㎝台で器高1.5㎝台が主である。皿S中は、口径9.5㎝台で器高2.0㎝前後が主である。このタイプでは、圏線径が特に小さく10円硬貨程度のものも含まれて特徴的である。皿S大１は、口径11.0㎝台から11.5㎝台で器高2.0㎝台が中心である。大２以上では、口径12.0㎝台、14.0㎝前後、15㎝台などを確認しているが、より大型は今のところは確認できていない。器高は、大小区別なく2.0㎝台が主であり、大型は浅い皿の印象がつよい。

なお、Ｘ期中では、ヘソ皿（Sh）はほとんど見られなくなっており、今のところ図示できるような例を確認していない。激減すると見て大過ないと考えるが、破片では共伴してもよいと見ているものが少数は出土している。いずれにしろ京域では、Ｘ期中はヘソ皿（Sh）の終末期である。

Ｘ期新では、皿Nrは若干器壁が薄くなる程度での変化しか示していない。皿Nr大は、口径7.0㎝台で器高1.0㎝強が主であり、皿Nr小は口径6.0㎝前後で器高1.0㎝弱が主である。Ｘ期中に比べると若干ではあるが法量の縮小傾向を少し示している。

皿Sは、大小を問わず内面の体部の立ち上がり部に凹線状圏線を持つものが主体となっている。凹線状圏線は明瞭に凹むものが多くなるが、この段階でも技法痕であることに変わりはない。体部は、外反状を呈するものはほとんど見られなくなり、短かく直線的に開く。口縁部は、より短かく委縮した様になり、内側の内傾する端面（ごく浅く凹むものも多い）は、幅の狭いものとなる。先端部は丸味をもつが端部は短かく突がり気味に収めている。体部内面の回しナデの終端部分はひき抜いた痕跡が、内面を俯瞰すると「つ」の字状に明瞭に残っている例も多い。Ｘ期中で

すでに目に付くようになっており、X期新ではより多くなっている。皿S中は、口径9.0㎝台～9.5㎝台で器高2.0㎝強。皿S大１は、口径10.5㎝前後で器高2.0㎝前後が主である。皿Sbとの関係も踏まえて、このように判断しているが、理解の確定にはもう少し資料が必要である。皿S大２以上では、口径12.0㎝前後、13.5㎝前後、15.0㎝前後のものを確認している。X期中段階の皿Sと比較すると、全体が法量縮小していると理解できる。皿Sbは、口径8.5㎝台で器高2.0㎝弱が主である。皿Sbは、X期古・中・新を通じて見ると圏線を持つ皿Sとは動きが異なり、若干ではあるが法量の拡大傾向を示している。これは、製作技法の若干の違いが生みだした変化の差の可能性があると見ている。なおこの段階の皿S・Sbの胎土の色調は、本来の白色を呈するものはほとんど見られなくなっており、白褐色あるいは淡褐色か淡橙（褐）色を呈するものが多くなっている。

XI期では、皿S・SbともにX期に定形化した要素を受け継ぎながら、型式変化を遂げている。皿Nrは、ごくゆるやかな法量縮小が続くが、大きな形態変化を示すことはない。

皿Sと皿Sbは、また器壁の厚手化方向を示し、口縁部の端面は徐々に不明瞭となってゆき、XI期新ではほぼ喪失したものが主体となっている。体部から口縁部は短縮化の方向での変化が基調となる。皿Sの凹線状圏線は、より明瞭なものとなってゆき、XII期新段階では製作技法痕跡とは異なり、ヘラ先などで意図的に施したものが含まれるようになる。

XI期古では、皿Nrは大小ともにX期新に比べるとやや小型化したものが見られるようになる。大きな形態変化は見られないが浅いものなどが多くなっている。この段階でも、皿Nr大に底部を押し上げたものが含まれた資料が見られる。皿Nr大は、口径6.5㎝台～7.0㎝台で器高1.0㎝前後が主である。皿Nr小は、口径5.0㎝台～6.0㎝台で器高1.0㎝弱が主である。皿S・Sbは、X期新より若干厚手化が進んでおり、口縁端部の処理も丸味のあるものが見られるようになっているが、この段階では端面をもつものが主体である。皿Sの内面の立ち上がり部分の凹線状圏線は、ほぼすべての個体で明瞭なものとなっている。

皿Sbは、口径9.0㎝台～9.5㎝台で器高2.0㎝前後が主である。法量拡大が進み、皿Sと競合する状態となっており、競合する法量の皿S中は、ほとんど出土が見られなくなっている。皿S大１も縮小を止められた様な関係に見える。皿S大１は、10.0㎝台～11.0㎝強程で器高2.0㎝前後である。口径12.0㎝台～13.0㎝強で器高2.0㎝程の一群は、皿S大２と見ておく。これらより大型のものは、口径16㎝台のものなど少数の確認にとどまる。調査資料が町屋などを中心としている影響の可能性が大きい。

XI期中では、皿Nrは、形態・法量ともにXI期古とは大きな変化を示していない。資料が増加すれば微妙な動きが読みとれる可能性はある。この段階では、底部を押し上げたものが、既資料では見られない。以後の資料中にもほとんど見られないことから見ると、この段階で生産が終了している可能性は高い。

皿S・Sbは、器壁がやや厚目のものが多くなっており、口縁部処理もそれに応じるように丸味を増したものが中心的となっている。相対的に大きい口径のものに、端面をもつものが見られるが全体的には少数となっている。皿Sにも、体部と底部の境が不明瞭になるものが見られるよう

になるが、それらの内面の凹線状圏線は、逆に強く明瞭なものが多い。しかし、この段階の圏線は、ヘラ端などで後で施したと確定できるものはまだ見られない。

ⅢSbは、口径9.5㎝台も見られるが、10.0㎝台のものが多数出土する。ⅢSbは、この型式で法量が最大に達している。Ⅺ期新では、縮小に転じている。ⅢSは、口径11.0㎝前後から12.0㎝台の一群が数多く出土する。これらは、ⅢS大の系譜上と見てよいのか、現状では確定が難かしい。しかし、ⅢSbの法量との位置関係からⅢSbに押し上げられて少し大型化したⅢS大１と見ておく。ⅢSでは他に口径13㎝前後、口径16㎝台のものが出土しているが既資料では出土数がまだ少ない。

Ⅺ期新では、ⅢNrは資料数が少なく認識が不鮮明であるが、口径6.0㎝台のものが大に位置する可能性も示している。資料増加を待ちたい。

ⅢS・Sbは、厚手のものが大勢を占めるようになっており、体部から口縁部の断面形態に変化が認められる。体部から口縁部が短縮していく変化の方向は変わっていない。体部がやや外反し、口縁部の外面が若干肥厚し端部を上方へ突り気味に収めた結果、端部が三角形状を呈する形態のものが多数となっている。内傾する端面をもつ古相の形態のものも見られるが、端面が不明瞭となったものが多い。ⅢSでは、底部が若干丸味をもつものが多くなっており、それらは体部との境がやや不明瞭となっている。このなかには、内面の凹線状圏線が立ち上がり部より、少しずり上がって位置するものがあり、またこれらの凹線状圏線には、結果的な技法痕跡ではなく、後でヘラ先などの工具で圏線を意図的に施こした可能性のあるものが認められるようになる。このⅪ期新段階の変化は、凹線状の圏線が単なる技法痕跡から土師器Ⅲ（京都のかわらけ）の標徴へと変化し始めたことを示すものと理解している。Ⅻ期以降では圏線を意図的に施したものが主流となる。

ⅢSbは、口径9.5㎝台～10.0㎝強で器高2.0㎝前後が中心的となっている。ⅢSbは、この段階で法量縮小へと変化の方向が転換している。ⅢS大１は、10.5㎝台～11.0㎝台で、器高は2.0㎝前後である。ⅢS大２は、12㎝台が中心で器高は2.0㎝台が主である。口径16㎝台の大型も確認している。未報告資料中にも大きい口径のものがあるが、京域内の既調査資料では少数である。ⅢSは、ⅢSbの法量縮小への転換によって、基調であったと見られる法量縮小が再び明確となっている。

京都Ⅻ期～ⅩⅢ期（図―13）　Ⅻ期以降に関しては、各期ともに古・中・新の3つの標準型式群を、整えて提示することが今回はできなかった。ここでは、Ⅻ期、ⅩⅢ期、ⅩⅣ期をまとめたかたちで見通し的認識を含めて順次記しておく。

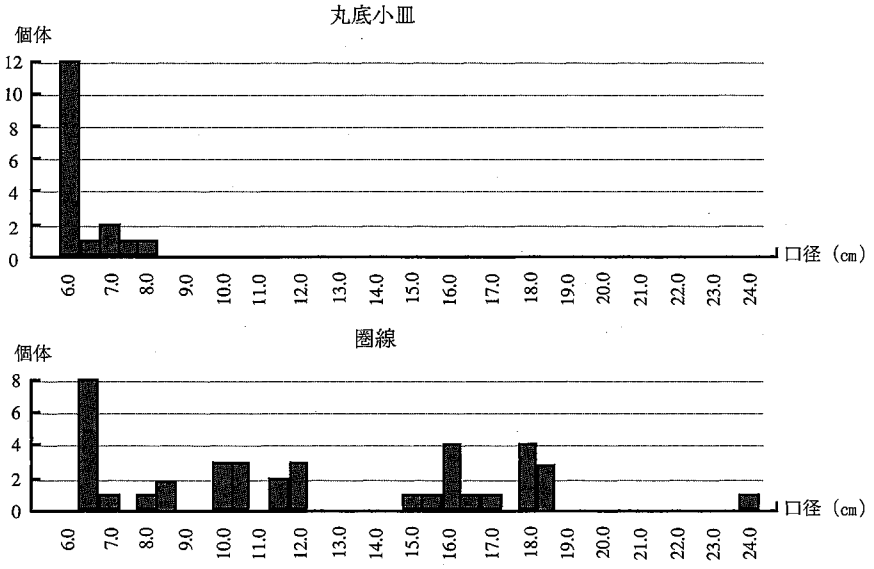
Ⅻ期は、ⅢNr大小、ⅢSb、法量分化したⅢSを基本組成とする型式群によって構成されている。各器形ともにゆるやかではあるが、Ⅻ期内においても法量縮小を基調とする型式変遷が継続している。ⅢNrは、形態的には大きな変化を示していないが、ⅢSb、ⅢSでは、Ⅺ期にみられた器壁の厚手化という変化に関しては、180度方向転換して薄手化が進行し、それに伴なうように体部～口縁部の形態も徐々に変化を遂げている。またⅢSの凹線状圏線が、技法痕跡が主体であった段階から、標徴化した付加型の加飾的な凹線状圏線に主体が変化している。これらを見ると基本的な共通性を持ちながらも、最も中心となっているⅢS・Sbは、Ⅺ期新からⅻ期古へと大きな変

化を遂げているといえる。

XIII期は、XII期を通して進展した各種の変遷が、やや極端とも見える形でさらに押し進められた段階と見ることができる。XII期とXIII期の関係は、平安時代のII期とIII期の関係に類似したものと理解できる。XIII期には、器壁の薄手化がXII期よりさらに進むが、この結果圏線を付加する際の圧力が器壁が薄いがゆえに外形にまで影響を与えている。内面に凹線を付加した部分に対応する底部から体部への立ち上がり部分の外面が、角状に突起している形態のものが、XIII期では、基本形ともいえる位置を占めている。凹線を付けた部分は他の器壁よりさらに薄く、1mm程度の例も少なくない。この時期の圏線を付ける工具は先の丸い細い棒状のものが想定できる。この段階の出土土師器IIIISは、ほとんどが圏線ラインに沿って割れている。XIII期を、XII期の基調の無原則な進展と見るならば、両期を前後に対してまとめて見ることも可能になるだろう。

IIIISbを軸にして法量について記しておく。XII期では、IIIISbの口径は9.0cm台～9.5cm台、9.0cm弱～9.0cm台、8.5cm台から9.0cm強の3群があり、器高は3群ともに1.5cm台程が主である。この3群が、大きい方からXII期古・中・新と対応して法量縮小するものと見ている。IIIISは、提示した資料と同様にIIIISbとの位置関係を保って、法量縮小するだろう。XIII期では、IIIISbは口径8.0cm台から8.5cm台、8.0cm台、7.5cm台～8.0cm台の3群があり、器高は1.0cm台～1.5cm台程である。大きい方からXIII期古・中・新と見ておく。IIIISは、提示した資料と同様の位置関係を保って連動して法量縮小すると見ておく。提示した数値は、見通しを含むので注意されたい。

XIV期と位置づけられると考えている資料は図示した修学院磐座採集資料以外に、幕末～明治時代初頭とできる椹木家に伝世した資料群がある。この資料については、現状では図示できないので、椹木家から資料を譲り受けた難波氏の御好意で計測させていただいた分のうち、口径に関して作った分布図（表－４）を提示しておく。この両資料は、法量、形態などの型式的特徴から見ると、XIV期古・新の関係で位置付けられるものと見ている。現状では、散発的出土遺物以外のまとまった資料では、XIV期とできる資料はこの2資料が最も有力なものである。この２資料を軸に



表－４

してXⅣ期を理解したい。

XⅣ期は、ⅢNr、ⅢSb、法量分化したⅢSを基本的組成とする型式群によって構成されている。この組成は、XⅢ期に通じるものであり、骨格はⅩ期にまで通じるものである。また最も基本的な継続した変化の一つである法量縮小も続いており、組成の骨格や法量縮小の継続では大きな変化があるとは言えないが、XⅢ期の型式変遷の基調となっていた幾つかの要素は、方向変換している。

ⅢSの体部から口縁部の形態は、XⅢ期までは短縮化の方向で変化していたが、XⅣ期では伸長方向へ転換したといえる。この結果、体部から口縁部への断面形態も少し間延びした形態へと変化する。形態は類似したものだが、圏線から口縁端部までの幅が少し長くなり外上方へ開いている。この変化に連動するものではあろうが、底部が相対的に少し小さめとなっており、各法量のものとともに凹線状圏線もそれまでよりは小さい直径をもつものへと変化している。これらは、ⅢSの形態面での大きな変化で、それまでの変化の基調となっていた要素の方向転換であり、期の境での変化としてよいと考えている。

法量は、修学院磐座採集資料で主体となっているものではⅢSbが7.0㎝台～7.5㎝台で、器高1.0㎝強である。ⅢSは、ⅢS大１にあたると見られる最小口径の一群で、口径8.0㎝台～8.5㎝台で器高1.5㎝台である。ⅢSでは、ほかに口径11.0㎝前後で器高1.5㎝台の一群も同じ型式群に属すると見てよい特徴を共有している。口径13.0㎝台で器高2.0㎝台のものも１点（73）掲載しているが、これは別の調査地からの出土資料であり、古い型式群に属する可能性があるが、この資料はその型式的特徴から修学院のものと同型式群に属すると見ている。

椹木家からの受領資料では、ⅢSbは、口径6.0㎝台の一群と7.0㎝台の一群がある。5.0㎝台のものもあるが別扱いとする。先の両群も同一型式と見るか大きい一群を古いものと見るのか難かしいが、並存していたと見ても、修学院磐座のものより小口径化したものが主体である。ⅢSのうちで口径6.5㎝台のものをⅢS大１と見るのかも実際は決定しがたく、中法量の形式に属する可能性も大きい。口径8.0㎝台の一群を大１として見ると、修学院磐座のものより少し小型化している。ⅢSは、他にグラフにあるように、最大が口径24㎝台のものまである（表－４）。実際には、口径30数㎝の特大もあるが、口径24㎝台程が、日常使用の最大法量であるようだ。両資料のXⅣ期内の位置は、ⅢSb・ⅢSの法量差を根拠として、修学院磐座のものが古相に、椹木家のものが新相に位置し、間に一型式群が入る可能性もあると考えているが今のところ資料数も少なく、一つの期の内での新相、古相程度で理解しておきたい。

XⅣ期は、ⅢNr、ⅢSb、法量分化したⅢSを基本的組成とする型式群によって構成されている。この基本的組成は、基本形態とともにⅩ期で確立されたものに通じるものである。この組成と形態は型式変遷が進んではいるが、最も長期間に渡り骨格が維持されたものといえる。社会からの大きな外的な変化の力をほとんど受けることがなくなった製品の実像とも考えられる。しかし、期レベルでの変化、二期を単位とするような変化を読みとることが出来る点から見れば、土師器生産が社会からまったく孤立したものではなかったということも一面で示しているはいるが、歴史変化の直接的反映と理解することは難しく、歴史上に生きた生産者を通した、間接的反映と見

ておくのが現状では妥当であろう。またこのような継続的変化から見ても、土器などの生産物においても、変化が基本であり、不変な期間はなかったと推測出来る。時間幅は短くともその時間幅に内では不変を前提としている型式認識を再検討する必要がある。今回は、旧来の型式学的認識と表現方法に依存して、型式変化を記したが、型式変化の進行形を組み込んだ型式学の構築が不可避と考えている。

小結　Ⅰ期からⅩⅣ期及び各期で古・中・新とするそれぞれの型式について記した。それに対応する型式変遷図とでも表現すべき図版を掲載している。今回提示した図版を、コピーして法量（口径）の基準ラインをそろえて貼り付けて、型式変遷の全体図を作って見てもらうとマクロ的視点から型式変遷の検討が可能となるので、一度作って見ていただきたい。

土器様相の変化を、型式と期の変遷という形で表現した。この表現では、型式は型式間の境で次の型式へ変化しているとする従来の型式認識とその表現方法と基本的に同じである。そのように理解されてもいたしかたないが、実際の多くの土器群から看取しえる変化の実相は、異なったものである。型式間の変化は型式の各要素の跛行性を内包した漸進的な変化というのが実体に近い認識である。型式内においても緩やかではあっても同様の変化を読み取ることはできる。その意味では境としてのラインは類似度を基準にして設定した極めて論理的な結果の産物ではある。設定した標準型式群にまたがる様相（中間的様相）をもつ土器群は決して少なくない。このような様相を持つ土器群に関しては、現状では型式群の構成要素の重要度を考えた上で、類似度の総合的判断を加えたのちに、所属を確定している。近い将来には中間的様相を持つものの実時間幅を実証的に示せるならば、そのかたちでの提示を行ないたいと考えている。

Ⅰ期からⅩⅣ期全体を通覧すると、各形式の継続する（型式）変化と、異なる標準型式群ではあっても、形態や組成などの骨組レベルでは共通した様相をもつ標準型式群の集合体があることが分かる。時間軸上に並ぶ標準型式群の集合体の最小単位を期としている。今後型式の細分を進められたとしても、この期の枠組に対する認識が大きく変えられることはないだろう。

期の単位を一つの様式で理解することはできると考えているが、用語としては今のところ使用しない。しかし、様相の骨格が共通する2つ程度の期の集合体も存在している。このレベルで様式という用語を使用したいと考えている。

Ⅰ期は、先でも記したが、一段階前の７世紀後葉から８世紀前半期に、主に藤原京から平城京に展開する土器様相に共通する基本要素を持っており、一つの共通した大きな様相を示す段階（１つの様式）として認識することができる。以下Ⅱ期とⅢ期、Ⅳ期とⅤ期、Ⅵ期とⅦ期、Ⅷ期とⅨ期、Ⅹ期とⅪ期、Ⅻ期とⅩⅢ期、ⅩⅣ期以降が、同レベルでまとめて見ることができると考えている。この単位とその関係性に対する評価は、共伴する他の土器、陶磁器も加えて、全体的な様相変化の認識を深めさらに検討した上で様式認識として記したい。

７．その他の土師器食器形態について

京域及びその近郊遺跡からは、各時代に主体を成す土師器食器形態の他に、他地域産とみられ

る土師器食器形態は少数づつではあるがよく出土する。土器、陶磁器類の出土量総体が膨大なので、相対的に少量に位置するこれらの土師器食器形態が目立つ時代がほとんどない。しかし、個々の遺跡等では、一定量まとまった出土状況を呈する資料は少なくないし、少数づつであれば各時代ともに、多くの遺構等から出土している。現状では、位置づけや理解、また産地の特定などが難しいものが多い。以下では、これらについて紹介を主眼にして現在の状況認識を記しておきたい。

Ⅰ期中、同新とした図－16、１～11、17～20等のAK、BKとした土師器食器形態は、河内から摂津東部南半（現在の大阪府側）の地域から搬入されたものと見ている。河内が主体とも考えられるが、現状ではまだ断言は難しい。宮、京を問わずに出土するが、暗文やヘラミガキを持ち、比較的仕上げのよいものは、宮域からよく出土する印象がある。『延喜式』[17]によれば、河内は大和とともに土師器の調納国であり、注目している一群である。体部の立ち上がり角度がつよく、口縁端部だけを強めに外反状にナデ処理し、端部直下の内面が肥厚する特徴的なものも多く、主体を成すものではほとんど見られなくなった暗文やヘラミガキを残すものもこの一群に含まれる。製作技法もてづくねであり、基本技法は主体を成すものと同じであるが、体部外面の（ヨコ）ナデ幅が広く、ヘラケズリ技法も見られるが、外面全体をヘラケズリするｃ手法と出来るものはⅠ期でもほとんど見られない。製作技法痕跡にも、主体の一群との違いが見いだせる。中河内や南河内産の土師器甕、羽釜、竈なども、Ⅰ期では一定量出土がみられ、これらの食器形態と関連するものと考えている。これらの食器形態は、Ⅱ期古以降には減少するが、南河内産の土師器甕は増加傾向を示しながら出土は継続する。なお、Ⅱ期新とした図－16、29、30は、平安宮内裏SK01、07から出土したものである。外見上では、外面の押圧痕が目立ちⅠ期頃に見られる前述の食器形態とは大きく異なるが、この頃にまで少数出土が見られる型式変化を遂げた河内産の土師器椀である。

Ⅰ期頃までの河内産を中心とすると見ている土師器食器形態は、近年になってようやく実体の一部が把握出来るようになってきたものである。今までは主体の一群と区分されることなく報告されていた例がほとんどであった。暗文やヘラミガキが施されたものは、古い型式に属する混入品とされている報告例も見られるが、これは平安京跡に限った事ではない。この点は平城京、長岡京でも同様であり、ほとんどA型式あるいはC型式に包括して報告されている。既報告資料も再検討すれば認識が深まるだろう。いずれにしろ、都城の土師器供給体制を理解する上では重要な資料であり、より明確な実態把握が必要と考えている。

椀Nとした図－16、14、21は、長岡京跡で出土がよく見られるようになる土師器椀で、体部外面にうねった粗いヘラミガキを持つ点が大きな特徴である。同形式の小型椀は少数出土するが、他には共通する要素を持つ器形がないこともあり産地の推定が難しいが、上述の一群に含まれる可能性もあると考えている。Ⅰ期新では、減少しておりⅡ期古以降はほとんど見られなくなる。皿Ｃとしている図－16、15は、Ⅰ期に少数見られるもので、長岡京跡で少数づつだがよく出土している。しかし、特徴を把握しにくいもので、平城宮、京でよく出土する椀Ｃや皿形化した杯Ｃ

とされている大和産の一群とも異なる。また、平城京～南都Ⅰ期頃[18]に見られるⅢCとも若干様相が異なるので、産地の特定は難しい。

Ⅱ期古としている図－18、1～3は、大和北部（南都）産と見ている土師器杯A、杯A、ⅢAである。都城の山城への遷都に伴い京域に近い地域に移動した生産集団の一派と、同じ系統に属するが、大和へ残った工人グループが生産を継続していた土師器食器形態と見ている。Ⅰ期では不鮮明だが、この時期では、型式特徴に若干の差異が観取出来るようになる。京域で主体の群ではⅡ期古になると小型食器形態ではe手法化が急進するが、大和側のものはⅠ期で盛行したｃ手法（外面ヘラケズリ）を残している率が高く、全体に器壁の薄手化の進行が早い。平安京域の主体の群では減少傾向を示し始めるⅢAⅠが多く残っている。またⅢAⅠでは、小玉縁状に口縁内端の肥厚部分が発達気味に残り、より特徴的なものとなって来ている。これらの類品は、南都のSD650Aや平城宮跡SK1623出土資料[19]中に認められる。大和産と見られる土師器食器形態は、Ⅱ期中以降では出土を今のところ確認できていないので減少してゆくと見ているが、Ⅰ期での出土状況の明確な把握もまだ出来ていないので、多数あったものが減少するのか、本来少ないのかを判断しきれていない。Ⅰ期～Ⅱ期での型式区分と出土状況の把握は大きな課題である。

椀、杯、ⅢでＲとしたものは、回転台やろくろなどの回転力を利用して製作された土師器食器形態である。回転する製作台に関しては、無軸のものを回転台、有軸のものをろくろとして用語上区分しておきたい。技法痕跡から製作台が有軸か、無軸かを判断するのは難しいが、ケズリやナデの痕跡の観察から回転力が一定あるろくろで作られたと推察されるものと、回転力が非常に弱いと見られる両者が出土している。これらの土師器食器形態は、少数ではあるがⅠ期から出土が見られるが、Ⅰ期新頃からは、緑釉陶器等の器形に通じる椀、Ⅲ形態のものも見られるようになる。一方、須恵器の旧器形といえる杯A形式等の系譜上で理解できる型式のものも、以降も少数づつではあるが出土が継続している。今回は全ての時期のものを掲載出来なかったが、Ⅰ期からⅦ期頃までは出土を確認しているが、江戸時代に新たに登場するろくろ土師器以外では、Ⅷ期以降はこの系譜上にあるものは、混入品と見られるものを除くと今のところほとんど知らない。

Ｒとしたこれらの土師器は、産地の特定は現状では難しいが、微妙な型式差から多くの産地のものがあると言える。西日本各地のものが多いと見ているが、東日本産とみられるものも少数ながら含まれている。各期で遺構によっては、一定量まとまった出土例も見られるが、全体的出土状況から見て京域及び近郊遺跡では、流通品とはなっていなかったものと考えている。別の目的をもった人々の動きに伴って京域へもたらされたものと考えている。

図－17、15～18は、てずくねで製作されている点や形態は、主体の土師器食器形態と共通するが、貼付高台を持つ食器形態である。図－17、15、17、18はⅢAcに高台を付けたものであり、同16は口縁形態に古相を残すが、同型式のⅢNに高台を付けたものと理解できる。今回掲載出来なかったが、Ⅳ期頃から少数見られるようになり、Ⅴ期～Ⅵ期では出土例が若干多くなるようである。Ⅲ期中並行と見ており、時代は少々古くなるが、南都の薬師寺西僧坊床面出土遺物[20]中に、本

期 年代	型式	主な出土資料	備　考
750頃	古	平城宮SK2113（58）、平城宮219（57）	c手法（ケズリ手法）の盛行期／椀A多数
Ⅰ	中	平安宮内裏外郭SX4・9（15）、左兵衛府SD04（13）、右京六条三坊四町SD20（9）	
	新	右京三条三坊五町SD19（32）、中務省SK201（15）、冷然院SD1・2（38）、大覚寺御所跡SD43（38）	
840頃	古	烏丸線No.60溝1（2）、左京七条二坊一町SE64（6）、西市SX25（39）、内裏承明門地鎮遺構80（16）、左獄井戸321（49）	e手法化／椀と杯の差が不明瞭となる／法量の縮小化
Ⅱ	中	右京三条三坊三町SX07（32）、一乗寺向畑町SX03（28）、平安宮東雅院SK2（22）、西市SE20（39）、北野廃寺SK15（26）	
	新	左兵衛府SD01（13・39）、右京二条二坊十五町SX25（17・39）、内裏SK01・07（24）、西市SE03B（39）	
930頃	古	右京二条二坊十五町SD13・14・23（17・39）、右京二条二坊三町SX1（14）	e手法の異形的発達／薄い土器／杯と皿の差が不明瞭となる
Ⅲ	中	烏丸線立17井戸1（2）、内裏SK25（18）、右京二条二坊三町SE1（14）	
	新	左京四条三坊五町SE21（5）、左京内膳町SK18（47）、烏丸線No.23土壙6（1）	
1010頃	古	高陽院SG1-A（13・40）、左京二条三坊九町SE273中層（40）、左京四条三坊九町土壙30（40）	厚手化する／口縁端部の外反するものが中心となる／2段凹みナデ
Ⅳ	中	烏丸線立14土壙11（1）、烏丸線No.42土壙45（2）、烏丸線No.67井戸7（3）、法勝寺下層遺構（27）、内膳町SD41A（47）	
	新	左京六条一坊八町SE3（40）、押小路殿跡3次井戸206直上土壙（44）、烏丸線No.77井戸17（3）、内裏承明門地鎮遺構76（16）	
1080 ~90頃	古	烏丸線No.71井戸6（3）、高倉宮・曇華院4次井戸12（45）、烏丸線P.F区2EI土壙1（3）、左京四条一坊六町SE8（4）	口縁端部が立ち上がり端面が内傾し三角形状を呈するものが主力／2段凹みナデ
Ⅴ	中	烏丸線No.61案茶褐色泥砂層Ⅱ（2）、烏丸線No.34茶褐色泥砂層Ⅱ・同焼土層Ⅱ（1）、左京四条一坊五町SK10（4）	
	新	烏丸線No.61溝2-4（2）、高倉宮・曇華院4次溝7（45）、鳥羽離宮第124次溝28（29）	
1180頃	古	烏丸線No.51土壙26（2）、左京八条三坊七町SD24・25（31）	1段凹みナデ化し口径縮小化／中小2種が主力／白色系が分化する
Ⅵ	中	高陽院SG1-D（14）、烏丸線P.D区33WⅡ土壙1（2）、烏丸線No.72土壙73（3）、内膳町SK118（47）、鳥羽離宮第13次SD1下層（40）	
	新	烏丸線No.60土壙25（2）、烏丸線No.48土壙2-B（2）、烏丸線No.49土壙13（2）、左京八条三坊二町G4P19-1（42）	
1270頃	古	左京七条二坊一町SK12（5）、押小路殿跡3次井戸205（44）、内膳町SK154（47）、左京九条三坊SK86（2）	中小の口径縮小化／体部の外反化／白色系は薄手化しヘソ皿定形化する
Ⅶ	中	烏丸線No.48土壙2-A（2）、烏丸線No.67土壙15（3）、烏丸線No.80土壙51（3）	
	新	烏丸線No.41井戸2（2）、左京五条三坊十町土壙17（37）、烏丸線No.50土壙54（2）、白河北殿SK10（54）	
1360頃			

（　）は文献No.

表－5

期 年代	型式	主な出土資料	備　考
1360頃	古	烏丸線No.72土壙39（3）、左京四条三坊十三町SK87・SK533（43）、烏丸線No.37土壙13下層（1）、左京八条三坊二町G3P1	赤色化進展し定形化する／白土器・赤土器的様相
VIII	中	烏丸線No.71土壙40（3）、烏丸線No.78土壙9（3）、烏丸線P.G区22EII土壙1（2）、左京四条三坊十三町SK388（43）	
	新	烏丸線No.73土壙21（3）、烏丸線No.3土壙6（1）、左京八条三坊七町SK14（31）、烏丸線No.67土壙7（3）	
1440頃	古	烏丸線No.80土壙42（3）、左京五条三坊十五町土壙D1・土壙E（41）	白色系厚手化し褐白色化／器種分化進展／器高の低下進む／赤色系口径の縮小化
IX	中	烏丸線No.68土壙12（3）、烏丸線No.73溝1（3）、烏丸線No.61井戸5（3）	
	新	烏丸線No.47土壙4（2）、烏丸線No.51土壙15（2）、内膳町SK141・SK142（47）、白河北殿SD24（54）	
1500頃	古	烏丸線No.80土壙55（3）、烏丸線X-5土壙4（3）、烏丸線No.62溝1（3）、烏丸線No.54溝2（2）、烏丸線No.59溝1（2）、	白色系の口縁部委縮化／器高の低下終わる／内面底部周縁凹状圏線化進む／白色系最小径は圏線喪失（丸底化）／赤色系形態変化／新段階大型
X	中	烏丸線No.31土壙7（1）、本圀寺濠上層（36）、烏丸線P.G区4WIII土壙2（2）、烏丸線No.52濠3（2）、内膳町SD41B（47）	
	新	烏丸線No.52濠2（2）、烏丸線X-6濠1（3）、烏丸線X-2濠2（2）、烏丸線No.13溝1（1）、烏丸線No.46濠1（2）	
1580～90頃	古	烏丸線No.39土壙4（2）、烏丸線No.54井戸1（2）、烏丸線No.15濠1（1）、左京一条二坊五町SK18（7）、内膳町SK13	内面底部の凹状圏線定形化／口縁端部不明瞭化／皿Sb（丸底小皿）大型化ピーク
XI	中	左京一条二坊五町SE300・SE273・SK468（7）、烏丸線No.62土壙1（3）、烏丸線No.39土壙2（2）	
	新	左京一条二坊五町SK414（7）、烏丸線No.44土壙3（2）	
1660頃	古	（古相）平安京隣接地大雲院跡SK50（7）、左京四条三坊十三町SK339（43）	凹状圏線標徴化（圏線加飾化）／薄手化・法量の縮小化進む
XII	中	（新相）左京二条二坊十町撹乱7（8）、京大病院構内AH19区SD22（52）、内膳町SE96・SF02直上火災層（47）、左京北辺三坊五町SE39（48）	
	新		
1740年代頃	古 中 新	左京四条三坊十三町SK02（43）、京大病院構内AJ18・19区SX2・SX10（51）、京大教養部構内AP25区SD2（51）	薄手化・法量の縮小継続／薄い器壁・体部の短縮化ピーク
XIII			
1820年代頃	古 中 新	修学院磐座採集遺物（55）、京大病院構内AF19区SX1（53） 岩倉木野・椹木家伝世資料	法量の縮小継続／凹状圏線（底部）小型化進行／体部伸長
XIV			

（　）は文献No.

表－6

図
1
2

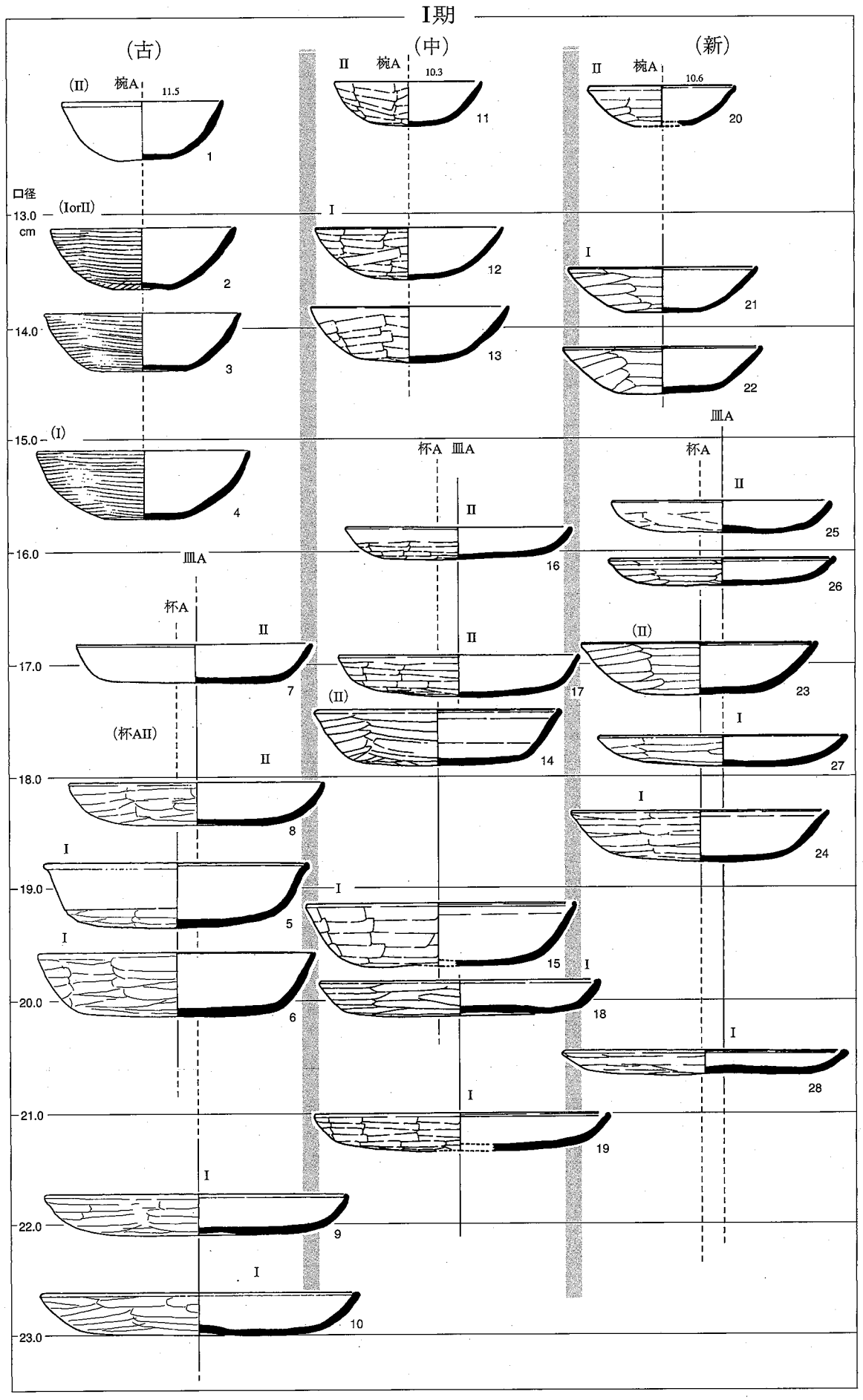
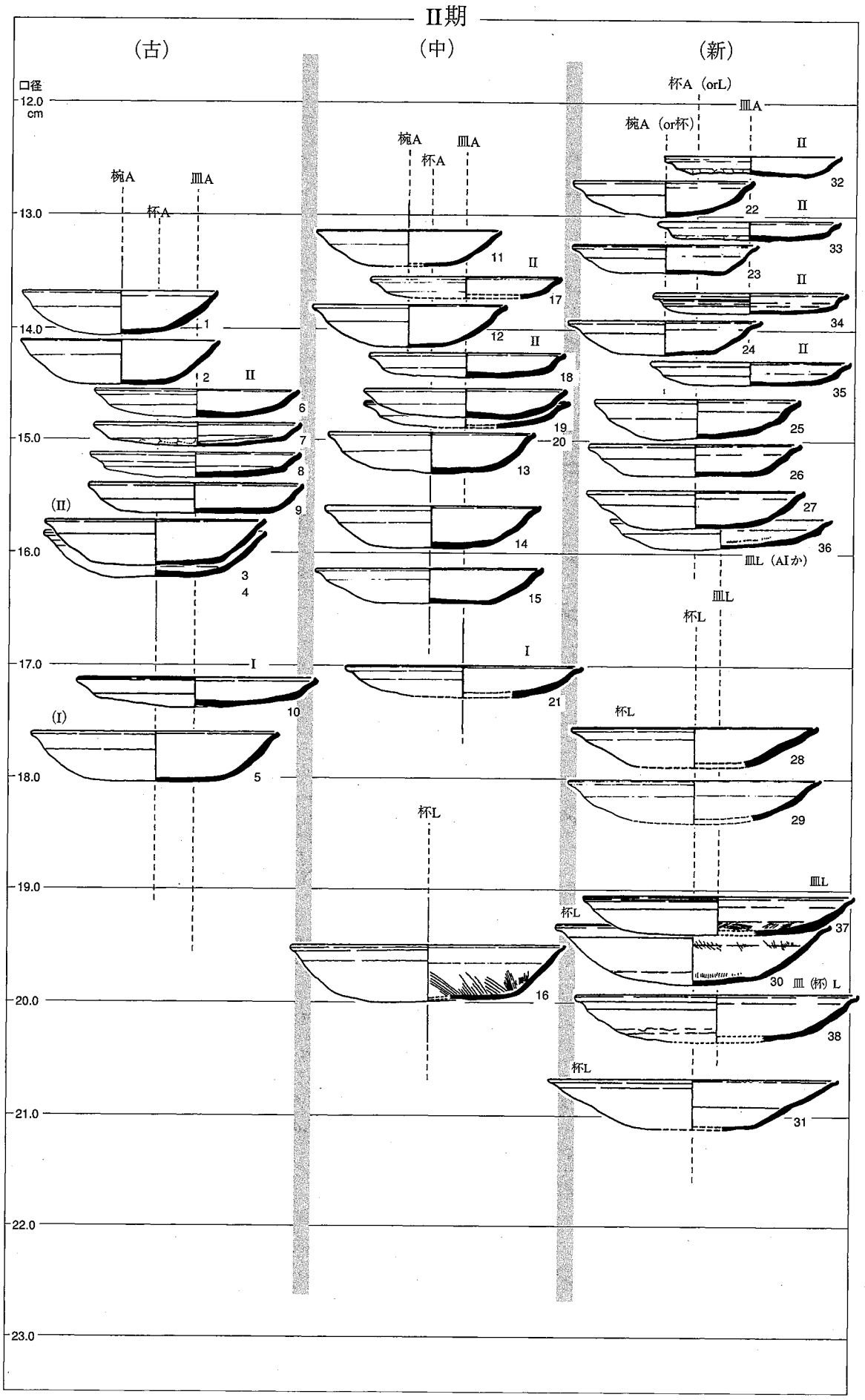
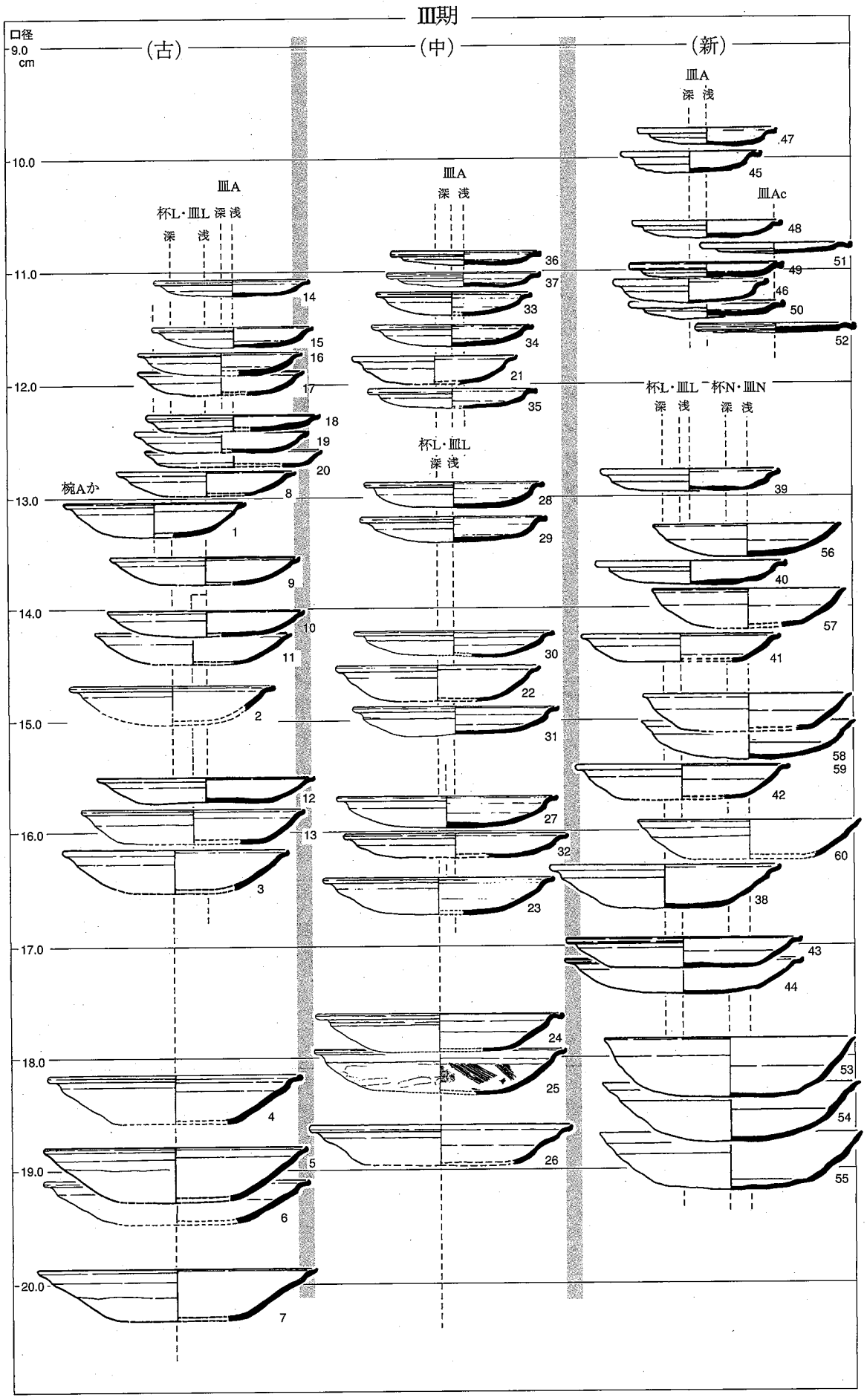

I期
(古)
(中)
(新)
(II)
椀A
11.5
II
椀A
10.3
II
椀A
10.6
口径
13.0
cm
(IorII)
I
14.0
15.0
(I)
杯A
IIIA
16.0
17.0
(II)
(杯AII)
18.0
19.0
20.0
21.0
22.0
23.0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

図1-3


II期
(古)
(中)
(新)
口径
12.0
cm
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
18.0
19.0
20.0
21.0
22.0
23.0
椀A
皿A
杯A
椀A
皿A
杯A
杯A (orL)
皿A
椀A (or杯)
II
(II)
I
(I)
杯L
皿L
皿L (AIか)
皿L
杯L
皿L
杯L
皿 (杯) L
杯L
杯L
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38

図－4


Ⅲ期
口径
9.0
cm
(古)
(中)
(新)
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
18.0
19.0
20.0
ⅢA
杯L・ⅢL
深
浅
椀Aか
ⅢA
深
浅
杯L・ⅢL
深
浅
ⅢA
深
浅
ⅢAc
杯L・ⅢL
杯N・ⅢN
深
浅
深
浅

図－5

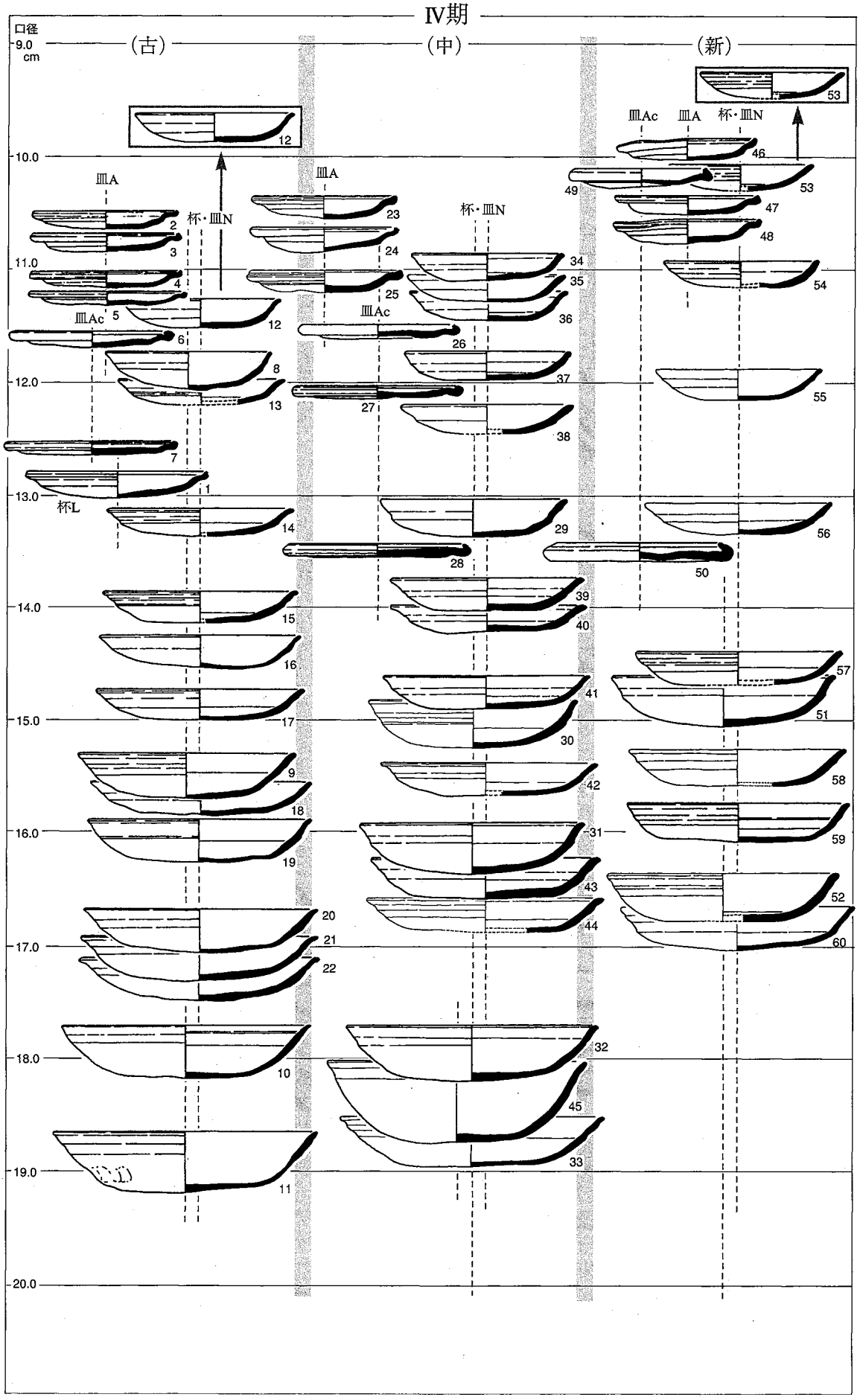

Ⅳ期
口径
9.0
cm
(古)
(中)
(新)
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
18.0
19.0
20.0
Ⅲ A
杯・Ⅲ N
Ⅲ Ac
杯 L

図
1
6

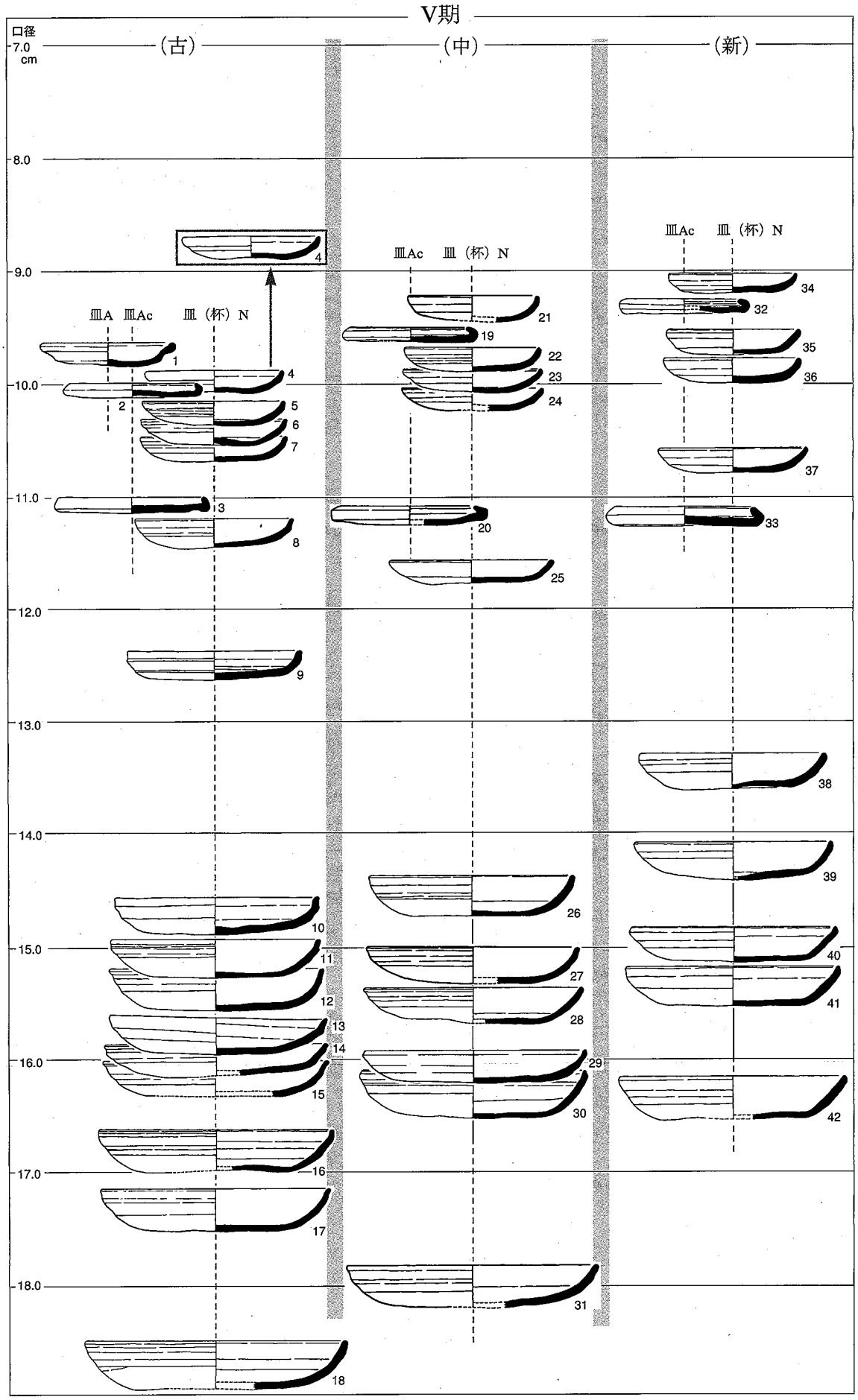
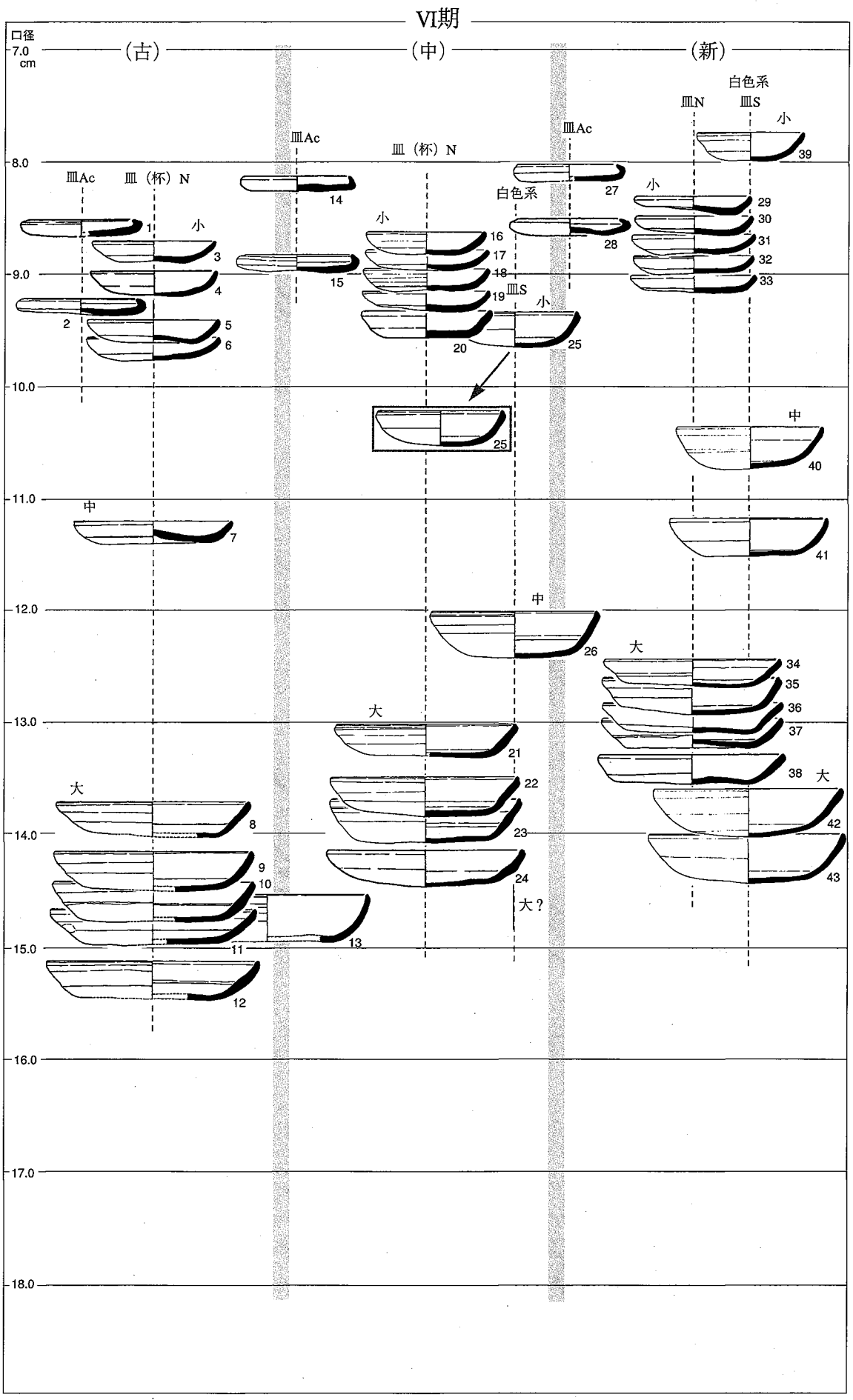

V期
口径
7.0
cm
(古)
(中)
(新)
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
18.0
ⅢA
ⅢAc
Ⅲ（杯）N
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42

図-7


VI期
口径
7.0
cm
(古)
(中)
(新)
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
18.0
ⅢAc
Ⅲ（杯）N
小
中
大
白色系
ⅢS
ⅢN
大？

図－8

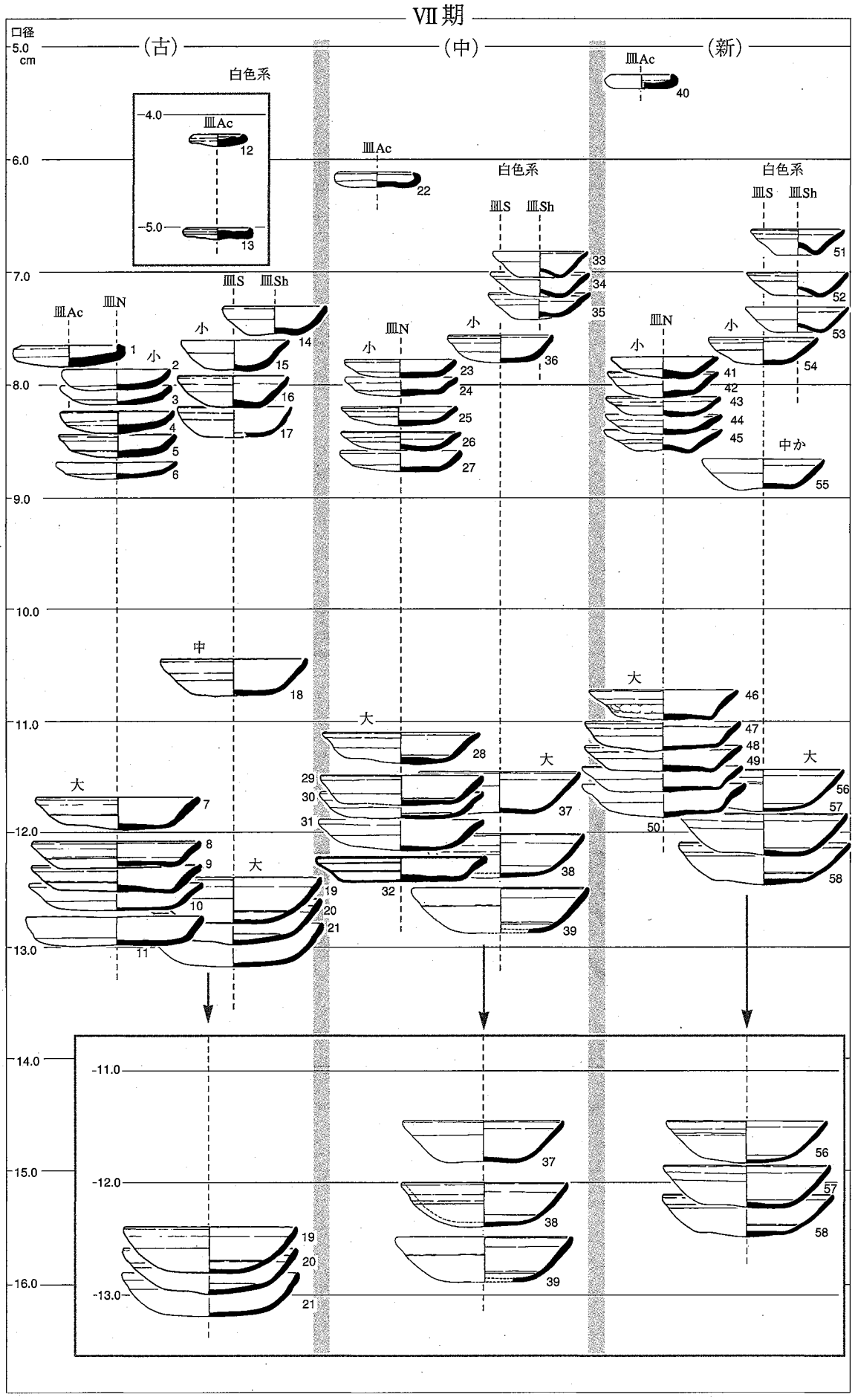
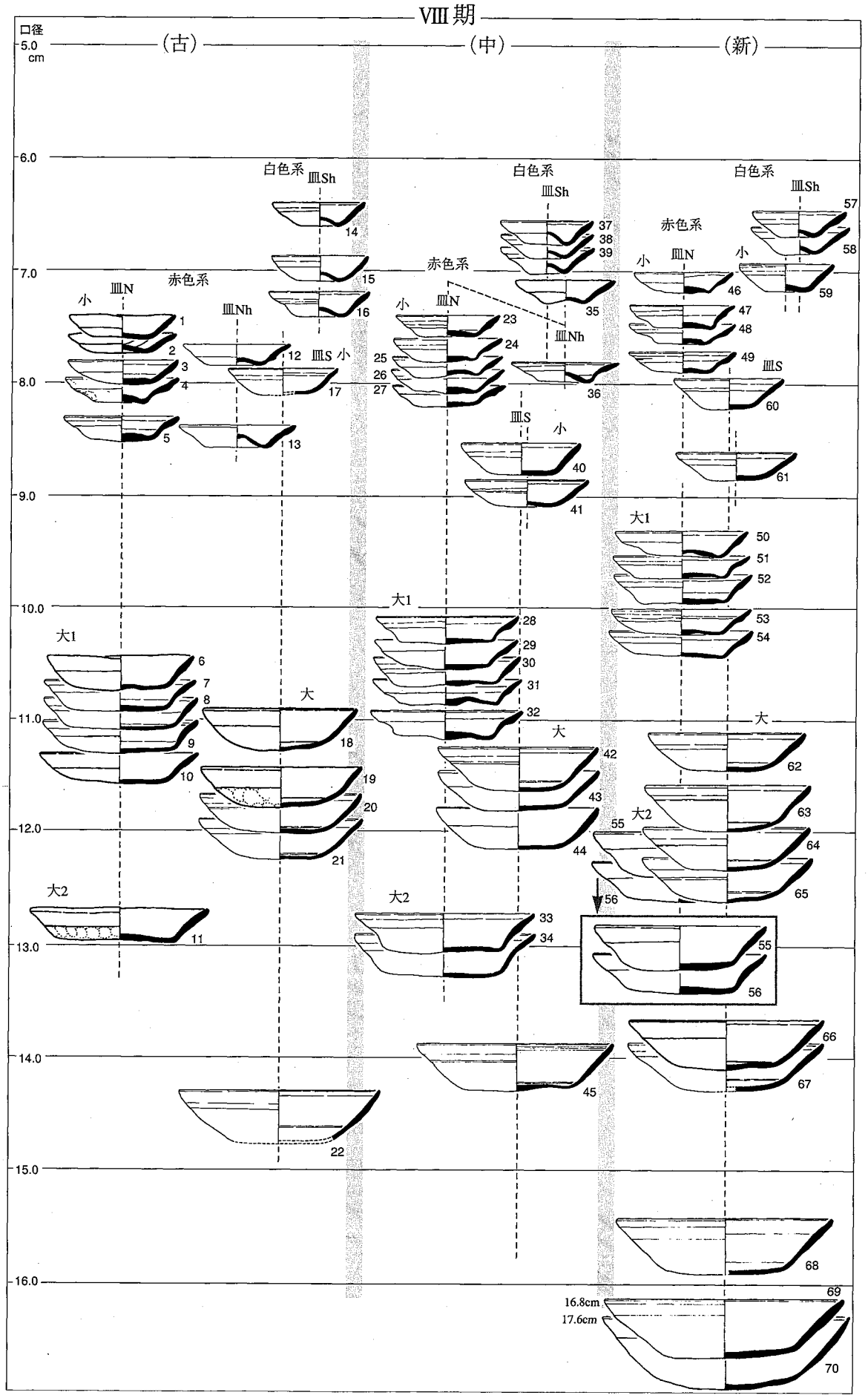

Ⅶ期
口径
5.0
cm
(古)
(中)
(新)
白色系
Ⅲ Ac
Ⅲ N
Ⅲ S
Ⅲ Sh
小
中か
大
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
-4.0
-5.0
-11.0
-12.0
-13.0

図-9


VIII期
口径
5.0
cm
(古)
(中)
(新)
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
白色系
赤色系
Ⅲ Sh
Ⅲ N
Ⅲ Nh
Ⅲ S
小
大1
大
大2
16.8cm
17.6cm

図－10

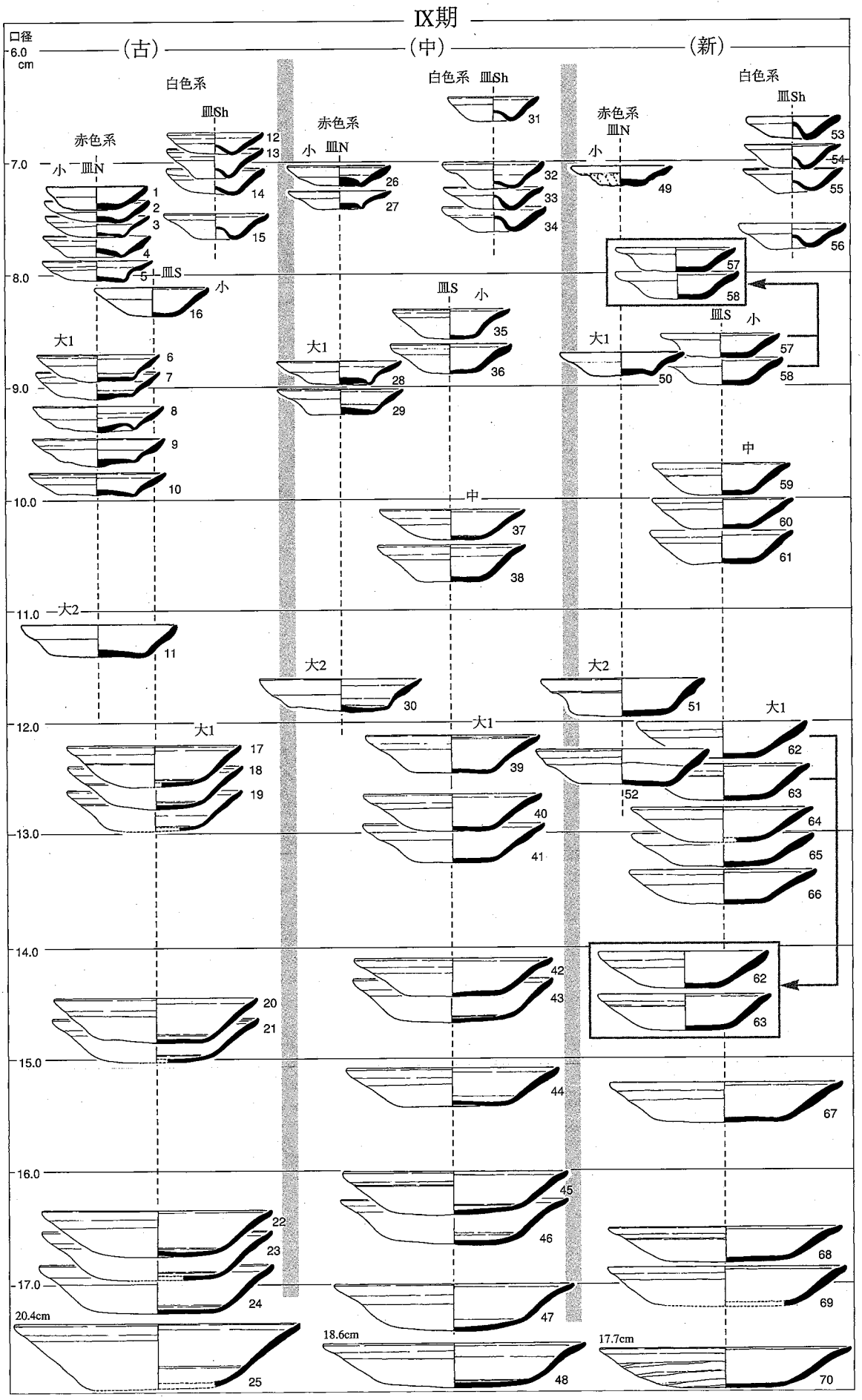

Ⅸ期
口径
6.0 cm
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
(古)
(中)
(新)
白色系
赤色系
ⅢSh
ⅢN
ⅢS
小
大1
大2
中
20.4cm
18.6cm
17.7cm

図
1
11

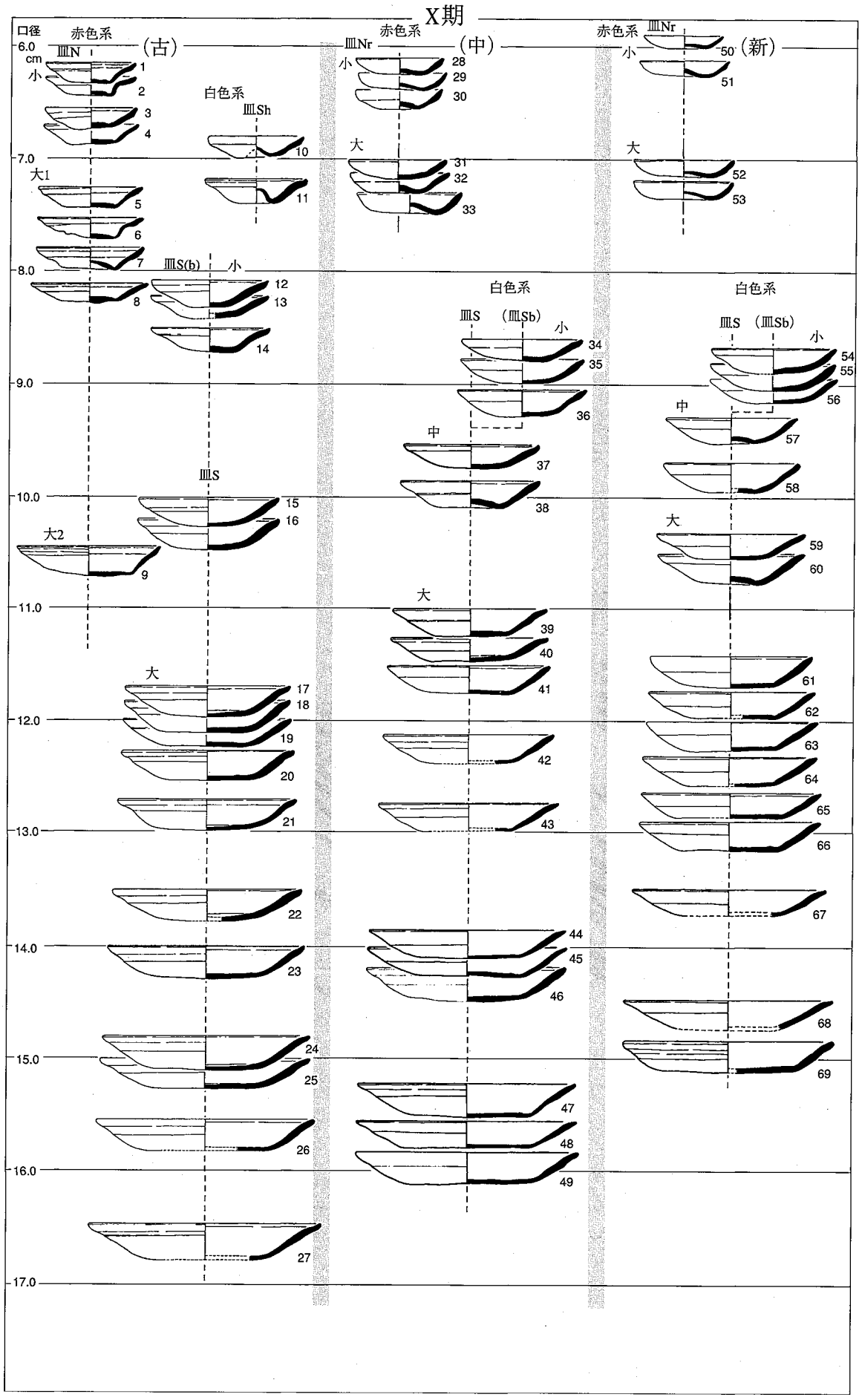

X期
口径
6.0
cm
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.0
赤色系
Ⅲ N
(古)
小
大1
白色系
Ⅲ Sh
Ⅲ S(b)
小
Ⅲ S
大2
大
Ⅲ Nr
(中)
小
大
中
白色系
Ⅲ S
(Ⅲ Sb)
小
中
大
赤色系
Ⅲ Nr
(新)
小
大
白色系
Ⅲ S
(Ⅲ Sb)
小
中
大

図
|
12

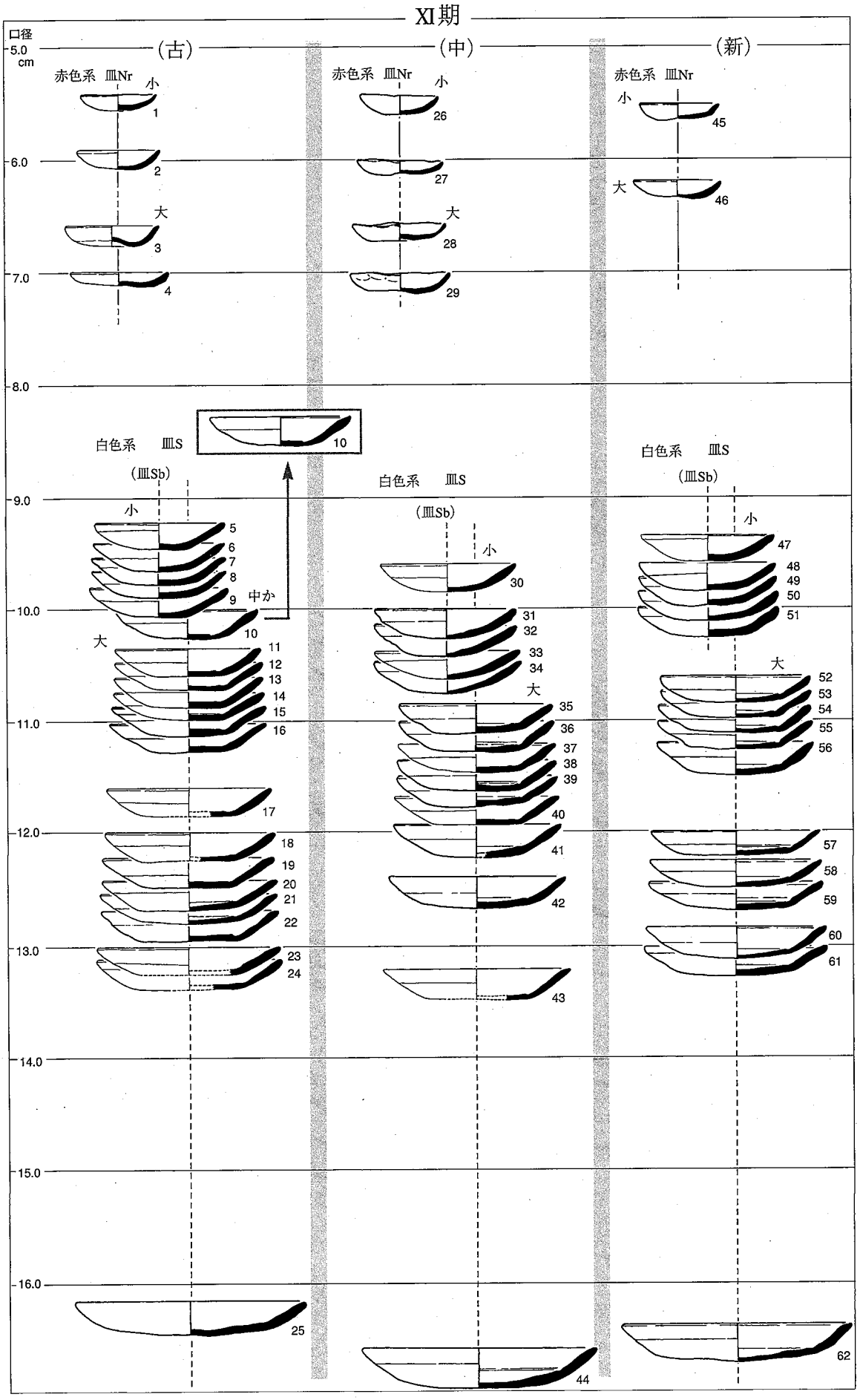
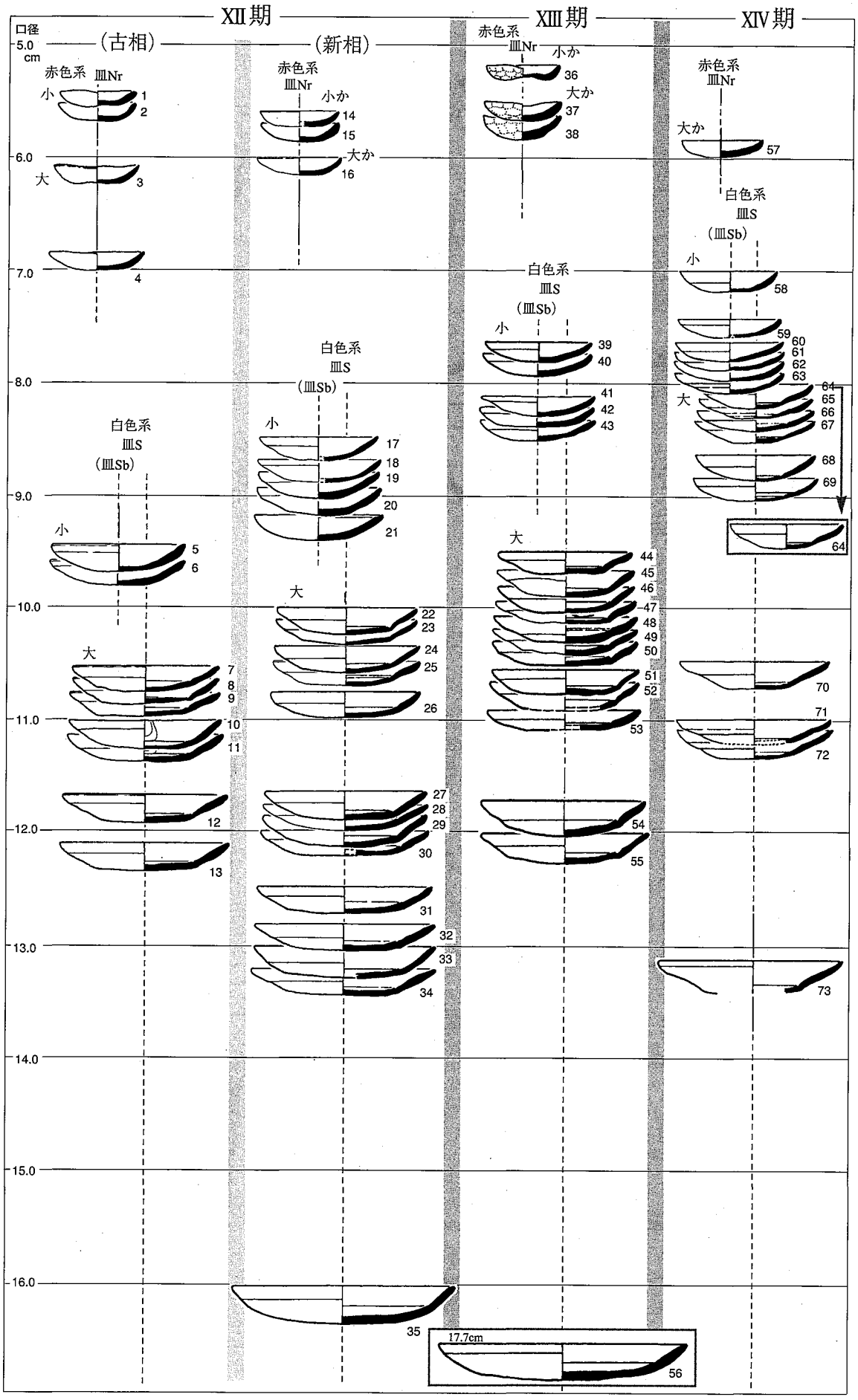
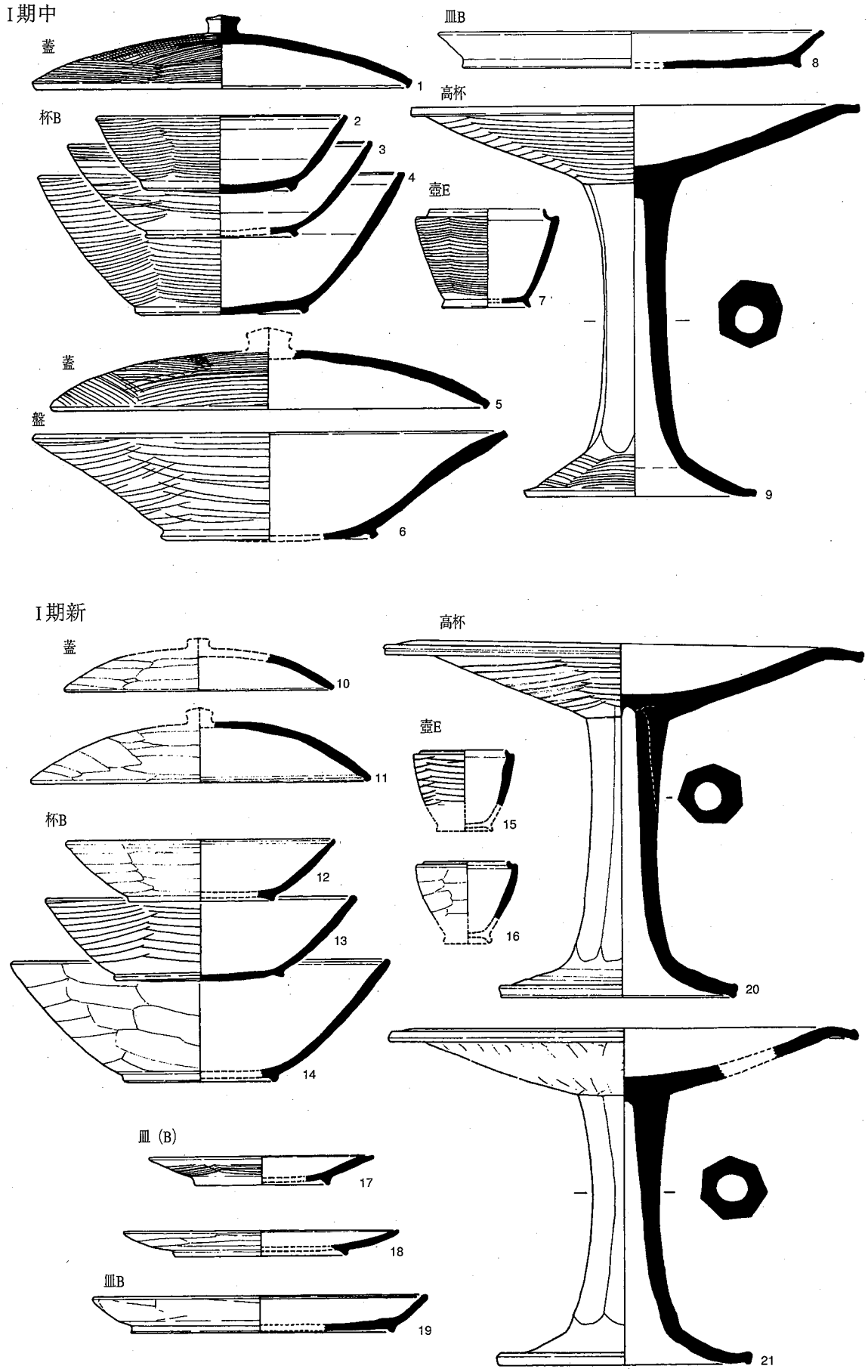
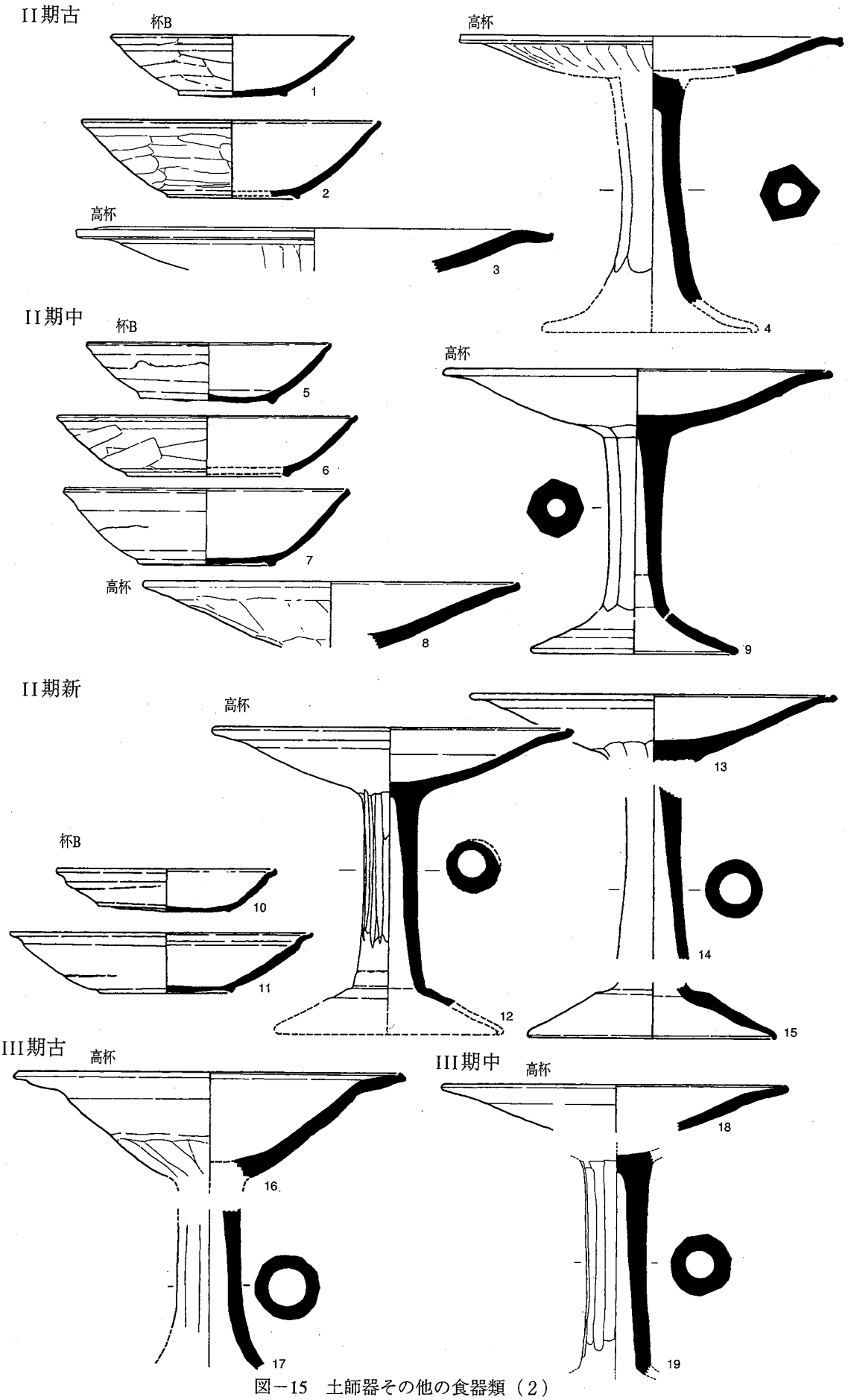

XI期
口径
5.0
cm
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
(古)
(中)
(新)
赤色系 ⅢNr
小
大
白色系 ⅢS
(ⅢSb)
中か
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62

図
—
13

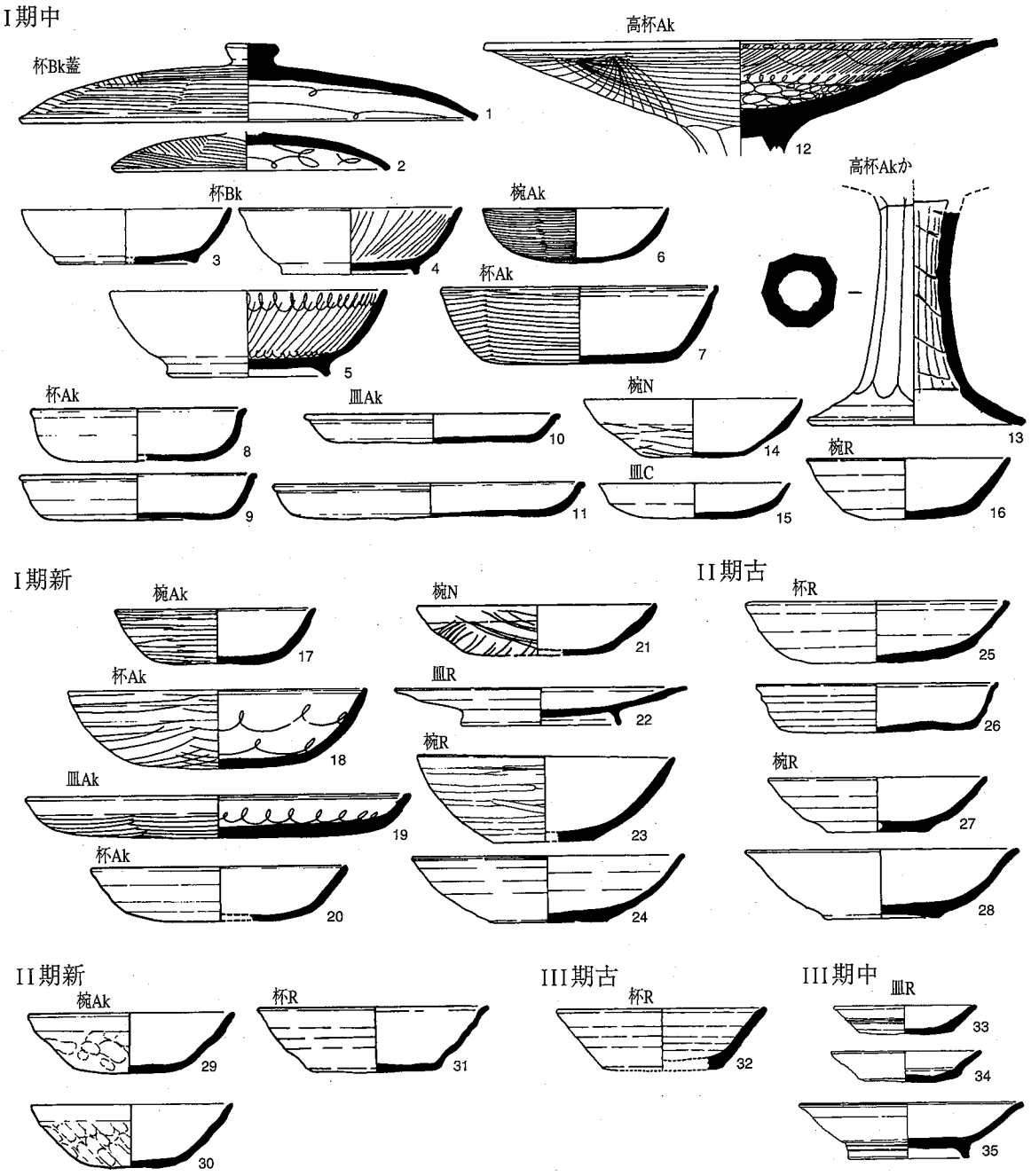

XII期
XIII期
XIV期
口径
5.0
cm
(古相)
(新相)
赤色系
IIIINr
小
大
小か
大か
白色系
IIIIS
(IIIISb)
5.0
6.0
7.0
8.0
9.0
10.0
11.0
12.0
13.0
14.0
15.0
16.0
17.7cm



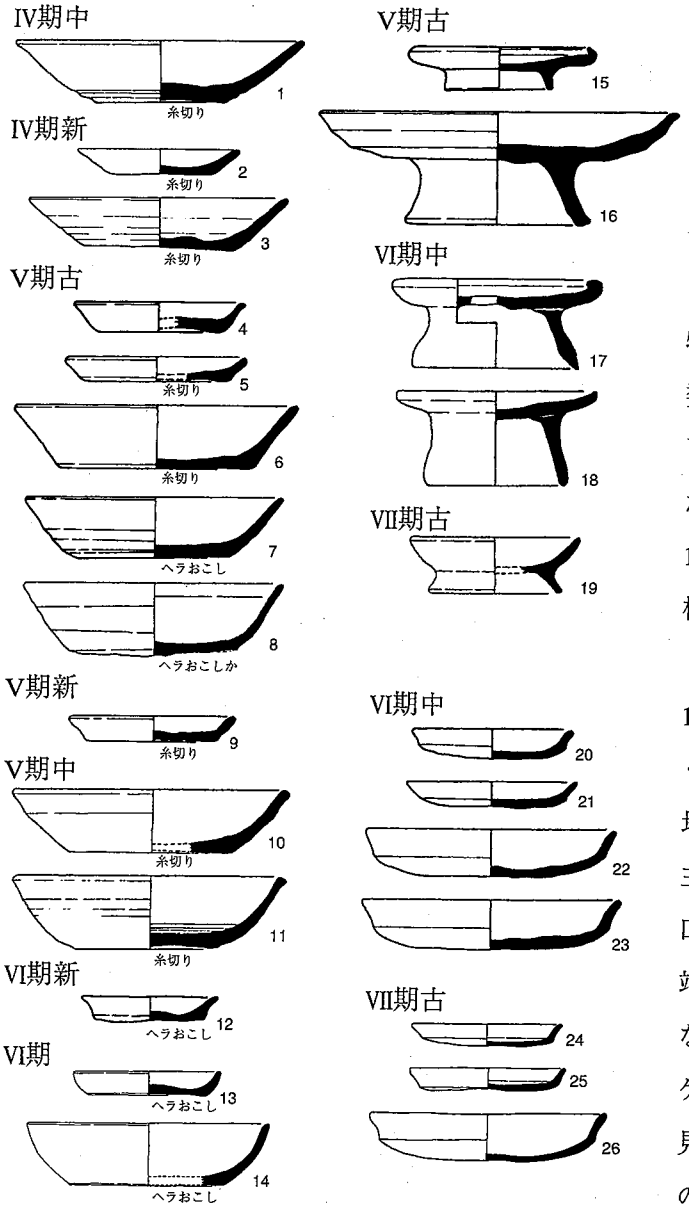
図－14　土師器その他の食器類（1）



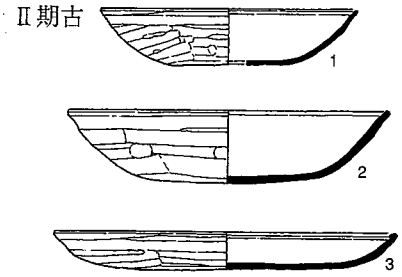
図－15　土師器その他の食器類（2）



図－16　主体を成す土師器以外の土師器食器類（1）



図－17　主体を成す土師器以外の土師器食器類（2）



図－18　大和産土師器食器類

来高台を持たない在地産土師器皿等に、高台を付けた器形が数多く含まれている。寺院内での特定用途に使用するための特注品と見られる。上述の土師器食器形態も同様の特注品の可能性もある。出土例を知らない前後の時期でも特定の遺跡、あるいは一般遺跡でも少数であれば出土する可能性は大きい。Ⅶ期古とした図－17、19やⅠ期新とした北野廃寺SD20から出土している図－16、22の土師器皿などは、類似した性格を持つものである可能性もある。

Ⅵ期中、Ⅶ期古として掲載した図－17、20～26の2群の土師器皿は、てづくね技法で作られてはいるが、乙訓郡地域産と見ているものである。各期で主体のものと法量は近似しているが、口縁部が端部にかけて少し薄くなり、端部を外反あるいは外反気味の収め方などに特徴が見いだせるし、内面にハケ目痕跡が残る例がⅦ期頃の資料でも見られる。ハケ目痕跡は、乙訓郡域内の出土品[21]ではⅩ期並行段階でも残っている。同形式の可能性がある古い型式群に属するものは、Ⅴ期頃には出土例が確認できるようになり、Ⅶ期頃までは一定量まとまった出土例は、京域内でも幾つか確認している。

同形式の土師器食器形態は、桂川以西の旧乙訓郡内では出土例は多く同地域内では、少なくとも平安時代後期から中世においては一般的な出土品であると見られる。桂川以東でも、京域の北西部や、西側から南側の近郊遺跡では出土例がよく見られる。これらの出土状況から上述した土師器食器形態は、乙訓から搬入されたものと考えている。しかし、近似した様相の土師器食器形態は、大阪府の旧三島郡域の中世遺跡[22]からの出土例も知られており、これらを含めてさらに検討していく必要はある

だろう。

報告例のあるものを中心に、京域で主体を成すもの以外の、常に少数に位置する他地域産と見ている土師器食器形態について記した。これら以外にも、今回は紹介することが出来なかった出土例は決して少なくはない。また、同様の遺物の発見は今後とも増加するだろう。これらの遺物は、少数とはいえ他地域と京域との広い関係を示す物証であり、産地の特定を含め解明が必要な課題は多い。

8．型式・期の年代観

都城関係の遺跡から出土する遺物が、実年代を推定できる手掛かりが豊富であるとの理解は状況認識としては間違いではないと思う。しかし、記年銘木簡や記年銘のある墨書土器が、一括出土資料に共伴出土したからと言って、それらと共伴出土した土器陶磁器が属する型式の実年代が直接的に明らかになる訳ではない。記年銘のある木簡や土器が、その年代に存在していた事実と、共伴した土器群の型式が持つ年代（幅）とは別の問題である。型式が持つ実年代の幅のなかに、その記年が含まれるとするには、出土状況の正確な認識に基ずいた多くの論証が必要である。その事が出来たとしても、記年が型式の持つ年代幅のどこに位置しているかについては、推論の域をでることは出来ない。以下では、今回示した型式と期の推定年代について記す。年代観とその推定根拠としている実証的な資料と情況証拠的資料の両者ともにふれる。なお型式と型式の境等と記すが、境は実感的には線という印象ではなく漸進的変化に見える。しかしこの認識を実証的に表現することはまだ難しいので、認識を深めたい。ここでは一般的な線に近い位置づけで使用しておく。

Ⅰ期は、先にも記したが奈良時代後期の平城京跡と長岡京跡から出土する土師器群と共通する様相をもっており、一つの期としてまとめられる。実際にはⅠ期古の土器は平安京跡からは出土していない。Ⅰ期古は、平城宮跡の土器編年では平城宮Ⅳ・Ⅴ期としている土器群が属すると考えている。平城宮土壙SK219[23]は、平城宮Ⅳ期とされているが、この遺構からは天平宝字５・６年（761・762年）の記年木簡が共伴出土している。平城宮Ⅴ期とされている平城宮土壙SK2113[24]からは、土器とともに「左衛士府」銘木簡が出土しており、その関連から同遺構出土土器群は、758年以降の実年代が与えられている。同じ平城宮Ⅴ期とされる井戸SE6166[25]出土土器群には「主馬」銘墨書土器が含まれている。平城宮主馬寮の存続期間は天応元年～延暦３年（781～784年）であり、これらの土器群は平城宮末期に位置する土器群と理解されている。

Ⅰ期中は、長岡京跡出土土器群と平安京最古型式（平安京側Ⅰ期中）の類似度の高さ、及びⅠ期中に属するが中でも新しい様相を多く持つ平安宮左兵衛府SD04[26]から出土する土器群を手掛かりとしている。左兵衛府SD04からも「主馬」銘墨書土器が出土している。平安宮主馬寮の存続期間は、延暦13年～大同３年（794～808年）である。

嵯峨院跡（現大覚寺内及び周辺地域）の発掘調査によって名古曽の滝から大沢の池へ流れる遺水遺構[27]（溝SD43）が検出された。溝SD43下層からは、Ⅰ期新と出来る土師器食器形態が、緑釉

陶器、灰釉陶器（灰釉付須恵器とすべきだが）、須恵器、黒色土器などとともに大量に出土している。また、冷然院跡の北辺で発掘された溝SD01・02[28]、また、昨年の発掘[29]で検出された同溝の西側延長部からは、同様相の土器・陶磁器類が大量に出土している。冷然院跡から出土している資料は、嵯峨院跡SD43下層から出土している土器群とまったく共通する様相を持っており、同じⅠ期新に属すると言える。両者とも型式の要素では、Ⅰ期でも最新相と見ることが出来、Ⅱ期古の要素と重複部分を多く持っている。これら嵯峨院跡SD43から出土した土器、陶磁器群の使用年代は、嵯峨天皇が上皇となってから主に使用し、そこで没した同上皇晩年（承和元年、834年～承和９年、842年＝没）に推定出来る。

これらのことより平安京Ⅰ期古の上限は750年代頃、古と中の境は780年頃、中と新の境は810年頃、新とⅡ期古の境は840年頃と考えている。

Ⅱ期古に属する資料には、平安宮の内裏承明門地鎮遺構[30]、遺構80出土土器がある。この遺構は、文献資料や他の地鎮遺構との関連から承和９年（842年）～元慶８年（884年）の間で行われた地鎮に関連した遺構と考えられる。同じⅡ期古に位置付けている西市跡SX25[31]出土土器群は、承和昌寶（承和２年、835年初鋳）が共伴出土している。

山科区安祥寺下寺跡[32]で発掘された木炭木槨墓からはⅡ期古に属する、いづれもe手法で仕上げられた土師器椀AⅠが５点、杯A（Ⅰ）が２点、ⅢAⅡが２点出土している。他に蟠龍文銅鏡や冨寿神寶（弘仁９年、818年初鋳）などが共伴出土している。土器の型式年代観を手掛かりにして、被葬者の可能性が大きい、安祥寺に関連の深い高位の人物を追求すると、仁明天皇の皇后藤原順子も有力な候補者の一人として挙がる。藤原順子の没年は、貞観13年（871年）である。

Ⅱ期中から新では、年代推定の手掛かりが少ない。北野廃寺関係で元慶８年（884年）の火災に関連するとされる土器群[33]が出土している。これらはⅡ期中に属すると言える資料も多いが、もう少し資料蓄積の後で年代観の妥当性を検討したい。Ⅱ期新に属すると見ている土器群が出土している右京七条一坊の溝SD465からは、延喜通寶（907年初鋳）が出土している。

Ⅲ期古とする右京二条二坊SX1[34]からは、「天暦七」銘（953年）の墨書緑釉陶器に伴い多数の土師器食器形態や須恵器、灰釉陶器などが出土している。この墨書年代は、土器型式の持つ年代の幅のなかでは、新しい方に位置すると考えている。

Ⅲ期中とする平安宮内裏の土壙25[35]からは「應和」銘（應和年間、961～963年）のある白色土器皿と共伴して多数の土師器食器形態、他の土器類等が出土している。右京三条二坊井戸SE4堀形[36]、左京一条三坊の烏丸線立－17の井戸1[37]の両遺構からは、多くの土師器食器形態、他の土器等とともに乾元大寶（天徳２年、958年初鋳）が出土している。

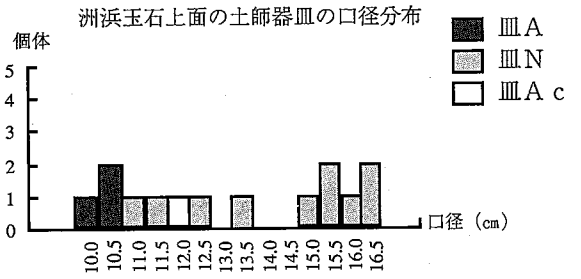
京域出土資料ではないが、奈良の南都薬師寺西僧坊[38]の焼失床面からは、多数の在地産土師器、黒色土器、白色土器他、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器など、火を受けた痕跡のあるものを含む数多くの遺物と伴に、Ⅲ期中に属する平安京近郊産の土師器杯、皿が出土している。これらの資料は、陶磁器類は古い時代のものが比較的多いが、土器類は型式的にもよくまとまった資料である。同坊の焼失を含む薬師寺の焼亡は、天延元年（973年）である。Ⅲ期中の年代は、先述の

應和年間、961～963年からこの天延元年（973年）を含み、前後に若干の幅を持つものと推定出来る。

Ⅱ期からⅢ期の資料では、土器と共伴出土した皇朝十二銭の種類とその初鋳年代を記した。使用期間が長いと推定される銭貨で型式の持つ年代を確定する事は出来ないが、共伴している土器群の埋没年代の上限を知る手がかりにはなる。これらのことを含めて上述の資料などからⅡ期古とⅡ期中の境は870年頃、同中と新の境は900年頃、Ⅱ期とⅢ期の境は930年頃、Ⅲ期古と同中の境は950年代にあるものと推定している。Ⅲ期新の年代を独自で推定し得る資料は今の所出土していない。Ⅲ期中と新の境は、Ⅲ期とⅣ期との境の関連も考えて、980年代にあると推定している。

左京二条二坊、高陽院跡苑池ＳＧ-１Ａ（昭和56年度調査分の最古の池跡[39]）から出土した遺物はⅣ期古に属する。藤原頼通による高陽院創建は治安元年（1021年）であり、同院は、長暦２年（1038年）には焼亡の記事が見られる。しかし、長久３年（1042年）には、競馬などが行われており、再建が成っていたことが文献資料から分かる。苑池SG１は堆積層や埋設土層から４度以上作り変えられた事が判明している。苑池SG-1Aは、池の底面とそれに堆積する最下層土を対象としている。この堆積土層の上には焼土と瓦類を含む埋設土層が堆積している。池SG-1Aは、周辺の発掘調査の成果も踏まえて、創建当初の苑池と理解さてれいる。そこからの出土土器群は、1020年代～1030年代に年代が推定できる。

Ⅳ期中の実年代を推定し得る資料は、京域内では今のところ確認していないが、初見ではⅣ期中かⅣ期新かを判断しかねていた土師器食器形態が、1995年3月の発掘調査[40]で宇治平等院の初期の苑池底の玉石敷上面から一定量出土している。京域内のものと同型式に属するⅢAとⅢ（杯）Nで構成されている。再度実見[41]させていただいた時に得た認識では、ⅢAは少々厚手感を増し、端部のつまみ上げ風に見える断面形態も不明瞭になる印象も出てきている。ⅢNも若干厚手感を増し、口縁端部の小さい端面も１固体中では不明瞭になる部分も出てきている。しかし、法量面では、ⅢAの口径が10.0㎝台～10.5㎝台であり、それ以下の小型のものは見られなかった。ⅢNの法量も最小口径のものが、11㎝台であり11.0㎝以下のものが見られなず、他の大きい口径のものも含めてⅣ期中へ収めて理解出来るものであった（表－７）。Ⅳ期新的様相も出始めているが、Ⅳ期中に属すると見てよいだろう。これら土師器に直接かぶ



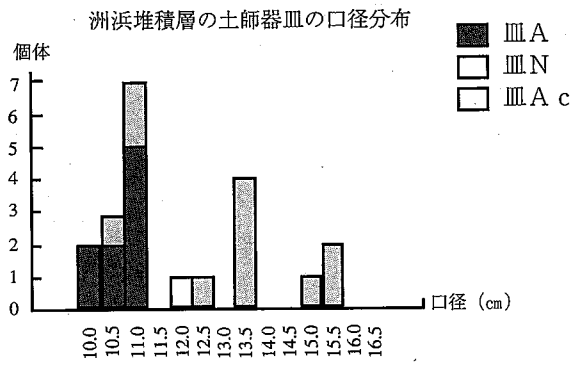


表７

る池内堆積土層から出土している土師器皿類もこれらと同型式に属すると見られるものが主体であるが、若干新しい様相のものも含まれている。苑池底の玉石敷上面から出土した土師器皿の一群は鳳凰堂の落慶供養等に関連した遺物の可能性が指摘されている。平等院の創建年代は永承7年（1052年）であり、阿弥陀堂（鳳凰堂）は翌年の天喜元年（1053年）には完成している。

岡崎の白河街区に在る法勝寺下層遺構[42]からはⅣ期中に属する土師器食器形態（皿A、皿N等）が、まとまって数多く出土している。法勝寺創建は、承暦元年（1077）からであり、下層遺構はそれ以前であることだけは明らかである。

Ⅳ期新に属する土師器皿が、平安宮内裏承明門地鎮遺構[43]、遺構76から少数ではあるが出土している。遺構76は、延久3年（1071）に行われた天台密教の安鎮法にもとずく南方鎮所跡と見られている。鳥羽離宮跡の北殿地業内[44]から出土した土師器皿類は、皿Nが口縁端部の立ち上がったⅤ期古的様相を持つ個体を含んでいるが、Ⅳ期新の範疇で理解できる若干外反した口縁部の皿Nが主体を成していると見える。形態、法量等の要素では、Ⅳ期新の最新相とも言えるものである。鳥羽離宮の造営は、応徳3年（1086年）に南殿から始まり、北殿は応徳4年（1087年）から造営が行われている。

これらの事からⅢ期とⅣ期の境は1010年頃、Ⅳ期古と中の境は1030年代、Ⅳ期中と新の境は1060年代の内にあると考えている。Ⅳ期新からⅤ期古との境は、1080年代の内と推定できる。

Ⅴ期古では、すでによく知られた資料であるが、左京四条一坊の井戸SE8内[45]の堆積土下層から出土した土師器食器形態には、この型式に属する土師器皿類が数多く含まれている。「寛治五年」銘（1091年）の墨書を持つ須恵器鉢が共伴出土しており、Ⅴ期古の年代を考える資料の一つとなっている。彫形から出土している土師器皿は、Ⅳ期新の型式的特徴を持っている。

岡崎の白河街区の六勝寺跡から出土する資料の内で、各寺の創建期に関連すると見られるものは、Ⅳ期新からⅤ期古に属する資料が多い。六勝寺跡B区SX105[46]出土と報告されている土師器皿、他の遺物は、尊勝寺の九体阿弥陀堂と推定されている建物基壇中から出土している。Ⅴ期古より古い様相を示す固体を含むが、新しい様相を持つ土師器皿類は、Ⅴ期古の様相を持っている。尊勝寺は、六勝寺の内、第二番目に堀川天皇の御願により康和4年（1102年）に造立供養された寺院である。阿弥陀堂は、長治2年（1107年）には落成している。

Ⅴ期中からⅥ期古にかけては、各型式ともに独自で年代を推定出来る資料がまだ少ない。京都府が発掘調査した内膳町遺跡の井戸SE176下層[47]からは、Ⅴ期中に属すると見ている土師器皿類、他に数多くの土器が出土している。他にも同じ型式に属すると出来る資料も多い。これらの資料は、火災に遭った土器群と、洪水層と見られる土層との関連から、当該地の南にあった土御門内裏の康治2年（1143年）の内裏浸水「台記」、大治5年（1130年）及び久安4年（1148年）の焼亡「百錬抄」の記事と、関連づけて理解することが出来れば、遺構の下限年代を概ね押さえることが出来ると報告には記されている。火災や洪水を実際の遺構や土層と結びつけて理解することは、非常に難しく結論を出せない例が多い。井戸SE176出土資料が、これらの文献資料と関連するものかは判断できないが、前後の年代推定可能な資料とその間の型式数等を含めて考えると、

Ⅴ期中の推定しうる年代観と文献が示している年代とには、大きな齟齬はない。

岩手県の柳ノ御所跡を始めとする諸遺構[48]からは、平安京の土師器食器形態から直接的影響を受けて同地で生産された見られる、てずくねの土師器皿類が大量に出土している。それらの土師器皿類の型式特徴からみて、それらで古い段階とみられるものは、平安京跡のⅤ期中に通じる要素を持つと見ている。これら平泉から出土する資料は、平泉と平安京の関連性を考える上で重要な資料であるだけでなく、相互の土器型式の年代を考える上でも非常に興味深い資料である。

Ⅵ期中に属する資料では、型式の年代推定が可能なものが二例ある。鳥羽離宮跡135次調査[49]で検出された溝SD１下層からは、「建仁三年」（1203年）銘のある木簡と共伴出土した土器群がある。土師器食器形態は、Ⅵ期中の様相を示しており、他に瓦器椀が多数出土している。瓦器椀の１型式がもつ個体の変異幅を知る上でも良好な資料であろう。

京域内の左京三条二坊、高陽院跡苑池ＳＧ１－Ｄ[50]出土とされる土師器皿類は、層位的には苑池が廃絶後に埋め戻された埋土上面で検出された、土器溜めから出土したものである。高陽院は、承応３年（1223年）に放火により焼亡して以後再建されていない。

これらよりⅥ期中の標準的な型式群の推定年代は、1210年から1220年代を中心に前後の合わせて２～30年の幅で考えられる。この関係からⅤ期とⅥ期の境は、1170年代から1180年頃の内に推定している。また、Ⅵ期とⅦ期の境に関しては、1260年代から1270年頃に位置すると考えている。

Ⅶ期以降からⅨ期までは、現状では型式の実年代推定が可能な資料は、今のところ、京域内出土資料では有力なものがない。関係する事象まで枠を広げれば、状況証拠は少なくないが、今回はここではふれない。実年代に関しては、Ⅶ期とⅧ期の境を1360年頃、Ⅷ期とⅨ期の境を1440年頃と、現段階では考えており、期内の各型式は、等分に近い時間幅を持つものと見ている。

Ⅹ期では、実年代の推定が可能な資料が幾つかある。有力な資料は、山科寺内町遺跡の石室内[51]から一括出土した土師器皿類と、本圀寺堀跡内上層から出土した大量の土師器皿類である。両資料は、法華宗と一向宗の宗派闘争とも関連していると見られる興味あるものである。山科寺内町跡石室出土資料は、天文元年（1532年）に、法華宗徒や細川晴元、六角定頼らによった攻撃[52]の際に、焼亡し陥落した山科本願寺と寺内町と伴に放棄された、寺内町に関係した食器形態と見ている。天文５年（1536年）に比叡山延暦寺のいわゆる山門勢力が中心となって、六角義賢や蒲生定秀らが連合して、洛内の法華本山や法華宗徒を攻撃している。法華宗本山の中心勢力であった本圀寺も焼亡、陥落し、以後10年間ほどは再興が出来なかった。本圀寺跡の濠上層から出土している大量の土師器皿は、天文５年に焼亡し放棄された後に、瓦礫や焼土と伴に整理され濠に埋め込まれた同寺関係品と理解されている。濠上層は、焼土などよりも土師器皿類の方が多い部分があり、出土している土師器皿類はコンテナ数百箱に達している。共伴出土している他の土器、陶磁器も各種あるが、圧倒的に土師器皿類が多い。これらの土師器皿類は、大量ではあるが、型式的にもよくまとまっており、攻撃直前まで同寺関係で使用あるいは、使用のために蓄積されていた食器類であると見てよいであろう。

両資料の推定実年代の差は、長く見ても数年である。ただ両資料ともにまだ充分な報告がなさ

れていないもので、全体の把握が難しく、実見できた範囲内の認識であるが、本圀寺跡濠上層出土資料と下層（２段になった下の濠の底部近くの堆積層）からの出土資料では若干ではあるが、型式変化が認められる。山科寺内町跡の石室出土遺物は、あえていえば、下層側により類似度が高い。この点については、以前烏丸線の調査年報に記したことがあるので、ここでは結論だけとしておく。山科寺内町の石室から出土した土師器Ⅲ類は、現在の認識からするとＸ期古に属し、その中では最も新しい様相を持つものと理解している。数年間に進んだ型式変化によって本圀寺跡濠上層から出土するＸ期中の土師器Ⅲ類の姿となったと理解している。Ｘ期古とＸ期中の境は、1530年代のこの数年間の内から少し古い方に幅を持つ時間帯にあると見ておく。

なお、この前後の時代だけを他よりも細分する形で、鋤柄俊夫が京都の都市遺跡から出土する土師器食器形態の編年図を「平安京出土土器の研究[53]」に掲載している。この項の主旨とは異なるが問題を感じる事と、本論全体の主題とは大いに関係する問題であるのでここで記しておく。

鋤柄は、編年図においては、個々の遺構から出土している個別的な土器型式の組列を設定する方法で提示している。この編年図の下敷となっているのは氏が不明瞭に記しているように、烏丸線の調査年報Ⅲに私達が提示した烏丸線内遺跡出土土器編年試案である。私も個別の型式群の組列は、現在でもこの順位で良いと考えている。しかし、氏の再利用提示に関しては、問題を感じている。利用が悪いというレベルの問題ではない。組列としての順位は良いとしても、個々の資料が、型式の要素では率は違っていても、重複するものを持ちながら組列を形成している点が、検討されているようには見られない事に問題を感じている。

私達がＸ期としている分と関連する部分で指摘しておく。烏丸線No.80土壙55、同P.G区4WⅢ土壙２、同No.31土壙７の３資料が前後３段階に区分しては並べられない。結論的にはP.G区4WⅢ土壙２は、No.80土壙55とNo.31土壙7の両者に重複する型式要素を多く持っているということである。このように記すと、P.G区4WⅢ土壙２は２つの型式が混在していると受け取る人も出るだろうが、そのような問題ではない。それぞれが型式的なまとまりを持ってはいるが、そのような共通性をもつ存在であるという事である。この３資料に関しては、２型式の設定は可能であろうが３型式に区分することは不可能だろう。烏丸線年報Ⅲのなかで、本圀寺４トレ濠下層出土資料と烏丸線P・G区4WⅢ土壙2が近似していると記した。確かに類似度の高い、近い時間位置を持つ資料であるという認識は今も変わらないし、同様にこの３資料が近似した様相を持つ資料であるという認識も変化していない。同じくここでＸ期新としている烏丸線No.52濠２と同No.46濠１出土資料も、層位的には前後関係が明確な資料であるが、型式的にはよく類似した資料であるが、型式組列として前後するものとして設定することは出来ない。以下では氏が、同論文のなかでこの問題を考えるよい素材を提示してくれているのでそれを取り上げる。

山科寺内町遺跡石室出土土師器のいわゆるタイプ分類の図である。氏は、同石室出土土師器Ⅲ類には６種類のタイプ（型式）があるとしてa～fの名称を与えて分類結果を示している。型式分類によれば、法量による区分も必要である等の問題は置いておくが、提示されているうちのa～cの３型式について記す。１型式と出来る個体群を観察していると、この３型式程度に一見区分可

能なように見える個体が常に並存していることが分かる。山科寺内町遺跡石室出土資料においてもaとbの中間、bとcの中間あるいはcとaの中間に見える資料が確実に存在している。また、断面であれば、aとb、bとcが同一の個体中に見いだせる例は、京域内の他の土器群では一般的と見て良い状況である。この事がどのようなことを示しているかといえば、１型式と認識せざるを得ない個体群の個体変異の分布が、法量では少し大きいものから少し小さいものまでが、多数しめる標準偏差内に位置するものを中心にして、連続して幅を持って存在しているということである。形態では、少し古い様相を持つものから、中心的様相を持つものを中心に、少し新しく見えるものまでが１型式を形成しているということである。１型式と認識できる個体群は、各型式要素で、グラフ的には正規分布と評価出来る分布状況を持つ資料が多いとう事である。本質的には、京域出土資料に限った問題ではないが、京域出土資料では、同一型式とできる資料でも、個体数が多くなれば差異の幅も大きく見える。少数の個体だけに注目すれば、比較的容易に型式区分的結果を作り出すことが出来る。もちろん京域出土資料では、遺跡が重複しているので古い型式からの混入品は、どの資料でも必ず認められるが、個体を丁寧に見れば、主体を成す型式との区分はそれほど難しいことではない。

１型式が多数の個体群により形成されているものであるという認識を出発点とし、各型式要素に幅があり、100％重なる資料が存在しない実体からすれば、幅を比較することによって、類似度と各要素の変化の方向を認識できるものと考えている。先の３つの烏丸線関係の資料も、順番は並べ得るが、実際の時間位置は極めて近い存在と見ており、各種の型式要素の重複度は先に記したような関係で高いものと理解している。烏丸線No.52濠２、同No.46濠１の出土資料については、本項の主題へ戻し、後に続けて記す。

Ｘ期新は、旧二条城跡の濠出土資料[54]が型式の持つ実年代を考える手掛かりとなる。旧二条城跡の烏丸線No.52濠２、同No.46濠１出土資料は、両者ともに土師器食器形態を主体とする。烏丸線No.52濠２とした資料は、旧二条城築造時の石垣と、改築されて新しく積まれた石垣との間に堆積する土層から出土したものであり、同城存続期間中に廃棄年代が限定できる。烏丸線No.46トレンチは、No.52トレンチと重なる同一地点での調査地であり、変則的だがNo.52トレンチとは上下に重なる関係となる。No.46濠１は、No.52濠２を改築した後の濠ということであり、堆積層は直接重なり合う関係である。No.46濠１としている出土遺物も、旧二条城が機能し、濠が開口していた時期に廃棄され濠へ投棄されたものと理解してよい資料である。両資料は、型式的には類似度が高く、個体レベルでは区分が不可能なものが多数を占めており、同一型式と認識せざるを得ないものである。逆に一型式と認識できるものの時間幅を考える上での好資料の一つではある。

旧二条城は、永禄12年（1569年）に織田信長が第15代室町幕府将軍である足利義昭のために急造（実際には旧来の濠等はそのまま利用して石仏等まで石材として石垣を積むようなことをしている）したとされる[55]。天正10年（1582年）の本能寺の変の段階では存続していたようだが、以後は明らかでない。しかし、遅くとも天正末期（1590年前後）頃、豊臣秀吉が京都の都市改造を本格的に行った時期には、完全に破却埋設されて歴史からその姿を消したと理解される。

これらのことから、Ⅸ期とⅩ期の境は1500年代の最初の頃、Ⅹ期古と同中の境は1530年頃、Ⅹ期中と同新の境は1550年代に、Ⅹ期新の下限は1580年代の内にあるものと考えている。

Ⅺ期以降は、現状では実年代を知ることが出来る資料は少ない。しかし、単に努力が足りないだけというのが実状と言える。江戸時代以降では出土資料の他の歴史的資料からも、土師器食器形態の年代推定が出来るようになる。たとえば、尾形乾山は、当時木野で生産されていたとみられる土師器皿に、絵付けをして２次焼成し、自分の作品としている[56]。それらの作品の一部は、現代にも伝世しているが、美術館のガラス越しにそれらを見ていても、底部内面の凹状圏線が、ヘラ等の工具の先で強く明確に付けられたものである程度の事は看取出来る。このような事や他の形態などを見ると乾山が利用した土師器皿はⅫ期に属する土師器皿とみて良いと考えている。ただ、Ⅻ期のどの型式に属するのかは、実測作業等が行えないので確定は出来ない。

また、難波洋三氏が、岩倉木野の椹木家から譲り受けられた土師器皿類[57]の中には、その制作年代が幕末の安政年間（1854～1860年）と、明らかなものが含まれている。この他に、同型式のもので、椹木家当主の丸太夫印のある土師器皿も数多く含まれている。印のないものも、古い型式に属する可能性がある少数のものを除くと、ほぼ同型式と出来るものが主体を成している。この型式の持つ実年代は幕末から明治初頭頃（1850年～1860年代）を中心とする年代と見ることが出来るだろう。これらは今回図示出来ないが、何度か実見させていただいた結果では、Ⅻ期とみている一群よりは確実に型式変化を遂げている事が分かる。今回図示した資料では、ⅩⅣ期としている資料に近似した様相を持つと言えるが、一型式程度の差異はあるだろう。

このような例以外でも、編年研究が進んでいる肥前の陶磁器類など共伴出土する他の遺物からも、型式の年代推定は可能となって来ている。しかし、この方法だけでは、それらの編年を検証することも不可能となるので、独自の年代観を確立して以後に、本格的にクロスチェックしてゆきたいと考えている。いろいろの方法によっているが、見通し的認識も含めてⅪ期からⅩⅣ期の年代観を記しておく。

Ⅹ期とⅪ期の境は、1580年代の内に、Ⅺ期とⅫ期の境は1660年頃、Ⅻ期とⅫ期の境は1740年代、ⅩⅢ期とⅩⅣ期の境は1820年頃と想定しておく。

平安時代から明治時代に渡る土師器食器形態の型式と期の年代観を記したが、これらを一方で基本的にささえているのは、型式や期の絶対的前後関係を規定する、遺物が出土する層位と遺構の切り合い関係であろう。今回この点については、多くを記さなかったが、左京域を中心に京域内の発掘調査資料では、今回提示した型式と期の順位が矛盾する例は今のところ確認できない。今回使用している資料の中にも、直接の前後関係を持つ資料が含まれているが、これらの問題に関しては別稿で扱っていきたいと考えている。

９．まとめにかえて

本稿においては、京域及びその近郊遺跡から平安時代以降の各時代を通じて数多く出土する、土師器食器形態の様相とその変遷の全体像及び標準型式群や期の年代観等については、ほぼ示す

ことが出来たものと考えている。XII期以降に関しては標準型式群を全て図示出来なかったが、これは京域での出土状況の変化が影響していることと、出土資料が蓄積されているにもかかわらず整理と資料化及び資料公開が遅れていることに原因があると言える。今後整理と資料化及び公表を進めて行きたい。本稿では、考察の項をもうけなかったが、これらを材料にして考えを進めることは比較的容易な事であるが、歴史的評価を下すにはさらに資料の蓄積が必要であると考えている。以下では、今後の課題を記すことでまとめにかえておきたい。

平安時代のⅠ期から明治時代にかかるXIV期に渡る土師器食器形態の変遷の全体像を見ると、型式の総数は41標準型式群である。1型式群の年代幅は、平均で20数年と言うことになる。この年代幅は、一世代が社会で主体を成し活動している幅にほぼ対応している。またそれらの型式群が共通する様相を持ち期としてまとめた単位及び期が共通項をもってまとまる単位は、長い歴史の中で一時代を形成する前期、中期、後期等と評価される、より大きな基礎的単位に通じている可能性が大きい。これらに関しては様式認識の問題であり、土師器食器形態以外の土器陶磁器を含めて理解しなければならない問題である。

遺物の変化には、考古学等で画期と評価する、政治、文化等社会の側に原因が求められる変化は確かに認められる。しかし、京域および近郊遺跡から出土する土師器食器形態を観察している限りでは、画期と評価出来る変化以外に、生産者側に内在した変化の要因が、各世代を通じてあるものと理解できる。口縁部形態の継続的変化や法量の継続的縮小などもその例である。これまでの考古学では、退化という抽象的な概念によって一括されてきた変化と見ることが出来る。歴史を理解する鍵はたしかに画期にもあるが、このような基調をなす連続的変化が示す歴史にも注目する必要があると考えている。退化現象とも見える変化が示す歴史の方が、時代幅ははるかに大きい。これは土師器食器形態に限ったことではないが、この問題に対する理解の深化は、今後の課題としておきたい。

平安京跡から出土する土師器食器形態の系譜は、遡れば、長岡京、平城京、藤原京、飛鳥地域の諸遺跡へとつながっていく。この点については、今回あまりふれる事が出来なかったが、土師器食器形態を通じて等価に見ることが出来る歴史は、少なくとも７世紀代にまでは連続していると考えている。７世紀から総合的にとらえなおしていく必要があるだろう。平安京のⅠ期は、せめて都城のⅢ期と位置付け直すべきであると考えているが、この問題も今後他の都城跡をフィールドとしている研究者と共同で検討してゆきたいと考えている。

これらの土師器食器形態と各時代のにおいて共伴出土する他の土器、陶磁器については、今回ほとんどふれることが出来なかった。他の土器、陶磁器の様相変化は、土師器食器形態の変化と連動している面と、微妙にずれていると見られる両面を持っている。期としている単位あるいは期の２～３程度の集合単位を各時代に様式と評価できるのかという問題も他の土器、陶磁器の様相変化を把握してゆくなかで結論を出してゆきたい。

土師器食器形態に限っても、製作技術の問題や主体を成すものの生産体制や生産地の移動及び供給、流通体制等の重要な問題に関してもあまり記すことが出来なかった。別稿としておきたい。

土器、陶磁器類を対象として考えても、今後の課題は数多くあり、それぞれが質量の大きい問題ばかりである。しかし、土器、陶磁器を整理し、研究するもう一つの目的は、遺跡の理解を進めるということにある。型式編年の確立もその基礎作業の１つであると考えている。今後も弛まず努力を重ねてゆきたいと思う。

本稿をまとめるにあたっては、共同研究者である平尾政幸、原山充志を始めとして、研究所の多くの同僚達の協力があった。整理作業や基礎資料作りを日常的に助けてくれた神吉秀典、大黒ちずる、両氏には大変なお世話になった。巽淳一郎、玉田芳英、吉川義彦、三好美穂、尾野善裕、木村泰彦、畑中英二、佐藤隆、秋山浩三、岩崎誠、國下多美樹、森内秀造氏らをはじめ、古代の土器研究会のメンバーからは多くの助言や意見を聞かせていただき、認識を深める機会を数多くいただいた。また、京都市埋蔵文化財センター、京都府埋蔵文化財調査研究センター、奈良国立文化財研究所、奈良市埋蔵文化財センター、向日市埋蔵文化財センター、長岡京市埋蔵文化財センター、大山崎町教育委員会、宇治市教育委員会、京都大学構内埋蔵文化財調査研究センター、古代学協会、京都文化博物館、京都国立博物館、高槻市埋蔵文化財センター、平泉町教育委員会、岩手県埋蔵文化財センターなど各地の発掘調査研究機関や、ここでは各個人名はお許し願うが、それらの機関の多くの調査員や技師及び関係者の方々には遺物の実見等について、御便宜をおはかりいただいた。これらの多くの人々と研究者達、諸機関とその関係者の方々には心より感謝しています。

註

（1）「平安京提要」にその成果の一部を分担執筆している。提要の主題は平安京であり、平安時代から鎌倉時代前半代（Ⅰ期～Ⅵ期）を対象として、土器、陶磁器の様相を記している。また、京域から出土する土器、陶磁器の研究史については、そこで概述しているのでここでは記さない。1994、『平安京提要』角川書店、第４部第二章土器・陶磁器の様相、１平安京の土器・陶磁器の概要　小森俊寛　２土師器・黒色土器・瓦器　小森俊寛　３須恵器　上村憲章　４緑釉陶器・灰釉陶器・白色土器　平尾政幸

平安京右京跡から出土した土器・陶磁器については、平安京Ⅰ～Ⅲ期を中心に平尾政幸が報告書にまとめて記している。1990、『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、（財）京都市埋蔵文化財研究所、平尾政幸他

小森が、平安時代から江戸時代前期の土師器他の共伴遺物を含めて京域出土資料を呈示している。1990、『消費地の様相〈平安京〉』奈良国立文化財研究所文化財センター、中世窯業調査過程講義資料、小森俊寛

（2）1981、京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ－白河北殿北辺の調査－　京都大学埋蔵文化財研究センター第３章遺物、宇野隆夫・泉拓良・五十川伸矢

（3）『平安京提要』で平尾政幸が白色土器について記している。註１参照。

（4）1976、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊、奈良国立文化財研究所

1982、『平城宮発掘調査報告XI』奈良国立文化財研究所30周年記念学報（学報第40冊）、奈良国立文化財研究所

（5）1983、『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集、同朋舎、「食器における共用器・銘々器・属人器」、佐原真

（6）『山城幡枝の土器』（『考古学雑誌』第二一巻第三号　昭和六年）

（7）掲載した資料（表－1、2）は、烏丸線内遺跡の2つの調査地のものである。年報では定量的データーを掲載出来なかったのでここでその一部を呈示しておく。1982、『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ』1977～1981年度、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、小森俊寛・原山充志・永田信一・大矢義明他

（8）1975、『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』平安京調査会、吉川義彦他、1990、『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊、平尾政幸他
これら二つの報告書以外にも、定量データーの報告例は近年増加している。

（9）1959、『図解考古学事典』小林行雄編、創元社

（10）1938、『弥生式土器集成図録』正編解説、東京考古学会報第一冊、編集小林行雄、発行坪井良平　小林の遺物の研究方法と直結する用語であり、これ以外の著述も多い。

（11）1992、『考古学史研究』第1号、京都木曜クラブ、「形式から形態へ」網伸也

（12）1985、『岩波講座　日本の考古学』－研究の方法「型式論」横山浩一

（13）（10）に同じ

（14）1965、『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所学報第17冊、奈良国立文化財研究所

（15）『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館、「食器計量の意義と方法」宇野隆夫

（16）平成2（1990）年に京都国立博物館職員の難波洋三氏が、洛北の木野村の旧家（椹木家）の倉に残された幕末～明治時代初めの土師器皿などの遺物と土師器の生産と流通に関連する文献資料を譲り受けられた。これらの土師器皿について難波洋三氏の後好意により、実見し、計測することが出来た。

（17）1989、『国史大系、延喜式』普及版、吉川弘文館

（18）1995、『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』「南都における平安時代前半期の土器様相」、三好美穂、奈良市教育委員会

（19）1993、『古代の土器2　都城の土器集成Ⅱ』、古代の土器研究会

（20）（19）に同じ

（21）1994、『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』、古代の土器研究会

（22）1992、『中世土器研究序論』橋本久和、真陽社

（23）1962、『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所10周年記念学報（学報第17冊）、奈良国立文化財研究所

（24）1976、『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊、奈良国立文化財研究所

（25）『平城宮発掘調査報告XII』奈良国立文化財研究所学報第42冊、奈良国立文化財研究所

（26）1978、『平安京跡発掘調査概報　京都市埋蔵文化財研究所概報集　1978-Ⅱ』平尾政幸他　（財）京都市埋蔵文化財研究所

（27）1992、『古代の土器1　都城の土器集成Ⅰ』、古代の土器研究会

（28）1984、『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和57年度』「左京二条二坊（2）」上村和直・吉崎伸、（財）京

都市埋蔵文化財研究所

(29) 1995、未報告。平安京左京二条二坊冷然院跡。関西文化財調査会（代表吉川義彦）が1995年度に発掘調査を実施している。吉川氏の御厚意により実見させていただいた。

(30) 1986、『平安京跡発掘調査概報　昭和60年度』「Ⅳ平安宮内裏」梅川光隆、（財）京都市埋蔵文化財研究所

(31) 1992、『古代の土器１　都城の土器集成Ⅰ』、古代の土器研究会

(32) 1996、『京都市埋蔵文化財調査概要　平成5年度』「30安祥寺下寺跡1」高正龍・平方幸雄、（財）京都市埋蔵文化財研究所

(33) 1983、『北野廃寺発掘調査報告　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第7冊』堀内明博、（財）京都市埋蔵文化財研究所

(34) 1982、『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』「右京二条二坊（２）」辻裕司、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(35) 1988、『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』「Ⅳ平安宮内裏（１）」丸川義広・鈴木久男、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(36) 1982、『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』「8平安京右京二条三坊」平尾政幸、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(37) 1981、『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』1976年度、京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、永田信一・小森俊寛・原山充志他

(38) 1987、『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第45冊、奈良国立文化財研究所

(39) 1982、『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』「2平安京左京二条二坊（２）高陽院」平尾政幸、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(40・41) 宇治市平等院の発掘調査は平成２年度（1990）以来継続的に宇治市教育委員会が実施している。昨年度（1995年度）の調査によって、Ⅳ期に属する土師器皿が比較的まとまって出土した。これらの資料についてはまだ未報告ではあるが、宇治市教育委員会と同主事杉本宏氏の御厚意により実見させていただいた。なお、記した資料とほぼ並行するとみられる資料が平等院多宝塔推定地の調査概報で報告されている。1995、『平等院境内多宝塔推定地第２次発掘調査概報』宇治市教育委員会。この資料もⅣ期中新相とみているがⅣ期新との関連をさらに検討する必要がある。

(42) 1987、『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』辻裕司他、京都市文化観光局・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(43) (30) に同じ

(44) 1983、『平安京跡発掘調査概報　昭和58年度』「鳥羽離宮跡95次調査」吉崎伸・鈴木久男、（財）京都市埋蔵文化財研究所

(45) 1975、『平安京跡発掘調査報告－左京四条一坊－』吉川義彦他、平安京調査会

(46) 1981、『六勝寺跡発掘調査概報　昭和55年度』「１六勝寺跡A・B調査区」上村和直、京都市埋蔵文化財センター・（財）京都市埋蔵文化財研究所

(47) 1980、『京都府埋蔵文化財発掘調査概報1980-3』「平安京左京（内膳町）昭和54年度発掘調査概要」平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他、京都府教育委員会

(48) 1994、『柳之御所跡発掘調査報告』平泉町教育委員会・建設省岩手工事事務所　1992、『紀 要ャ』「柳之

御所におけるかわらけ存続の意味」松本建速、（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

(49) 1994、『京都市埋蔵文化財調査概要　平成元年度』「Ⅳ鳥羽離宮跡135-2次調査」磯部勝・山本雅和・鈴木久男、（財）京都市埋蔵文化財研究所

(50) (30) に同じ

(51) 1985、『国立歴史民俗博物館研究報告第８集』「山科寺内町の遺跡調査とその復元」岡田保良・浜崎一志

(52) 1968、『京都の歴史３　近世の胎動』Ⅴ乱後の復興と町衆、2法華一揆と「町組」藤井学、京都市・学芸書林

(53) 1994、『平安京出土土器の研究　古代学研究所研究報告第４輯平成６年』「第２章平安京出土土器の諸問題」鍬柄俊夫、（財）古代学協会

(54) (37) に同じ

(55) 1979、『京都の歴史４　桃山の開花』林屋辰三郎他、京都市・学芸書林

(56)『日本陶磁大系　第24巻乾山』満岡忠成、平凡社など

(57) (16) 参照

土器出典リスト1

図-2　Ⅰ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SK2113	95	平城宮	58
2	SK2113	104	平城宮	58
3	SK219	230	平城宮	57
4	SK219	227	平城宮	57
5	SK2113	78	平城宮	58
6	SK219	203	平城宮	57
7	SE200	51	平城京	59
8	SK219	218	平城宮	57
9	SK219	224	平城宮	57
10	SK2113	100	平城宮	58
11	SX4・9	22	内裏外郭	15
12	SX4・9	28	内裏外郭	15
13	SX4・9	33	内裏外郭	15
14	SD04	60	左兵衛府	13
15	SX4・9	54	内裏外郭	15
16	SX4・9	48	内裏外郭	15
17	SX4・9	50	内裏外郭	15
18	SD04	55	左兵衛府	13
19	SX4・9	37	内裏外郭	15
20	SD19	24	右京三条三坊五町	32
21	SD19	29	右京三条三坊五町	32
22	SD19	34	右京三条三坊五町	32
23	SD19	44	右京三条三坊五町	32
24	SK201	20	中務省	15
25	SK201	25	中務省	15
26	SD19	10	右京三条三坊五町	32
27	SD19	14	右京三条三坊五町	32
28	SK201	26	中務省	15

図-3　Ⅱ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SE64	105	左京七条二坊一町	6
2	SE64	102	左京七条二坊一町	6
3	SX25	13	西市	39
4	地鎮遺構80	25	内裏承明門	16
5	SE64	108	左京七条二坊一町	6
6	溝1	40	烏丸線No.60	2
7	井戸231	100	左獄	49
8	溝1	43	烏丸線No.60	2
9	SX25	2	西市	39
10	SX25	6	西市	39
11	SX07	16	右京三条三坊三町	32
12	SX03	57	一乗寺向畑町	28
13	SX03	59	一乗寺向畑町	28
14	SX03	60	一乗寺向畑町	28
15	SX07	33	右京三条三坊三町	32
16	SK15	90	北野廃寺	26
17	SX07	6	右京三条三坊三町	32
18	SX03	51	一乗寺向畑町	28
19	SX07	11	右京三条三坊三町	32
20	SX03	50	一乗寺向畑町	28
21	SX03	54	一乗寺向畑町	28
22	SE03B	85	西市	39
23	SD01	41	左兵衛府	13,39
24	SD01	6	左兵衛府	13,39
25	SD01	7	左兵衛府	13,39
26	SD01	52	左兵衛府	13,39
27	SD01	51	左兵衛府	13,39
28	SX25	29	右京二条二坊十五町	17,39
29	SX25	56	右京二条二坊十五町	17,39
30	SD01	55	左兵衛府	13,39
31	SD01	11	左兵衛府	13,39
32	SK01・07	4	内裏	24
33	SK01・07	23	内裏	24
34	SD01	35	左兵衛府	13,39
35	SD01	37	左兵衛府	13,39
36	SD01	49	左兵衛府	13,39
37	SD01	56	左兵衛府	13,39
38	SD01	53	左兵衛府	13,39

図-4　Ⅲ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SD13・14・23	97	右京二条三坊十五町	17
2	SX1	11	右京二条二坊三町	14
3	SD13・14・23	63	右京二条三坊十五町	17
4	SX1	14	右京二条二坊三町	14
5	SD13・14・23	103	右京二条三坊十五町	17
6	SX1	15	右京二条二坊三町	14
7	SD13・14・23	104	右京二条三坊十五町	17
8	SD13・14・23	61	右京二条三坊十五町	17
9	SD13・14・23	98	右京二条三坊十五町	17
10	SD13・14・23	99	右京二条三坊十五町	17
11	SD13・14・23	101	右京二条三坊十五町	17
12	SD13・14・23	52	右京二条三坊十五町	17
13	SX1	12	右京二条二坊三町	14
14	SX1	4	右京二条二坊三町	14
15	SX1	5	右京二条二坊三町	14
16	SX1	7	右京二条二坊三町	14
17	SD13・14・23	95	右京二条三坊十五町	17
18	SD13・14・23	58	右京二条三坊十五町	17
19	SD13・14・23	60	右京二条三坊十五町	17
20	SD13・14・23	59	右京二条三坊十五町	17
21	SK25	6	内裏	18
22	SK25	8	内裏	18
23	SE1	11	右京二条二坊三町	14
24	井戸1	13	烏丸線立17	2
25	井戸1	14	烏丸線立17	2
26	SK25	19	内裏	18
27	SE1	9	右京二条二坊三町	14
28	SE1	7	右京二条二坊三町	14
29	SE1	8	右京二条二坊三町	14
30	井戸1	9	烏丸線立17	2
31	井戸1	10	烏丸線立17	2
32	SK25	11	内裏	18
33	SE1	2	右京二条二坊三町	14
34	SE1	5	右京二条二坊三町	14
35	SE1	6	右京二条二坊三町	14
36	SE1	1	右京二条二坊三町	14
37	井戸1	4	烏丸線立17	2
38	SK18	55	左京内膳町	47
39	SK18	57	左京内膳町	47
40	SK18	56	左京内膳町	47
41	SE21	4	左京四条三坊五町	5
42	SE21	5	左京四条三坊五町	5
43	SE21	6	左京四条三坊五町	5
44	SE21	7	左京四条三坊五町	5
45	SK18	54	左京内膳町	47
46	SK18	50	左京内膳町	47
47	SK18	53	左京内膳町	47
48	SK18	51	左京内膳町	47
49	SE21	2	左京四条三坊五町	5
50	SE21	1	左京四条三坊五町	5
51	SK18	58	左京内膳町	47
52	土壙6	4	烏丸線No.23	1
53	SE21	13	左京四条三坊五町	5
54	SK18	61	左京内膳町	47
55	SK18	60	左京内膳町	47
56	SE21	8	左京四条三坊五町	5
57	SE21	9	左京四条三坊五町	5
58	SE21	10	左京四条三坊五町	5
59	SK18	62	左京内膳町	47
60	土壙6	8	烏丸線No.23	1

図-5　Ⅳ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SG1-A	8	高陽院	13,40
2	SE273中層	5	左京二条三坊九町	40,46
3	SG1-A	21	高陽院	13,40
4	SE273中層	3	左京二条三坊九町	40,46
5	SG1-A	4	高陽院	13,40
6	SG1-A	2	高陽院	13,40
7	SE273中層	6	左京二条三坊九町	40,46
8	SG1-A	11	高陽院	13,40
9	SG1-A	43	高陽院	13,40

土器出典リスト２

10	土壙30	15	左京四条三坊九町	10,40
11	SG1-A	19	高陽院	13,40
12	SG1-A	9	高陽院	13,40
13	SG1-A	29	高陽院	13,40
14	SG1-A	31	高陽院	13,40
15	SG1-A	32	高陽院	13,40
16	SG1-A	14	高陽院	13,40
17	SG1-A	42	高陽院	13,40
18	SG1-A	15	高陽院	13,40
19	SG1-A	4	高陽院	13,40
20	SG1-A	16	高陽院	13,40
21	SG1-A	17	高陽院	13,40
22	SG1-A	18	高陽院	13,40
23	土壙45	35	烏丸線No.42	2
24	土壙11	29	烏丸線立14	1
25	井戸7	31	烏丸線No.67	3
26	SD41A	105	左京内膳町	47
27	法勝下層寺	1	法勝寺下層遺跡	27
28	法勝下層寺	4	法勝寺下層遺跡	27
29	SD41A	100	左京内膳町	47
30	土壙45	44	烏丸線No.42	2
31	法勝寺下層	34	法勝寺下層遺跡	27
32	法勝寺下層	36	法勝寺下層遺跡	27
33	土壙11	27	烏丸線No.23	1
34	法勝寺下層	18	法勝寺下層遺跡	27
35	土壙11	38	烏丸線立14	1
36	法勝寺下層	23	法勝寺下層遺跡	27
37	法勝寺下層	2	法勝寺下層遺跡	27
38	土壙11	39	烏丸線立14	1
39	法勝寺下層	27	法勝寺下層遺跡	27
40	法勝寺下層	30	法勝寺下層遺跡	27
41	法勝寺下層	32	法勝寺下層遺跡	27
42	土壙11	41	烏丸線立14	1
43	法勝寺下層	35	法勝寺下層遺跡	27
44	土壙45	48	烏丸線No.42	2
45	土壙11	28	烏丸線No.23	1
46	SE3	2	左京六条一坊八町	5,40
47	SE3	4	左京六条一坊八町	5,40
48	SE3	5	左京六条一坊八町	5,40
49	SE3	7	左京六条一坊八町	5,40
50	SE3	8	左京六条一坊八町	5,40
51	SE3	17	左京六条一坊八町	5,40
52	井戸17	16	烏丸線No.77	3
53	SE3	10	左京六条一坊八町	5,40
54	SE3	14	左京六条一坊八町	5,40
55	井戸206直上土壙	21	押小路殿跡3次	44
56	井戸206直上土壙	20	押小路殿跡3次	44
57	SE3	1	左京六条一坊八町	5,40
58	井戸206直上土壙	16	押小路殿跡3次	44
59	SE3	19	左京六条一坊八町	5,40
60	井戸206直上土壙	15	押小路殿跡3次	44

図-6　V期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SE8木枠内埋土	232	左京四条一坊六町	4
2	井戸12	46	高倉宮・曇華院跡4次	45
3	井戸12	43	高倉宮・曇華院跡4次	45
4	井戸12	25	高倉宮・曇華院跡4次	45
5	井戸17	4	烏丸線No.58	2
6	井戸6	57	烏丸線No.71	3
7	井戸6	59	烏丸線No.71	3
8	土壙1	7	烏丸線P.F区2E Ⅰ	3
9	井戸12	31	高倉宮・曇華院跡4次	45
10	井戸12	2	高倉宮・曇華院跡4次	45
11	土壙1	10	烏丸線P.F区2E Ⅰ	3
12	土壙1	14	烏丸線P.F区2E Ⅰ	3
13	井戸12	15	高倉宮・曇華院跡4次	45
14	土壙1	15	烏丸線P.F区2E Ⅰ	3
15	土壙1	16	烏丸線P.F区2E Ⅰ	3
16	井戸17	9	烏丸線No.58	2
17	SD300	23	左京八条三坊十六町	11
18	溝4-9	100	烏丸線No.73	3
19	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	3	烏丸線No.61	2
20	焼土層Ⅱ	14	烏丸線No.34	1
21	茶褐色泥砂層	30	烏丸線No.34	1
22	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	37	烏丸線No.61	2
23	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	39	烏丸線No.61	2
24	茶褐色泥砂層	29	烏丸線No.34	1
25	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	41	烏丸線No.61	2
26	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	42	烏丸線No.61	2
27	焼土層Ⅱ	10	烏丸線No.34	1
28	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	44	烏丸線No.61	2
29	SK10	253	左京四条一坊五町	4
30	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	45	烏丸線No.61	2
31	茶褐色泥砂層	39	烏丸線No.34	1
32	溝2-4	8	烏丸線No.61	2
33	溝7	29	高倉宮・曇華院跡4次	45
34	溝2-4	2	烏丸線No.61	2
35	溝2-4	3	烏丸線No.61	2
36	溝2-4	4	烏丸線No.61	2
37	溝2-4	7	烏丸線No.61	2
38	溝2-4	10	烏丸線No.61	2
39	溝2-4	12	烏丸線No.61	2
40	溝2-4	14	烏丸線No.61	2
41	溝2-4	16	烏丸線No.61	2
42	溝2-4	18	烏丸線No.61	2

図-7　Ⅵ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SD25	316	左京八条三坊七町	31
2	土壙26	10	烏丸線No.51	2
3	土壙26	1	烏丸線No.51	2
4	SD25	311	左京八条三坊七町	31
5	土壙26	2	烏丸線No.51	2
6	土壙26	7	烏丸線No.51	2
7	土壙26	14	烏丸線No.51	2
8	土壙26	15	烏丸線No.51	2
9	土壙26	17	烏丸線No.51	2
10	土壙26	19	烏丸線No.51	2
11	土壙26	20	烏丸線No.51	2
12	土壙26	21	烏丸線No.51	2
13	土壙26	22	烏丸線No.51	2
14	SG1-D	2	高陽院	14
15	土壙1	2	烏丸線P.D区33W Ⅱ	2
16	土壙1	3	烏丸線P.D区33W Ⅱ	2
17	土壙73	35	烏丸線No.72	3
18	土壙1	6	烏丸線P.D区33W Ⅱ	2
19	土壙73	37	烏丸線No.72	3
20	SG1-D	4	高陽院	14
21	土壙73	38	烏丸線No.72	3
22	土壙73	41	烏丸線No.72	3
23	土壙1	17	烏丸線P.D区33W Ⅱ	2
24	池跡	27	大谷高校法住寺殿	55
25	土壙73	42	烏丸線No.72	3
26	土壙73	44	烏丸線No.72	3
27	土壙34	8	烏丸線No.36	1
28	SE326	430	左京内膳町	47
29	土壙25	2	烏丸線No.60	2
30	土壙25	3	烏丸線No.60	2
31	土壙2-B	58	烏丸線No.48	2
32	土壙2-B	64	烏丸線No.48	2
33	土壙25	7	烏丸線No.60	2
34	土壙2-B	46	烏丸線No.48	2
35	土壙2-B	49	烏丸線No.48	2
36	土壙2-B	51	烏丸線No.48	2
37	土壙2-B	52	烏丸線No.48	2
38	土壙25	19	烏丸線No.60	2
39	土壙13	1	烏丸線No.49	2
40	土壙13	2	烏丸線No.49	2
41	土壙2-B	68	烏丸線No.48	2
42	土壙13	4	烏丸線No.49	2
43	土壙13	5	烏丸線No.49	2

図-8　Ⅶ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SK154	465	左京内膳町	47
2	井戸205	16	押小路殿跡3次	44
3	井戸205	19	押小路殿跡3次	44

土器出典リスト３

4	SK12	9	左京七条二坊一町	5
5	SK12	8	左京七条二坊一町	5
6	井戸205	18	押小路殿跡3次	44
7	SK12	10	左京七条二坊一町	5
8	SK12	11	左京七条二坊一町	5
9	SK12	12	左京七条二坊一町	5
10	井戸205	3	押小路殿跡3次	44
11	井戸205	27	押小路殿跡3次	44
12	SK12	1	左京七条二坊一町	5
13	SK12	2	左京七条二坊一町	5
14	土器集積土坑P.64	14	左京八条三坊七町	50
15	土器集積土坑P.64	13	左京八条三坊七町	50
16	SK12	4	左京七条二坊一町	5
17	SK86	48	左京九条三坊	25
18	SK12	5	左京七条二坊一町	5
19	SK12	6	左京七条二坊一町	5
20	SK12	7	左京七条二坊一町	5
21	井戸205	40	押小路殿跡3次	44
22	土壙2-A	10	烏丸線No.48	2
23	土壙2-A	2	烏丸線No.48	2
24	土壙51	70	烏丸線No.80	3
25	土壙2-A	4	烏丸線No.48	2
26	土壙2-A	7	烏丸線No.48	2
27	土壙2-A	9	烏丸線No.48	2
28	土壙2-A	12	烏丸線No.48	2
29	土壙2-A	17	烏丸線No.48	2
30	土壙2-A	18	烏丸線No.48	2
31	土壙51	74	烏丸線No.80	3
32	SE27	107	京大病院構内AJ18,19区	51
33	土壙51	75	烏丸線No.80	3
34	土壙51	76	烏丸線No.80	3
35	土壙15	5	烏丸線No.67	3
36	土壙15	6	烏丸線No.67	3
37	土壙51	77	烏丸線No.80	3
38	土壙15	8	烏丸線No.67	3
39	土壙2-A	25	烏丸線No.48	2
40	G8P2	13	左京八条三坊二町	42
41	SK10	582	白河北殿	54
42	土壙17	7	左京五条三坊十町	37
43	土壙17	8	左京五条三坊十町	37
44	井戸2	6	烏丸線No.41	2
45	井戸2	5	烏丸線No.41	2
46	井戸2	10	烏丸線No.41	2
47	土壙17	9	左京五条三坊十町	37
48	土壙17	10	左京五条三坊十町	37
49	土壙54	7	烏丸線No.50	2
50	井戸2	7	烏丸線No.41	2
51	井戸2	13	烏丸線No.41	2
52	土壙17	12	左京五条三坊十町	37
53	土壙3	2	烏丸線No.55	2
54	土壙17	13	左京五条三坊十町	37
55	井戸2	16	烏丸線No.41	2
56	井戸2	18	烏丸線No.41	2
57	井戸2	19	烏丸線No.41	2
58	土壙17	15	左京五条三坊十町	37

図-9　Ⅶ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SK533	70	左京四条三坊十三町	43
2	SK87	43	左京四条三坊十三町	43
3	土壙39	6	烏丸線No.72	3
4	G3P1	40	左京八条三坊二町	42
5	土壙39	9	烏丸線No.72	3
6	SK533	63	左京四条三坊十三町	43
7	土壙39	12	烏丸線No.72	3
8	土壙39	14	烏丸線No.72	3
9	土壙39	15	烏丸線No.72	3
10	SK533	61	左京四条三坊十三町	43
11	SK87	35	左京四条三坊十三町	43
12	G3P1	48	左京八条三坊二町	42
13	G3P1	38	左京八条三坊二町	42
14	土壙13下層	1	烏丸線No.37	1
15	土壙39	17	烏丸線No.72	3
16	土壙39	18	烏丸線No.72	3
17	土壙39	19	烏丸線No.72	3
18	SK87	26	左京四条三坊十三町	43
19	SK87	19	左京四条三坊十三町	43
20	土壙39	22	烏丸線No.72	3
21	土壙39	23	烏丸線No.72	3
22	土壙39	24	烏丸線No.72	3
23	土壙9	10	烏丸線No.78	3
24	土壙40	17	烏丸線No.71	3
25	土壙40	16	烏丸線No.71	3
26	土壙40	18	烏丸線No.71	3
27	土壙1	7	烏丸線P.G区22EⅡ	2
28	土壙40	19	烏丸線No.71	3
29	土壙1	9	烏丸線P.G区22EⅡ	2
30	土壙40	20	烏丸線No.71	3
31	土壙1	13	烏丸線P.G区22EⅡ	2
32	土壙40	21	烏丸線No.71	3
33	土壙40	30	烏丸線No.71	3
34	土壙40	31	烏丸線No.71	3
35	SK388	86	左京四条三坊十三町	43
36	土壙9	11	烏丸線No.78	3
37	土壙40	22	烏丸線No.71	3
38	土壙40	23	烏丸線No.71	3
39	土壙1	2	烏丸線P.G区22EⅡ	2
40	土壙9	19	烏丸線No.78	3
41	土壙40	24	烏丸線No.71	3
42	土壙40	2	烏丸線No.71	3
43	土壙1	15	烏丸線P.G区22EⅡ	2
44	土壙1	18	烏丸線P.G区22EⅡ	2
45	土壙40	28	烏丸線No.71	3
46	土壙21	24	烏丸線No.73	3
47	土壙21	25	烏丸線No.73	3
48	土壙21	26	烏丸線No.73	3
49	土壙21	27	烏丸線No.73	3
50	土壙21	59	烏丸線No.73	3
51	土壙21	30	烏丸線No.73	3
52	土壙21	31	烏丸線No.73	3
53	土壙21	32	烏丸線No.73	3
54	土壙21	34	烏丸線No.73	3
55	土壙6	14	烏丸線No.3	1
56	土壙6	13	烏丸線No.3	1
57	土壙21	36	烏丸線No.73	3
58	土壙21	41	烏丸線No.73	3
59	土壙21	39	烏丸線No.73	3
60	土壙21	42	烏丸線No.73	3
61	土壙21	43	烏丸線No.73	3
62	土壙21	44	烏丸線No.73	3
63	土壙21	46	烏丸線No.73	3
64	土壙21	47	烏丸線No.73	3
65	土壙21	48	烏丸線No.73	3
66	SE376	89	左京四条三坊十三町	43
67	土壙21	50	烏丸線No.73	3
68	SK14	390	左京八条三坊七町	31
69	SK14	391	左京八条三坊七町	31
70	SK14	392	左京八条三坊七町	31

図-10　Ⅸ期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	土壙D1	14	左京五条三坊十五町	41
2	土壙42	35	烏丸線No.80	3
3	土壙42	34	烏丸線No.80	3
4	土壙42	37	烏丸線No.80	3
5	土壙42	38	烏丸線No.80	3
6	土壙42	39	烏丸線No.80	3
7	土壙42	40	烏丸線No.80	3
8	土壙42	43	烏丸線No.80	3
9	土壙42	44	烏丸線No.80	3
10	土壙42	46	烏丸線No.80	3
11	土壙E	15	左京五条三坊十五町	41
12	土壙42	49	烏丸線No.80	3
13	土壙42	50	烏丸線No.80	3
14	土壙42	51	烏丸線No.80	3
15	土壙42	53	烏丸線No.80	3
16	土壙E	14	左京五条三坊十五町	41
17	土壙42	54	烏丸線No.80	3

土器出典リスト４

18	土壙42	56	烏丸線No.80	3
19	土壙42	57	烏丸線No.80	3
20	土壙42	58	烏丸線No.80	3
21	土壙42	59	烏丸線No.80	3
22	土壙42	62	烏丸線No.80	3
23	土壙42	60	烏丸線No.80	3
24	土壙42	64	烏丸線No.80	3
25	土壙42	65	烏丸線No.80	3
26	土壙12	1	烏丸線No.68	3
27	土壙12	2	烏丸線No.68	3
28	土壙12	3	烏丸線No.68	3
29	土壙12	4	烏丸線No.68	3
30	土壙12	11	烏丸線No.68	3
31	土壙12	5	烏丸線No.68	3
32	溝1	1	烏丸線No.73	3
33	溝1	2	烏丸線No.73	3
34	溝1	3	烏丸線No.73	3
35	溝1	5	烏丸線No.73	3
36	溝1	6	烏丸線No.73	3
37	溝1	8	烏丸線No.73	3
38	溝1	9	烏丸線No.73	3
39	土壙12	8	烏丸線No.68	3
40	溝1	10	烏丸線No.73	3
41	溝1	11	烏丸線No.73	3
42	溝1	12	烏丸線No.73	3
43	土壙12	9	烏丸線No.68	3
44	溝1	13	烏丸線No.73	3
45	土壙12	10	烏丸線No.68	3
46	溝1	15	烏丸線No.73	3
47	溝1	16	烏丸線No.73	3
48	溝1	17	烏丸線No.73	3
49	SK142	564	左京内膳町	47
50	SK141	557	左京内膳町	47
51	土壙4	3	烏丸線No.47	2
52	土壙4	6	烏丸線No.47	2
53	SK141	555	左京内膳町	47
54	土壙4	19	烏丸線No.47	2
55	土壙4	22	烏丸線No.47	2
56	土壙15	42	烏丸線No.51	2
57	土壙15	44	烏丸線No.51	2
58	土壙15	45	烏丸線No.51	2
59	土壙15	46	烏丸線No.51	2
60	土壙15	49	烏丸線No.51	2
61	土壙15	50	烏丸線No.51	2
62	土壙15	52	烏丸線No.51	2
63	土壙15	51	烏丸線No.51	2
64	土壙4	10	烏丸線No.47	2
65	土壙4	7	烏丸線No.47	2
66	土壙4	12	烏丸線No.47	2
67	土壙15	58	烏丸線No.51	2
68	土壙4	14	烏丸線No.47	2
69	土壙15	60	烏丸線No.51	2
70	土壙4	15	烏丸線No.47	2

図-11　X期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	土壙55	1	烏丸線No.80	3
2	土壙55	2	烏丸線No.80	3
3	土壙55	3	烏丸線No.80	3
4	土壙55	5	烏丸線No.80	3
5	土壙55	7	烏丸線No.80	3
6	土壙55	6	烏丸線No.80	3
7	土壙55	9	烏丸線No.80	3
8	土壙55	10	烏丸線No.80	3
9	土壙55	22	烏丸線No.80	3
10	SK400		左京北辺三坊五町	48
11	土壙55	12	烏丸線No.80	3
12	土壙55	14	烏丸線No.80	3
13	土壙55	13	烏丸線No.80	3
14	土壙55	15	烏丸線No.80	3
15	土壙55	17	烏丸線No.80	3
16	土壙55	16	烏丸線No.80	3
17	土壙4	21	烏丸線X-5	3
18	土壙4	22	烏丸線X-5	3
19	土壙55	18	烏丸線No.80	3
20	土壙4	24	烏丸線X-5	3
21	土壙55	20	烏丸線No.80	3
22	土壙4	27	烏丸線X-5	3
23	溝1	75	烏丸線No.62	3
24	土壙55	21	烏丸線No.80	3
25	土壙4	33	烏丸線X-5	3
26	土壙4	34	烏丸線X-5	3
27	溝1	76	烏丸線No.62	3
28	本圀寺濠上層	1702	本圀寺跡	36
29	濠3	40	烏丸線No.52	2
30	土壙2	2	烏丸線P.G区4WⅢ	2
31	SD31	3	室町殿隣接地立会RH18	23
32	SD31	1	室町殿隣接地立会RH18	23
33	本圀寺濠上層	1703	本圀寺跡	36
34	SD31	11	室町殿隣接地立会RH18	23
35	濠3	43	烏丸線No.52	2
36	本圀寺濠上層	1704	本圀寺跡	36
37	土壙7	7	烏丸線No.31	1
38	本圀寺濠上層	1705	本圀寺跡	36
39	土壙7	6	烏丸線No.31	1
40	土壙7	5	烏丸線No.31	1
41	本圀寺濠上層	1706	本圀寺跡	36
42	土壙2	16	烏丸線P.G区4WⅢ	2
43	土壙2	17	烏丸線P.G区4WⅢ	2
44	土壙7	2	烏丸線No.31	1
45	土壙7	1	烏丸線No.31	1
46	本圀寺濠上層	1707	本圀寺跡	36
47	土壙7	4	烏丸線No.31	1
48	土壙7	3	烏丸線No.31	1
49	SD41B	617	左京内膳町	47
50	濠2	2	烏丸線No.52	2
51	濠2	9	烏丸線X-2	2
52	濠2	5	烏丸線No.52	2
53	濠2	4	烏丸線No.52	2
54	濠2	7	烏丸線No.52	2
55	濠2	8	烏丸線No.52	2
56	濠1	4	烏丸線X-6	3
57	濠2	10	烏丸線No.52	2
58	濠2	11	烏丸線No.52	2
59	濠2	13	烏丸線No.52	2
60	濠2	12	烏丸線No.52	2
61	濠1	6	烏丸線X-6	3
62	濠2	15	烏丸線No.52	2
63	濠1	9	烏丸線X-6	3
64	濠2	19	烏丸線No.52	2
65	濠2	22	烏丸線No.52	2
66	濠1	3	烏丸線No.53	2
67	溝1	17	烏丸線No.13	1
68	溝1	18	烏丸線No.13	1
69	溝1	19	烏丸線No.13	1

図-12　XI期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	濠1	5	烏丸線No.15	1
2	土壙4	1	烏丸線No.39	2
3	土壙4	2	烏丸線No.39	2
4	井戸1	14	烏丸線No.54	2
5	井戸1	4	烏丸線No.54	2
6	SK18	113	左京一条二坊十五町	7
7	SK18	114	左京一条二坊十五町	7
8	SK18	115	左京一条二坊十五町	7
9	濠1	7	烏丸線No.15	1
10	SK18	118	左京一条二坊十五町	7
11	土壙4	6	烏丸線No.39	2
12	土壙4	8	烏丸線No.39	2
13	土壙4	7	烏丸線No.39	2
14	土壙4	10	烏丸線No.39	2
15	濠1	3	烏丸線No.15	1
16	濠1	1	烏丸線No.15	1
17	土壙4	11	烏丸線No.39	2
18	土壙4	12	烏丸線No.39	2
19	濠1	9	烏丸線No.15	1
20	土壙4	14	烏丸線No.39	2

土器出典リスト５

21	土壙4	13	烏丸線No.39	2
22	SK13	656	左京内膳町	47
23	土壙4	15	烏丸線No.39	2
24	土壙4	16	烏丸線No.39	2
25	SK13	664	左京内膳町	47
26	SE300	13	左京一条二坊十五町	7
27	SE300	14	左京一条二坊十五町	7
28	SE300	15	左京一条二坊十五町	7
29	SE300	16	左京一条二坊十五町	7
30	土壙1	2	烏丸線No.62	3
31	SE300	3	左京一条二坊十五町	7
32	SE300	4	左京一条二坊十五町	7
33	土壙1	3	烏丸線No.62	3
34	SE300	5	左京一条二坊十五町	7
35	SE300	8	左京一条二坊十五町	7
36	SE300	9	左京一条二坊十五町	7
37	土壙2	54	烏丸線No.39	2
38	SE300	7	左京一条二坊十五町	7
39	SE273	247	左京一条二坊十五町	7
40	土壙1	7	烏丸線No.62	3
41	SK468	211	左京一条二坊十五町	7
42	SE300	17	左京一条二坊十五町	7
43	土壙2	57	烏丸線No.39	2
44	SE300	18	左京一条二坊十五町	7
45	SK414	277	左京一条二坊十五町	7
46	SK414	278	左京一条二坊十五町	7
47	土壙3	25	烏丸線No.44	2
48	SK414	279	左京一条二坊十五町	7
49	SK414	280	左京一条二坊十五町	7
50	SK414	281	左京一条二坊十五町	7
51	SK414	282	左京一条二坊十五町	7
52	SK414	286	左京一条二坊十五町	7
53	SK414	285	左京一条二坊十五町	7
54	SK414	287	左京一条二坊十五町	7
55	SK414	284	左京一条二坊十五町	7
56	SK414	283	左京一条二坊十五町	7
57	SK414	288	左京一条二坊十五町	7
58	SK414	289	左京一条二坊十五町	7
59	SK414	290	左京一条二坊十五町	7
60	SK414	291	左京一条二坊十五町	7
61	SK414	292	左京一条二坊十五町	7
62	SK414	297	左京一条二坊十五町	7

図-13 XII期～XIV期

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SK339	32	左京四条三坊十三町	43
2	SK339	31	左京四条三坊十三町	43
3	SK50	335	大雲院跡	7
4	SK339	34	左京四条三坊十三町	43
5	SK50	336	大雲院跡	7
6	SK50	337	大雲院跡	7
7	SK50	338	大雲院跡	7
8	SK50	339	大雲院跡	7
9	SK50	340	大雲院跡	7
10	SK339	26	左京四条三坊十三町	43
11	SK339	27	左京四条三坊十三町	43
12	SK50	341	大雲院跡	7
13	SK50	342	大雲院跡	7
14	撹乱7	1	左京二条二坊十町	8
15	SD22	125	京大病院構内AH19区	52
16	撹乱7	2	左京二条二坊十町	8
17	撹乱7	3	左京二条二坊十町	8
18	撹乱7	4	左京二条二坊十町	8
19	SE96	799	左京内膳町	47
20	SE96	800	左京内膳町	47
21	SD22	118	京大病院構内AH19区	52
22	SD22	106	京大病院構内AH19区	52
23	SD22	105	京大病院構内AH19区	52
24	SD22	111	京大病院構内AH19区	52
25	撹乱7	6	左京二条二坊十町	8
26	SD22	104	京大病院構内AH19区	52
27	SD22	100	京大病院構内AH19区	52
28	撹乱7	7	左京二条二坊十町	8
29	SD22	103	京大病院構内AH19区	52
30	SE39	277	左京北辺三坊五町	48
31	SE39	276	左京北辺三坊五町	48
32	SF02直上火災層	796	左京内膳町	47
33	SD22	97	京大病院構内AH19区	52
34	SF02直上火災層	797	左京内膳町	47
35	SD22	96	京大病院構内AH19区	52
36	SK02	62	左京四条三坊十三町	43
37	SK02	63	左京四条三坊十三町	43
38	SK02	64	左京四条三坊十三町	43
39	SD2	17	京大教養部構内AP25区	51
40	SD2	16	京大教養部構内AP25区	51
41	SK02	59	左京四条三坊十三町	43
42	SK02	61	左京四条三坊十三町	43
43	SK02	60	左京四条三坊十三町	43
44	SX2	143	京大病院構内AJ18・19区	51
45	SK02	58	左京四条三坊十三町	43
46	SD2	12	京大教養部構内AP25区	51
47	SK02	56	左京四条三坊十三町	43
48	SD2	15	京大教養部構内AP25区	51
49	SK02	57	左京四条三坊十三町	43
50	SX2	140	京大病院構内AJ18・19区	51
51	SX10	203	京大病院構内AJ18・19区	51
52	SX10	205	京大病院構内AJ18・19区	51
53	SX10	202	京大病院構内AJ18・19区	51
54	SX2	137	京大病院構内AJ18・19区	51
55	SX2	138	京大病院構内AJ18・19区	51
56	SX10	198	京大病院構内AJ18・19区	51
57	修学院磐座採集	19	修学院磐座	55
58	修学院磐座採集	14	修学院磐座	55
59	修学院磐座採集	15	修学院磐座	55
60	修学院磐座採集	11	修学院磐座	55
61	修学院磐座採集	12	修学院磐座	55
62	修学院磐座採集	16	修学院磐座	55
63	修学院磐座採集	13	修学院磐座	55
64	修学院磐座採集	3	修学院磐座	55
65	修学院磐座採集	1	修学院磐座	55
66	修学院磐座採集	2	修学院磐座	55
67	修学院磐座採集	6	修学院磐座	55
68	修学院磐座採集	4	修学院磐座	55
69	修学院磐座採集	5	修学院磐座	55
70	修学院磐座採集	7	修学院磐座	55
71	修学院磐座採集	8	修学院磐座	55
72	修学院磐座採集	9	修学院磐座	55
73	SX1	49	京大病院構内AF19区	53

図-14　土師器その他の食器類（１）

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SD04	81	左兵衛府	13
2	SD04	86	左兵衛府	13
3	SD04	88	左兵衛府	13
4	SD04	89	左兵衛府	13
5	SD04	80	左兵衛府	13
6	SD04	90	左兵衛府	13
7	SX4・9	80	内裏外郭	15
8	SK1	29	中務省	19
9	SX4・9	80	内裏外郭	15
10	SD19	64	右京三条三坊五町	32
11	SD19	65	右京三条三坊五町	32
12	SD19	67	右京三条三坊五町	32
13	SK201	23	中務省	15
14	SD19	79	右京三条三坊五町	32
15	SD19	87	右京三条三坊五町	32
16	SD19	88	右京三条三坊五町	32
17	SD19	77	右京三条三坊五町	32
18	SD19	76	右京三条三坊五町	32
19	SK201	31	中務省	35
20	SD19	81	右京三条三坊五町	32
21	SD1・2	57	左京二条二坊冷然院	38

図-15　土師器その他の食器類（２）

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SE64	10	左京七条二坊一町	6
2	SX25	17	西市	39
3	SK09	5	右京三条四坊二町	19

土器出典リスト6

4	SK18	36	北野廃寺	26
5	SK2	24	東雅院	22
6	SX07	36	右京三条三坊三町	32
7	SK2	25	東雅院	22
8	SX07	39	右京三条三坊三町	32
9	SX03	89	一乗寺向畑町	28
10	SD01	9	左兵衛府	13
11	SD01	12	左兵衛府	13
12	SD01	13	左兵衛府	13
13	SX25	31	右京二条二坊十五町	17
14	SX25	32	右京二条二坊十五町	17
15	SX25	33	右京二条二坊十五町	17
16	SD23	105	右京二条三坊十五町	17
17	SD23	106	右京二条三坊十五町	17
18	SD15	87	右京二条三坊十五町	17
19	井戸1	15	烏丸線立17	2

図-16　主体を成す土師器以外の土師器食器類（1）

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SX4・9	1	内裏外郭	15
2	SK05	29	造酒司	33
3	SK05	24	造酒司	33
4	SK05	25	造酒司	33
5	SK05	27	造酒司	33
6	SD04	45	左兵衛府	13
7	SX4・9	63	内裏外郭	15
8	SD20	1	右京六条三坊四町	9
9	SD20	3	右京六条三坊四町	9
10	SD20	10	右京六条三坊四町	9
11	SD20	12	右京六条三坊四町	9
12	SK1	30	中務省	19
13	SD04	85	左兵衛府	13
14	SX4・9	73	内裏外郭	15
15	SX4・9	47	内裏外郭	15
16	SD04	43	左兵衛府	13
17	SK201	16	中務省	15
18	SK201	26	中務省	34
19	SK201	30	中務省	15
20	SD19	54	右京三条三坊五町	32
21	SD43	5	大覚寺御所跡	38
22	SD20	7	北野廃寺	10
23	SK10	54	右京三条四坊二町	19
24	SD20	9	北野廃寺	10
25	SD46下層	7	中務省	20
26	SK18	32	北野廃寺	26
27	井戸231	156	左獄	49
28	井戸231	147	左獄	49
29	SK01・07	11	内裏	24
30	SK01・07	9	内裏	24
31	SE03B	90	西市	39
32	隍23	30	平安宮西限	16
33	井戸1	20	烏丸線立17	2
34	井戸1	21	烏丸線立17	2
35	井戸1	35	烏丸線立17	2

図-17　主体を成す土師器以外の土師器食器類（2）

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	井戸A	5	左京五条三坊十五町	41
2	井戸D	7	左京五条三坊十五町	41
3	SK2	192	左京四条一坊五・六町	4
4	SK2	3	鳥羽離宮第88次東殿	6
5	SD1	7	鳥羽離宮第130次東殿	30
6	SD1	15	鳥羽離宮第130次東殿	30
7	SD1	8	鳥羽離宮第130次東殿	30
8	HL163	32	左京五条三坊HL163	21
9	溝28	29	鳥羽離宮第124次東殿	29
10	SX88		左京九条三坊	25
11	SX88	35	左京九条三坊	25
12	SK524	10	左京四条三坊十三町	43
13	暗灰褐色泥砂層Ⅲ	2	烏丸線No.57	2
14	暗灰褐色泥砂層Ⅲ	5	烏丸線No.57	2
15	SK2	5	鳥羽離宮第88次東殿	6
16	SK2	8	鳥羽離宮第88次東殿	6
17	SK118	370	左京内膳町	47
18	SD345上層	304	左京内膳町	47
19	SK86	49	左京九条三坊	25
20	SD345上層	293	左京内膳町	47
21	SD345上層	289	左京内膳町	47
22	SD345上層	314	左京内膳町	47
23	SD345上層	345	左京内膳町	47
24	井戸205	33	押小路殿第3次	44
25	井戸205	29	押小路殿第3次	44
26	井戸205	26	押小路殿第3次	44

図-1　白色土器食器類

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SX03	77	一乗寺向畑町	28
2	SX03	76	一乗寺向畑町	28
3	SX03	80	一乗寺向畑町	28
4		31	右京二条二坊十町	35
5	溝	162	鳥羽離宮第94次	35
6		1	成勝寺跡	12
7	暗茶褐色泥砂層Ⅱ	46	烏丸線No.61	2
8		2	成勝寺跡	12
9	落込7	189	左京四条三坊九町	46
10	Pit57	30	烏丸線No.60	2

図-18　大和産土師器食器類

番号	出土遺構	土器No.	遺跡	文献
1	SD202	1	淳和院	
2	SD202	13	淳和院	
3	SD202	11	淳和院	

烏丸線調査地点条坊対照表

烏丸線No.3	…左京一条三坊十一町
烏丸線No.13	…左京北辺三坊七町
烏丸線No.15	…左京一条三坊十二町
烏丸線No.23	…左京一条三坊十二町
烏丸線No.31	…内構町・上御霊町
烏丸線No.34	…左京六条三坊十三町
烏丸線No.36	…左京七条三坊十五町
烏丸線No.37	…左京七条三坊十四町
烏丸線No.39	…左京一条三坊十町
烏丸線No.41	…左京五条三坊十三町
烏丸線No.42	…左京一条三坊十二町
烏丸線No.44	…左京一条三坊十町
烏丸線No.47	…左京五条三坊十五町
烏丸線No.48	…左京五条三坊十五町
烏丸線No.49	…左京五条三坊十四町
烏丸線No.50	…左京五条三坊十三町
烏丸線No.51	…左京六条三坊十五町
烏丸線No.52	…左京一条三坊十～十一町
烏丸線No.53	…左京一条三坊十二町
烏丸線No.54	…左京一条三坊十二町
烏丸線No.55	…左京六条三坊十三～十四町
烏丸線No.58	…左京六条三坊十三町
烏丸線No.60	…左京二条三坊十三町
烏丸線No.61	…左京六条三坊十三町
烏丸線No.62	…左京三条三坊十四町
烏丸線No.67	…左京四条三坊十四町
烏丸線No.68	…左京四条三坊十四町
烏丸線No.71	…左京七条三坊十四町
烏丸線No.72	…左京七条三坊十四町
烏丸線No.73	…左京七条三坊十三～十四町
烏丸線No.77	…左京六条三坊十二町
烏丸線No.78	…左京二条三坊九町
烏丸線No.80	…左京五条三坊十町
烏丸線X-2	…左京一条三坊十町
烏丸線X-5	…左京六条三坊十三町
烏丸線X-6	…左京一条三坊十二町
烏丸線立14	…左京北辺三坊五町隣接地
烏丸線立17	…左京一条三坊十一町
烏丸線P.D区33WⅡ	…左京一条三坊十一町
烏丸線P.F区2EⅠ	…左京三条三坊十四町
烏丸線P.G区4WⅢ	…左京五条三坊十六町
烏丸線P.G区22EⅡ	…左京五条三坊十三町

出典文献一覧

1 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅰ　1974,75年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1980年
2 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ　1976年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1981年
3 『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅲ　1977～81年度』京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会、1982年
4 『平安京跡発掘調査報告　－左京四条一坊－』平安京調査会、1975年
5 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和57年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1984年
6 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和58年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1985年
7 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和59年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1987年
8 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和60年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1988年
9 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和61年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1989年
10 『京都市埋蔵文化財調査概要　昭和62年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1991年
11 『京都市埋蔵文化財調査概要　平成２年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1994年
12 『京都市埋蔵文化財調査概要　平成４年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年
13 『平安京跡発掘調査概報　京都市埋蔵文化財研究所概報集　1978-Ⅱ』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1978年
14 『平安京跡発掘調査概報　昭和56年度』京都市文化観光局、1982年
15 『平安京跡発掘調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局、1983年
16 『平安京跡発掘調査概報　昭和60年度』京都市文化観光局、1986年
17 『平安京跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
18 『平安京跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局、1988年
19 『平安京跡発掘調査概報　平成元年度』京都市文化観光局、1990年
20 『平安京跡発掘調査概報　平成５年度』京都市文化観光局、1994年
21 『京都市内遺跡試掘立会調査報告　昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター、1981年
22 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
23 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』京都市文化観光局、1990年
24 『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』京都市文化観光局、1991年
25 『平安京左京九条三坊跡 京都駅南口第一種市街地再開発事業に伴う埋蔵文化財調査概報　昭和54年度』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1980年
26 『北野廃寺跡発掘調査概報　昭和57年度』京都市文化観光局、1983年
27 『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
28 『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局、1987年
29 『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』京都市文化観光局、1988年
30 『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』京都市文化観光局、1990年
31 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第６冊　平安京左京八条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1982年
32 『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊　平安京右京三条三坊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1990年
33 『平安宮Ⅰ　京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1995年
34 『平安京跡発掘資料選』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1980
35 『平安京跡発掘資料選（二）』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1986
36 『史料京都の歴史２　考古』京都市編・平凡社、1983
37 『貿易陶磁研究No.３「６　京都出土の元末明初の青花と釉裏紅　永田信一」』日本貿易陶磁研究会、1983
38 『古代の土器１　都城の土器集成Ⅰ』古代の土器研究会編、1992年
39 『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編、1993年
40 『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会編、1994年
41 『平安京跡研究調査報告第５輯　平安京左京五条三坊十五町』(財)古代学協会、1981年
42 『平安京跡研究調査報告第６輯　平安京左京八条三坊二町』(財)古代学協会、1983年
43 『平安京跡研究調査報告第11輯　平安京左京四条三坊十三町－長刀鉾町遺跡－』(財)古代学協会、1984年
44 『平安京跡研究調査報告第12輯　平安京押小路殿跡第３次調査』(財)古代学協会、1984年
45 『平安京跡研究調査報告第18輯　高倉宮・曇華院跡４次調査』(財)古代学協会、1987年
46 『平安京提要』(財)古代学協会・古代文化研究所、1994年
47 『埋蔵文化財発掘調査概報1980年第３分冊　平安京（左京内膳町）昭和54年度発掘調査概要』京都府教育委員会
48 『京都府遺跡調査概報第27冊　平安京左京北辺三坊五町発掘調査概要』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1988年
49 『京都府遺跡調査概報第63冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター、1995
50 『平安京左京八条三坊七町　京都文化博物館（仮称）調査研究報告第1集』(財)京都文化財団、1988年
51 『京都大学構内遺跡調査研究年報　1986年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1989年
52 『京都大学構内遺跡調査研究年報　1989～1991年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1993年
53 『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター、1987年
54 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ　－白河北殿北辺の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター、1981年
55 『トレンチ第45号』京都大学考古学研究会、1994年
56 『大谷中・高等学校校内遺跡発掘調査報告書　昭和59年』大谷高等学校法住寺殿跡遺跡調査会、1984年
57 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所、1962年
58 『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所、1976年
59 『平城京東市跡推定地の調査Ⅹ第12次発掘調査概報』奈良市教育委員会、1991年
60 『第66回古代の土器研究会資料96.01.27「淳和院跡出土の土器について」』吉川義彦、1996年